令和４年度

四天王寺大学
四天王寺大学短期大学部
ＦＤ・SD報告書

編集・発行　ファカルティ・ディベロップメント(FD)委員会

スタッフ・ディベロップメント(SD)委員会

発　行　日　令和５年３月 31 日

目　　次

第 1 章

令和 4 年度 FD 活動の取り組みについて　……1

第 2 章

令和 4 年度学生による授業評価アンケートの実施結果　……8

第 3 章

各学科・専攻・コースによる FD 活動について ……17

第 4 章

本学における仏教教育について　……134

第 5 章

学生支援センターが取り組む学修支援について　……148

第 6 章

SD 活動の取り組みと今後の課題 ……152

規程

・ ファカルティ・ディベロップメント委員会規程 ……154
・ スタッフ・ディベロップメント委員会規程 ……155

第１章　令和４年度 FD 活動の取り組みについて

１．高等教育推進センターの設立

令和２年からの遠隔授業導入に伴い必要性が増す ICT 教育の充実化や、基礎教育の改善等を実施するため、令和３年４月１日付で高等教育推進センターが発足し、センター専任教員・兼務教員と高等教育推進課事務職員が協働して教育改革を推進している。

ＦＤ活動については、令和２年度までは教務部が担当していたが、令和３年度より高等教育推進センターが担当し、本学のＦＤ活動を推進していくこととなった。

２．令和４年度の取り組み

（１）学修成果の可視化

いわゆる「三つのポリシー」の作成・改善や学士課程プログラムの改訂には、学修成果の評価をもとに進めていく必要がある。そのためには、学修成果の可視化が不可欠であり、次のような調査・アンケート・アセスメントテスト等を実施している。これらの結果については、全教職員が閲覧できるようＩＢＵポータルに掲載している。

①　学生調査

冬学期の 11 月に全学生に対して web で実施した。回答率は大学（74.3%）、短大（87.7%）で、前年度と比較して大学は 11.0%・短大は 3.2%回答率がダウンしたが、ネットで回答率を公表している他大学と比較しても高い数値で推移している。

学生生活や学内施設・学生支援に対する満足度などを含めた総合的な調査だが、学修成果に関しては各学科等の教育目標達成度を測定・点検している。また、令和４年度より多くの学生や教職員が閲覧できるよう学内ＨＰにおいて結果を公開している。

令和４（2022）年度は、「和の精神（学園訓）」の実践や「卒業認定・学位授与方針」の達成度を問う設問を新たに設けた。

調査結果については、教育改革推進本部会議等でも報告され、各学科に対して授業時間外学習時間の改善策の検討を依頼した。今後も多くの学生の回答を得るため調査時期・期間、学生への周知方法、設問の設定等を必要に応じて改善する。

② ＰＲＯＧテスト

ＰＲＯＧテストとは、社会で求められる汎用的な能力・態度・志向を，実践的に問題を解決に導く力の「リテラシーテスト（知識を活用して課題を解決する力）」と，周囲の環境と良い関係を築く力の「コンピテンシーテスト（経験を積むことで身に付いた行動特性）」の２つの側面を測るテストで、学修成果を把握・点検し学生指導や授業改善に活かしていくことを目的に実施している。

令和４年度までは「リテラシーとコンピテンシー」の両方のテストを実施していたが、令和５年度より「コンピテンシーのみ」を実施することになった。主な理由としては、コンピテンシーと社会人基礎力は対応しており、社会的な場において成果を上げる資質・能力といえるためである。

③ 新入生アンケート

入学直後４月のオリエンテーション期間中に新入生に対して実施している。設問は全学部・学科共通設問、学部・学科等の独自設問で構成されている。内容としては入学時点での学習習慣、大学への期待・不安や、受験・入学に至るまでの行動等に関する調査・分析を行っており、アンケート結果は教育改革推進本部会議等でも報告される。

当年度の新入生の傾向を知り、どのような教育や支援を行えばいいのか参考にするだけではなく、入学者の傾向を把握し、今後の学生募集の改善や教育の質向上のための重要なデータとして活用している。そのため、毎年必要に応じた設問の改訂を行っている。

回答率は大学（97%）、短大（99%）で、ほぼ例年並みであった。

（２）学生による授業評価アンケート

学生による授業評価に関するアンケート結果は、第２章で詳しく分析されている。

平成30年度までの学生アンケート結果は、各教員の授業改善の意識を高めるために、夏学期と冬学期の２回、担当する科目の中から１科目だけ選択し実施してきた。なお専任教員については、各学期で第１期と第２期の２回に分けて実施、非常勤講師については第２期の１回のみ実施してきた。また、教員個人が授業改革に取り組んだ結果として、リフレクション・ペーパーの提出を求めてきた。

令和元年度からは、名称を「学生アンケート」から「授業評価アンケート」に改め、学生が所持するスマートフォンを活用し、IBU.net を通じて全科目（一部科目を除く）について授業評価アンケートを実施している。

令和４年度の回答率については、夏学期は大学60.76％（昨年度64.84％）、短大75.67％（73.41％）で、冬学期は大学59.72％（昨年度58.09％）、短大63.51％（72.30％）であった。夏学期・冬学期とも回答率は、ネットで公表している他大学の回答率と比較しても高い数値で推移しており、コロナ禍でオンライン授業やハイブリッド授業等が中心であったにも関わらず、多くの学生が熱心に回答してくれたようである。

夏学期については設問の改訂を行わなかったが、冬学期は設問の改訂を行い、新たに「学生の授業への意欲についての設問」及び「シラバスの到達目標の達成度についての設問」を設けた。

なお、令和４年度より多くの学生や教職員が閲覧できるよう学内ＨＰにおいて結果を公開している。

（３）相互授業参観

冬学期の１１月～１２月にかけて教職員による「相互授業参観」を実施している。原則として全教員は参観対象の授業をひとつ届け出て、参観対象授業一覧が全教職員に公表される。専

任教員だけでなく非常勤講師、事務職員も希望すれば授業を参観できる。参観者は授業担当者に参観コメントを提出し、授業担当者はそのコメントを今後の授業の参考とすることができる。また、授業によっては合評会が行われ、授業担当教員は教職員らの意見を聴取し、授業改善に活かせる。とくに令和４年度については、「数理・データサイエンス」「ファシリテーション」等を取り入れている授業をいくつか公開し、先生方に参観を推奨した。

なお、令和４年度は大学で 118 授業科目、短大で 22 授業科目が相互授業参観として公開され、多くの教職員が参観し授業改善への参考とした。

（４）ＦＤ研修会

①ＩＣＴ活用関連の講習会

令和４年度は ICT 関連の講習会を対面形式で、令和５年２月～３月にかけて４回実施した。内容としては、「教学情報一元化データを” Ｒ”を使って分析してみよう」「Excel の応用について」「障がいのある学生へのパソコン活用法」「動画を使って学習効果の向上と学習時間の確保を目指そう」であった。

②ＦＤ・ＳＤ合同研修会

本学では従来、FD 研修会と事務局全体研修会（SD 研究会）を別々に実施していたが、教育職員・事務職員が連携して今後取り組むべき課題を発見し、社会の変革に対応し、時代に則した教育を展開できる能力・資質を向上させることを目的とする教育職員・事務職員を対象とした「FD・SD 研修会」を令和４年度より開催した。

研修会は二部構成とし、第一部は積極的で適正な活用が望まれる「SNS の効果的な活用について」、第二部はメンタル疾患が増加していることから「メンタル疾患の予防と改善」を取り上げ、令和５年２月２１日に実施した。

	第一部	第二部
テーマ	「ＳＮＳの効果的な活用について」	「メンタル疾患の予防と改善」
時　　間	１３：００～１４：３０	１５：００～１６：５０
講　　師	㈱ミチバタ・ジャパン・リミテッド 代表取締役　道端　俊彦	ゴウクリニック 院長　渡辺　徹也

なお、「ＳＮＳの効果的な活用について」は、とくに各学科・部署より情報発信（広報、学生指導等）することが重要になるので、２月２１日の研修会受講後に下記の通り、少人数による実習研修会を別途実施した。

＜実習研修会＞

１．日　時　　令和５年２月２７日（月）９：００～１５：００　　※９０分×３コマ

３．内　容　　各種ＳＮＳ（Instagram、Line 等）の特徴、ＳＮＳへの登録

情報発信実習、コンテンツ作成（写真撮影、動画作成等）

４．講　師　　第一部と同じ

（５）教職員合同研修会

①令和４年度冬学期合同研修会

令和４年９月７日（水）14 時 30 分から 16 時 00 分までの時間枠で、全教職員参加の合同研修会を実施した。新型コロナ感染症の感染拡大リスクを回避するため、千数百名収容の大講堂で前後左右十分な間隔を空けた形での座席を設定し、例年より１時間弱程度短縮した内容で実施した。前半は「坂本常務理事および須原学長の挨拶」「原田学長補佐からの発表」、後半は「各部署からの発表・連絡」で構成されている。

〇プログラム

＜前半＞ １．坂本峰徳 常務理事「挨拶」

２．須原祥二 学長　　「挨拶」

３．原田保秀 学長補佐　　「令和４年度認証評価について」

＜後半＞

１．東隆史 入試・広報部長　「２０２３年度入試　総合型選抜の状況について」

２．浅田昇平 教務部長　　「冬学期の授業運営について」

３．伊達由実 学生支援センター長

「学園創立１００周年大学記念事業の進捗及び学生支援センターからの連絡」

４．川下維信 キャリアセンター長「２０２３年卒業予定者の内定状況について」

５．香川徹 事務局長　　「研究費不正防止について」

②令和５年度夏学期合同研修会

令和５年３月 28 日（火）前半（13：30～14：25）・後半（14：25～15：35）の時間枠で、令和５年度の新着任教職員を含む全教職員参加の合同研修会を実施した。令和４年度冬学期と同様に新型コロナ感染症の感染リスクを回避するため、千数百名収容の大講堂で前後左右十分な間隔を空けた形での座席を設定し、実施した。前半は先ず一居事務局長より「新任教員・事務職員の紹介」があり、次に「坂本常務理事の挨拶」、「須原学長の学長方針」があった。後半は各部署から発表が行われた。

○プログラム

＜前半＞

１．坂本峰徳 常務理事「挨拶」

２．須原祥二 学長　　「学長方針（２０２４年から２０３０年への展望)」

＜後半＞

１．東隆史 入試・広報部長　「２０２３年度入試の結果と今後の取り組みについて」

２．浅田昇平 教務部長　　「令和５年度授業運営について」

３．伊達由実 学生支援センター長　「学生支援センターからのお知らせとお願い」

４．川下維信 キャリアセンター長

「令和５年度キャリアセンターの体制とお願いについて」

５．松岡隆 高等教育推進センター長

「ベストティーチャー賞の概要及びラーニングコモンズについて」

６．鈴木正明 法人本部室長　「公益通報について」

第２章　令和４年度学生による授業評価アンケートの実施結果について

１．授業評価アンケートの実施方針

中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」（答申）（2008（平成 20）年 12 月 24 日）において「学生による授業評価の結果は、業績評価の指標としての信頼性に課題もあるが、教員の自己評価や職能開発の活動に生かすことは重要であると考える」（p.40）と指摘され、授業評価の教育面への活用が求められている。

本学においても 2006（平成 18）年度に学生アンケート委員会を設置し、学生アンケートの計画・実施を行った。その後 2008（平成 20）年度に学生アンケート委員会から FD 委員会に発展的改組を行い、以降についても試行錯誤しながら学生アンケートを実施してきた。

このような試みの中、全学的な授業改善に向けた教育評価を実施する上での枠組みとして、2010（平成 22）年度には、授業を実施する前の診断的評価、途中の形成的評価、最後の総括的評価という評価の活用方法について検討してきた。すなわち、診断的評価として、プレースメント・テストや第 1 期学生アンケート（2 回目の授業時）の実施、シラバスの内容の充実、そのシラバスの内容を受講生に理解させるための試み等を実施した。

また、形成的評価として 7、8 回目の授業時における第 2 期学生アンケートの実施、学習成果に関する中間テストの結果や学習者による自己評価の結果の活用、教員相互の授業参観による同僚評価等を行ってきた。

最後に、総括的評価として、授業に関する情報収集や授業に対する学生の評価や意識の測定のための第 3 期学生アンケート（14, 15 回目の授業時）の実施、定期試験やレポート等による学習面の成果の把握を行ってきた。2010（平成 22）年度だけではあるが、3 回の学生アンケートを実施することにより、教員に対する授業概要（シラバス）の重要性と学生への理解促進に向けた取り組みの意識付けを行った。

以上のような考えに基づき、本学では授業改善に向けた様々な対応を取ってきた。特に、診断的評価においては、その後は、1 年生入学時のプレースメント・テストの実施、シラバス内容の充実化、各授業のオリエンテーション時に授業担当者が授業概要（シラバス）の内容を受講生に周知徹底することを進めてきた。特に、平成 29 年度は、学生の学修成果の可視化の一環として、PROG テストをすべての１年生に実施した。そして、これまでと同様に、形成的評価と総括的評価については、本章で述べる学生アンケートを学期中に２度実施してきた。

２回の学生アンケートの利用方法として、本学では、これまでに PDCA サイクルによる改善を目ざしてきた。すなわち、授業を計画［P（Plan）］し、実施［D（Do）］し、確認［C（Check）］し、改善［A（Act）］するという PDCA サイクルによる授業改善を進めてきたのである。大学の授業の場合、シラバスが授業の計画（P）になり、授業を実施（D）し、途中で教員と学生の間で教員は学生から見て授業が適切にわかりやすく実施されているか、学生は授業に積極的に参加しているかを相互に確認（C）しあうことになる。ここで確認した結果をもとに教員と学生の双方で改善（A）し、

学生の学習内容の理解がさらに進み、単位の修得へとつながることを目ざしてきた。

また、中央教育審議会 2012（平成 24）年 8 月 28 日「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」では、学生の学修時間の実質的な増加・確保が、教育課程の体系化、組織的な教育の実施、授業計画（シラバス）の充実、全学的な教学マネジメントの確立の諸方策と連なって進められる必要があることが指摘されている。学生アンケートは、教育職員が学生からの意見を聴取し、学生の学習時間の実質的な増加に向けて、資料を収集する手段になりうるものである。そこで、特に 2012（平成 24）年度からは、授業時間以外の学習時間を測定する項目を新たに加え、本年度も次節に示した学生アンケートの実施目的を遂行すべく改善に努めた。

令和元年度からは、授業評価アンケートと名称を改め、平成 30 年度までの学生アンケートの質問項目について、学生が所有するスマートフォンを活用し、IBU.net を通じて原則として全科目の授業アンケートを実施した。翌令和２年度については、前年度の方法を採用しつつ、遠隔授業に対応して設問を一部修正した上で実施した。

令和３年度には、授業の改善点を従来以上に抽出できる設問にするための議論を行った。その結果、授業の改善点が絞りやすい設問にするという点と、一定程度のデータの散らばりを生じさせることを目指すこととした。例えば、「あなたはこの授業を意欲的に受けたと思いますか」という従来の設問には主観に左右される「意欲的」という語が用いられている。そこで「授業で学んだ内容をもとに、自分で調べたり考えたりしましたか」と行動の変容を問う設問に切り替え、客観性の向上を図った。

令和４年度は、令和３年度の設問を基本としたが、教員の指導に対する学生の姿勢の抽出と、自由記述でよかった点と改善につながる点との切り分け方について議論した。その結果「この授業について、担当教員の指導に沿って意欲的に取り組みましたか」という設問を加えると共に、自由記述から授業の特徴を抽出しやすくするために、複数の設問に分けることとした。

令和４年度の実施について、夏学期については、新しいアンケートについての更なる議論を継続したため、自由記述を分けた点を除いて、従来とほぼ同じ設問項目で実施した。冬学期については、議論を重ねて追加した設問項目を入れたアンケートを実施した。以下、全学的な授業改善に向けた取り組みによって明らかになった傾向と課題について報告する。

２．授業評価アンケート実施目的

本学では、授業評価アンケートの実施により、以下の二点の達成を目ざしている。

第一に、授業評価アンケートの活用により、授業の改善が進み、シラバスに明示された到達目標が意識され、授業外学習時間も増加することで、学生の単位修得が促進されることを目ざしている。その結果、セメスターごとに決められている履修上限（キャップ制）の制度が機能し、セメスターごとの学生の達成感や知識・技能を身につけることができたという有能感も高まることが期待される。

第二に、全体的に学生の単位修得が進むことで大学全体の GPA は上昇し、大学全体の教育力を示す指標としての GPA 制度が機能することを目ざしている。本学で導入されているセメスター制、キャップ制、GPA 制度は、それぞれ別個の制度ではなく、教員による教育の改善と学生の学習の成果の向上とに関連してそれぞれの制度が関係しながら、機能していくものと考えられる。

以上のことを踏まえ、授業評価アンケートによる授業改善の目標として、「学生の意見に耳を傾けることにより、学生にとって理解しやすい授業の実施に向けた工夫を進める」「学生の授業に対する態度や学生自身の学びに対する自己認識を深める」の二点を設定し、アンケートを実施した。

３．授業評価アンケートの実施方法

令和４年度は、専任教員・非常勤講師を問わず、学期の第 14 回または 15 回の講義時に、IBU.net を通じて授業評価アンケートを実施した。各教員は、授業評価アンケートの趣旨等の説明文を共有し、講義内でそれを資料または口頭で説明して、学生にアンケートの回答を求めた。またアンケート回答の総計は、IBU.net で集計され、その結果について各科目単位で教員が改善コメントを入力した。授業評価アンケートの選択設問項目は、夏学期が表 1、冬学期が表２の通りである。

表 1　授業評価アンケートの設問項目（夏学期）

設問内容	（評価値）回答内容
1. 授業での先生の説明は，分かりやすかったですか。	(5)：そう思う　(4)：少しそう思う　(3)：どちらともいえない　(2)：あまりそう思わない　(1)：そう思わない
2. 授業の資料やスライドは分かりやすかったですか。	(5)：そう思う　(4)：少しそう思う　(3)：どちらともいえない　(2)：あまりそう思わない　(1)：そう思わない
3. 授業の学習効果を高めるためにパソコン、スマホやインターネット等のICTが活用されていましたか。	(5)：そう思う　(4)：少しそう思う　(3)：どちらともいえない　(2)：あまりそう思わない　(1)：そう思わない
4. 先生は，授業中の問いかけや小テスト・課題などによって，学生の理解度を確かめながら授業を進めていましたか。	(5)：そう思う　(4)：少しそう思う　(3)：どちらともいえない　(2)：あまりそう思わない　(1)：そう思わない
5. 学生同士や教員との間で意見や考えを伝え合う機会があったと思いますか。	(5)：そう思う　(4)：少しそう思う　(3)：どちらともいえない　(2)：あまりそう思わない　(1)：そう思わない
6. 授業で扱った内容に深く興味・関心を持つようになりましたか。	(5)：そう思う　(4)：少しそう思う　(3)：どちらともいえない　(2)：あまりそう思わない　(1)：そう思わない
7. 授業で学んだ内容をもとに，自分で調べたり考えたりしましたか。	(5)：そう思う　(4)：少しそう思う　(3)：どちらともいえない　(2)：あまりそう思わない　(1)：そう思わない
8. 毎回の授業について、予習復習や課題作成にかけた時間をすべて合わせて、平均してどれくらい学習しましたか。	(5)：4.5時間より多い　(4)：4.5時間以内　(3)：3時間以内　(2)：1.5時間以内　(1)：30分以内
9. あなたは，履修要覧の授業科目編成表にあるディプロマ・ポリシーの「身につけるべき能力」をよく読んだ上で，この授業を受講しましたか。	(5)：そう思う　(4)：少しそう思う　(3)：どちらともいえない　(2)：あまりそう思わない　(1)：そう思わない
10. あなたは，総合的に判断して，この授業を受講して良かったと思いますか。	(5)：そう思う　(4)：少しそう思う　(3)：どちらともいえない　(2)：あまりそう思わない　(1)：そう思わない

表 2　授業評価アンケートの設問項目（冬学期）

設問内容	（評価値）回答内容
1. 授業での先生の説明は，分かりやすかったですか。	(5)：そう思う　(4)：少しそう思う　(3)：どちらともいえない　(2)：あまりそう思わない　(1)：そう思わない
2. 授業の資料やスライドは分かりやすかったですか。	(5)：そう思う　(4)：少しそう思う　(3)：どちらともいえない　(2)：あまりそう思わない　(1)：そう思わない
3. 授業の学習効果を高めるためにパソコン、スマホやインターネット等のICTが活用されていましたか。	(5)：そう思う　(4)：少しそう思う　(3)：どちらともいえない　(2)：あまりそう思わない　(1)：そう思わない
4. 先生は，授業中の問いかけや小テスト・課題などによって，学生の理解度を確かめながら授業を進めていましたか。	(5)：そう思う　(4)：少しそう思う　(3)：どちらともいえない　(2)：あまりそう思わない　(1)：そう思わない
5. 学生同士や教員との間で意見や考えを伝え合う機会があったと思いますか。	(5)：そう思う　(4)：少しそう思う　(3)：どちらともいえない　(2)：あまりそう思わない　(1)：そう思わない
6. 授業で扱った内容に深く興味・関心を持つようになりましたか。	(5)：そう思う　(4)：少しそう思う　(3)：どちらともいえない　(2)：あまりそう思わない　(1)：そう思わない
7. 授業で学んだ内容をもとに，自分で調べたり考えたりしましたか。	(5)：そう思う　(4)：少しそう思う　(3)：どちらともいえない　(2)：あまりそう思わない　(1)：そう思わない
8. この授業について、担当教員の指導に沿って意欲的に取り組みましたか。	
9. 毎回の授業について、予習復習や課題作成にかけた時間をすべて合わせて、平均してどれくらい学習しましたか。	(5)：4.5時間より多い　(4)：4.5時間以内　(3)：3時間以内　(2)：1.5時間以内　(1)：30分以内
10. この授業を受けて、シラバスに示されている到達目標にどの程度到達できたと思いますか。	(5)：そう思う　(4)：少しそう思う　(3)：どちらともいえない　(2)：あまりそう思わない　(1)：そう思わない
11. あなたは，総合的に判断して，この授業を受講して良かったと思いますか。	(5)：そう思う　(4)：少しそう思う　(3)：どちらともいえない　(2)：あまりそう思わない　(1)：そう思わない

各設問項目のねらいは次の通りである。

アンケート全体を、授業の分かりやすさ、ICT 活用の有無、アクティブラーニング要素の有無、学生意欲の変化、学習時間を問う、履修に際しての学生の姿勢、授

業全体の統括、という内容で構成している。

授業の分かりやすさに対して、設問１「授業での先生の説明は、分かりやすかったですか。」、設問２「授業の資料やスライドは分かりやすかったですか。」と２つの設問に分け、改善点を絞るようにしている。設問３「授業の学習効果を高めるためにパソコン、スマホ、インターネット等の ICT が活用されていましたか。」では、授業改善に ICT 活用の有無という視点を取り入れている。設問４「先生は、授業中の問いかけや小テスト・課題などによって、学生の理解度を確かめながら進めていましたか。」と設問５「学生同士や教員との間で意見や考えを伝え合う機会があったと思いますか。」では、「主体的・対話的で深い学び」を導くアクティブラーニング要素の有無を問うている。設問６「授業で扱った内容に深く興味・関心を持つようになりましたか」と設問７「授業で学んだ内容を元に、自分で調べたり考えたりしましたか。」では、授業を受けたことによる学生意欲の変化を問うことで学習効果を検証する材料としている。設問８「毎回の授業について、予習復習や課題作成にかけた時間をすべて合わせて、平均してどれくらい学習しましたか。」については、学習時間を問う設問にしている。設問９「この授業を受けて、シラバスに示されている到達目標にどの程度到達できたと思いますか。」については、昨年度のディプロマポリシーや履修に際しての学生の姿勢を引き継ぐ形で「シラバスの理解」という視点を取り入れている。設問１０「あなたは総合的に判断してこの授業を受講して良かったと思いますか。」は、授業全体の統括をする設問としている。

集計は、「１：(そう思う)」が 5 点、「2：(少しそう思う)」が 4 点、「3：(どちらともいえない)」が 3 点、「4：(あまりそう思わない)」が 2 点、「1：(思わない)」が１点で採点している。これらの選択設問に加え、自由記述として「この授業で良かった点があれば書いてください。」「この授業の改善につながるような意見があれば書いてください。」「その他，自由に感想を書いてください。但し、単なる批判や誹謗中傷は慎んでください。」という 3 設問を設定して、授業の特徴が抽出しやすい形にした。

（１）夏学期授業評価アンケート

夏学期は、第 14 回または 15 回の講義時にあたる令和 4 年 7 月 15 日（金）～7 月 28 日（木）を授業評価アンケート期間として設定し、受講している学生に IBU.net を通じて回答を求めた。その後、授業評価アンケートの集計が完了した令和 4 年 8 月 1 日（月）～8 月 15 日（月）を、改善コメントの入力期間として設定し、各科目を担当する教員に IBU.net を通じて回答を求めた。

（２）冬学期授業評価アンケート

冬学期は、第 14 回または 15 回の講義時にあたる令和 4 年 12 月 23 日（金）～令和 5 年 1 月 21 日（土）を授業評価アンケート期間として設定し、受講している学生に IBU.net を通じて回答を求めた。その後、授業評価アンケートの集計が完了した令和 5 年 1 月 23 日（月）～2 月 6 日（月）を、改善コメントの入力期間として設

定し、各科目を担当する教員に IBU.net を通じて回答を求めた。

４．集計結果と授業評価アンケートの結果に対する対応

（１）夏学期授業評価アンケートの授業数・回答数・回答率等について

夏学期授業評価アンケートの授業数・回答者数・回答率は表 2 の通りである。回答率については、大学合計 60.76%（前年度 64.84%）、短大合計 75.67%（同 73.41%）、総計 62.26%（前年度 65.71%）となった。

表 3　夏学期授業評価アンケートの実施授業数・回答者数・回答率

【実施科目数等】

	授業担当教員の所属	授業数	受講者数	回答者数	回答率（%）
大学	和の精神Ⅰ／仏教Ⅰ（瞑想）【大学】	1	969	666	68.73%
	日本学科	70	1,709	1,081	63.25%
	国際キャリア学科	66	1,530	945	61.76%
	社会学科	87	4,260	2,251	52.84%
	人間福祉学科	63	1,527	879	57.56%
	教育学科小学校教育コース	144	4,372	2,800	64.04%
	教育学科中高英語教育コース	35	732	398	54.37%
	教育学科保健教育コース	19	683	527	77.16%
	教育学科幼児教育保育コース	53	1,623	1,009	62.17%
	経営学科　公共経営専攻	36	1,105	677	61.27%
	経営学科　企業経営専攻	60	2,763	1,760	63.70%
	看護学科	50	1,925	1,150	59.74%
	高等教育推進センター	11	1,042	664	63.72%
	大学非常勤	434	17,176	10,359	60.31%
	大学合計	1,129	41,416	25,166	60.76%
短大	和の精神Ⅰ／仏教Ⅰ（瞑想）【短大】	1	169	147	86.98%
	保育科	46	1,735	1,223	70.49%
	ライフデザイン学科	32	895	830	92.74%
	生活ナビゲーション学科ライフケア専攻	22	457	267	58.42%
	短大非常勤	42	1,355	1,022	75.42%
	短大合計	143	4,611	3,489	75.67%
	総合計	1,272	46,027	28,655	62.26%

集計された授業評価アンケートの結果は、IBU.net を通じて科目担当者に公開された。その後、全科目担当者に対して IBU.net を通じて授業に関する改善コメントの記入を求めた。授業評価アンケートの集計結果及び科目担当者の改善コメント内容は、学生が閲覧できるように、印刷した一覧を図書館で公開した。

（２）夏学期授業評価アンケート集計結果について

夏学期授業評価アンケートの各設問に対する回答結果の平均値は、表 4 の通りである。

表 4　夏学期授業評価アンケートの回答結果（平均値）

	授業担当教員の所属	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
大学	和の精神Ⅰ／仏教Ⅰ（瞑想）【大学】	4.24	4.31	3.97	3.32	2.73	3.86	3.42	1.66	3.56	4.02
	日本学科	4.34	4.28	4.17	4.22	4.20	4.30	4.24	2.57	4.10	4.38
	国際キャリア学科	4.30	4.31	4.18	4.18	4.11	4.19	4.04	1.94	4.02	4.31
	社会学科	4.41	4.37	4.36	4.16	3.80	4.29	4.17	2.43	4.06	4.44
	人間福祉学科	4.19	4.13	3.91	4.01	3.86	4.10	3.87	1.70	3.77	4.24
	教育学科小学校教育コース	4.43	4.37	4.32	4.31	4.41	4.38	4.16	1.99	3.81	4.49
	教育学科中高英語教育コース	3.99	4.14	4.31	3.97	4.08	3.98	3.97	2.14	3.63	4.05
	教育学科保健教育コース	4.16	4.22	4.05	3.66	3.63	4.22	4.08	1.96	3.76	4.39
	教育学科幼児教育保育コース	4.02	3.96	4.07	3.98	4.22	4.10	4.05	2.17	3.60	4.18
	経営学科　公共経営専攻	4.27	4.20	4.04	4.07	3.70	4.08	3.96	1.88	3.97	4.24
	経営学科　企業経営専攻	4.32	4.30	4.08	4.23	4.00	4.24	4.16	2.17	4.06	4.33
	看護学科	4.34	4.32	4.15	4.26	4.45	4.29	4.30	2.45	3.95	4.45
	高等教育推進センター	4.23	4.39	4.71	4.21	3.98	4.03	4.10	2.34	3.64	4.32
	大学非常勤	4.25	4.16	4.01	4.11	3.91	4.13	3.97	1.97	3.83	4.29
	大学平均	4.29	4.23	4.12	4.12	3.98	4.19	4.04	2.06	3.86	4.33
短大	和の精神Ⅰ／仏教Ⅰ（瞑想）【短大】	4.07	4.18	4.21	3.40	2.82	3.63	3.03	1.44	3.38	3.93
	保育科	4.43	4.45	4.33	4.24	4.17	4.27	3.87	1.61	3.86	4.44
	ライフデザイン学科	4.37	4.40	4.07	4.18	3.83	4.17	3.85	1.71	3.86	4.41
	生活ナビゲーション学科ライフケア専攻	4.61	4.36	3.88	4.35	4.42	4.53	4.04	1.79	3.84	4.63
	短大非常勤	4.43	4.38	4.14	4.33	4.08	4.33	4.05	1.62	3.91	4.47
	短大平均	4.43	4.36	4.13	4.23	4.06	4.28	3.92	1.66	3.80	4.44
	総平均	4.30	4.25	4.12	4.13	3.99	4.20	4.02	2.01	3.86	4.34

学習時間を問うた設問 8（「毎日の授業時間について、予習復習や課題作成にかけた時間をすべて合わせて、平均してどれくらい学習しましたか」）以外は、評価平均点が概ね 4.00 ポイントを超えていている。このことから、学生は意欲的に学習に取り組み、教員の授業への工夫等も正当に評価されていることが窺える。特に、設問 10（「あなたは総合的に判断して、この授業を受講して良かったと思いますか。」）については、大学も短期大学もそれぞれに高いポイントとなっていて、全体的に学生にとっても満足度の高い授業が実施されていると考えられる。

一方、設問 8（「毎日の授業時間について、予習復習や課題作成にかけた時間をすべて合わせて、平均してどれくらい学習しましたか」）については、全ての学部・学科で 3.00 ポイントを下回っている。このことは、多くの学生が一つの授業に対し、その授業時間を含めても 3 時間以内または 1.5 時間以内しか勉強していないということを示している。つまり、授業時間以外に行なっている学習時間は極めて短いものであるため、授業時間以外に学習をさせるための手立てを講じる必要がありそうである。

上述した通り、授業評価アンケートの集計後には、IBU.net を通じて各教員に対して改善コメントの記入を求めた。また、「この授業の改善につながると思われる意見や感想を具体的に書いてください。」とした自由記述の回答結果については、担当者・担当科目を匿名化した上で、学科ごとに整理し、各 FD 委員によって傾向と課題が各学科に報告されている。

（３）冬学期授業評価アンケートの授業数・回答数・回答率等について

冬学期授業評価アンケートの授業数・回答者数・回答率は表５の通りである。回答率については、大学合計 59.72%（昨年度冬学期 56.09%）、短大合計 63.51%（同 72.30%）、総計 60.11%（同 59.56%）となった。

なお、集計された授業評価アンケートの結果を受けて、全科目担当者に対して IBU.net を通じて授業に関する改善コメントの記入を求めた。また、授業評価アンケートの集計結果及び科目担当者の改善コメントの内容は、学生が閲覧できるように、印刷した一覧を図書館で公開した。

表　5　冬学期授業評価アンケートの実施授業数・回答者数・回答率

授業担当教員の所属	授業数	受講者数	回答者数	回答率（%）
和の精神ＩＩ／仏教ＩＩ（写経）	1	970	651	67.11%
日本学科	59	1,414	845	59.76%
国際キャリア学科	58	1,003	639	63.71%
社会学科	83	4,254	2,161	50.80%
人間福祉学科	61	1,191	666	55.92%
教育学科小学校教育コース	109	3,681	2,214	60.15%
教育学科中高英語教育コース	33	624	309	49.52%
教育学科保健教育コース	27	1,091	748	68.56%
教育学科幼児教育保育コース	48	1,354	832	61.45%
経営学科　公共経営専攻	33	1,200	764	63.67%
経営学科　企業経営専攻	63	2,616	1,629	62.27%
看護学科	33	861	462	53.66%
高等教育推進センター	14	286	174	60.84%
大学非常勤	404	14,193	8,651	60.95%
大学合計	1,026	34,738	20,745	59.72%
和の精神ＩＩ／仏教ＩＩ（写経）	1	158	119	75.32%
保育科	35	1,249	626	50.12%
ライフデザイン学科	32	711	610	85.79%
生活ナビゲーション学科ライフケア専攻	21	371	214	57.68%
短大非常勤	43	1,466	943	64.32%
短大合計	132	3,955	2,512	63.51%
総合計	1,158	38,693	23,257	60.11%

（４）冬学期授業評価アンケート結果について

冬学期授業評価アンケートの各設問に対する回答結果の平均値は、表６の通りである。全体にデータにばらつきが生まれ、授業毎の特徴が抽出されていることがわかる。

表　6　冬学期授業評価アンケートの回答結果（平均値）

授業担当教員の所属	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
和の精神ＩＩ／仏教ＩＩ（写経）	4.18	4.17	4.12	3.57	3.08	3.85	3.54	4.19	2.08	4.10	4.12
日本学科	4.34	4.24	4.26	4.24	4.26	4.26	4.36	4.49	2.67	4.26	4.39
国際キャリア学科	4.40	4.40	4.33	4.31	4.34	4.28	4.31	4.37	2.37	4.26	4.42
社会学科	4.33	4.33	4.34	4.12	3.81	4.21	4.13	4.32	2.58	4.11	4.33
人間福祉学科	4.16	4.11	3.90	4.11	4.16	4.17	4.05	4.21	2.11	4.04	4.30
教育学科小学校教育コース	4.38	4.34	4.35	4.30	4.43	4.37	4.27	4.44	2.24	4.24	4.47
教育学科中高英語教育コース	4.07	4.15	4.40	4.06	4.27	4.15	4.20	4.37	2.27	4.17	4.27
教育学科保健教育コース	4.30	4.32	4.16	4.08	3.81	4.25	4.06	4.32	2.08	4.13	4.39
教育学科幼児教育保育コース	4.27	4.16	4.21	4.14	4.25	4.26	4.14	4.40	2.18	4.20	4.37
経営学科　公共経営専攻	4.38	4.33	4.16	4.25	3.91	4.25	4.16	4.31	2.06	4.15	4.36
経営学科　企業経営専攻	4.28	4.27	4.15	4.19	3.95	4.20	4.17	4.22	2.10	4.06	4.28
看護学科	4.10	4.10	3.99	4.12	4.21	4.21	4.25	4.35	2.31	4.22	4.35
高等教育推進センター	4.36	4.35	4.66	4.37	4.22	4.18	4.20	4.43	2.33	4.06	4.31
大学非常勤	4.23	4.15	4.05	4.12	3.93	4.13	4.02	4.28	2.06	4.08	4.27
大学平均	**4.28**	**4.23**	**4.16**	**4.15**	**4.01**	**4.20**	**4.10**	**4.32**	**2.19**	**4.13**	**4.33**
和の精神ＩＩ／仏教ＩＩ（写経）	4.12	4.09	4.25	3.50	3.08	3.77	3.44	4.25	1.81	4.04	3.97
保育科	4.54	4.48	4.39	4.33	4.15	4.41	4.14	4.49	1.67	4.29	4.56
ライフデザイン学科	4.43	4.48	4.20	4.24	4.03	4.36	4.09	4.32	1.99	4.01	4.40
生活ナビゲーション学科ライフケア専攻	4.65	4.25	3.86	4.34	4.50	4.57	4.11	4.66	1.75	4.27	4.71
短大非常勤	4.42	4.34	4.23	4.17	4.07	4.32	4.01	4.36	1.80	4.16	4.47
短大平均	**4.45**	**4.32**	**4.19**	**4.19**	**4.08**	**4.33**	**4.00**	**4.43**	**1.75**	**4.19**	**4.46**
総平均	**4.30**	**4.24**	**4.16**	**4.15**	**4.02**	**4.21**	**4.09**	**4.33**	**2.14**	**4.14**	**4.34**

まず、設問１・設問２の授業のわかりやすさと設問４・設問５のアクティブラーニング要素については、ほとんどの学科の平均が４ポイントを超えていて、学生にとってのわかりやすく活動的な授業が大学全体で展開されていることがわかる。

一方で、設問５（「学生同士や教員との間で意見や考えを伝え合う機会があったと思いますか。」）については、他の設問に比べるとデータのばらつきは全体的に大きく、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた貴重な資料になり得ると考えられる。設問３の ICT 活用の有無については、どの学部のポイントも高く、授業改善に向けて ICT が積極的に活用されてきたことが示された。

設問６・設問７の学習意欲の変化と、設問 10 の授業全体の統括については、どの学科もそれぞれに高いポイントを指していて、これまでと同様に満足度の高い授業が実践されていた様子が窺えた。設問９の学習時間については、どの学科も夏学期に比べると概ね増加傾向にある。このことについては、学生の学習意欲向上や教員の授業法の改善がみられたことなど複数の要因が考えられるため、今後各学科等で改めて議論を継続する必要があろう。

以上、令和４年度の授業アンケートの結果を概観した。今後は学部学科を越えて、情報を共有する取り組みが課題となろう。近年のデジタル社会に向けた教育改革の動向を踏まえて、新しい教育方法の開発と共有も重要課題であるため、これらのアンケート結果を活かした、組織的な取り組みがより重要になると考えている。

５．今後の課題

平成 21 年度以降、今後の課題として、第一に、授業概要（シラバス）の記述内容を見直していくこと、第二に、学生アンケートの結果とリフレクション・ペーパーの活用の２点を掲げて取り組みを行ってきた。

今年度もほとんどの科目について授業評価アンケートを実施し、全学的な課題等は把握できたものの、具体的な授業改善については、各科目担当に委ねられている状況である。また、学生の授業に対する態度や学生自身の学びに対する自己認識については、数値上は一定の成果がみられるが、学修成果に結びついているかについては、検証が必要である。上述したように、各科目単位での授業改善だけでなく、学科単位での授業改善や学生と協働した授業改善等、組織的な授業改善の取り組みが重要であり、今後、FD 委員会を中心とした組織的な検討がより重要になろう。

なお、デジタル社会に応じた授業のあり方が問われる現在においては、FD 活動の充実がより重要になる。従来から取り組んできた授業概要（シラバス）のあり方やリフレクション・ペーパーの活用等による学生とのコミュニケーションの改善についても、授業形態に応じた工夫が必要であろう。本年度の取り組みを踏まえ、次年度以降もシラバスや授業方法に関する FD の研修会を通して、授業改善に向けた課題意識の共有を図っていきたい。

［引用文献］

文部科学省　2008 年　中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」（答申）（http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf）

文部科学省　2012 年　中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」（http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf）

第 3 章 各学科・専攻・コースによる FD 活動について

人文社会学部 日本学科

1. はじめに

令和３年度からの取り組みとして、基礎的必修科目を使って、日本漢字検定・日本語能力試験への関心を高め、漢字力・日本語力を伸ばす工夫をしてきた。日本学科の学びに必要な基礎力をつけることを目的としている。令和４年度は、「大学基礎演習Ⅰ・Ⅱ」（１年次必修）・「日本学基礎演習Ⅰ・Ⅱ」（２年次必修）において、模擬試験その他の授業を行った。その結果、日本漢字検定は受験者３８名合格者８名、日本語検定は受験者９名合格者０名であった。受験への意欲が高める効果があったことは確認できるが、合格に結び付いていないことが問題である。合格するには自宅学習を十分に行う必要がある。検定にかぎらず、そもそも学生調査によって本学の自宅学習時間が少ないことが明らかになっており、日本学科も学習時間は全国平均より少なかった。この検定への取り組みも含めて、自宅での学修にもっと時間をかけるよう学生を導かなければならない。

学生支援センター所管の学生サポートとの連携も、積極的に行った。とくに、「大学基礎演習Ⅰ・Ⅱ」「日本学表現演習Ⅰ・Ⅱ」「古典Ⅰ・Ⅱ」「日本文学史Ⅱ」「日本文学論Ⅱ」「日本語文法Ⅱ」「講読Ⅲ（古典文学）」の科目について、ピアタで指導を受ければ点数を与えるという仕組みにしたところ、学生が積極的にピアタを利用する動きが生まれた。しかし、一方で一部の学生には点数目当てでピアタを訪れるという、好ましくない行動も見られた。本来めざすべき学びからの逸脱であり、次年度はそれを是正する仕組みに変更する。具体的には、与える点数の上限を抑えること、点数が与えられるケースを限定することとする。この変更については、令和５年度夏学期オリエンテーションで学生に周知済みである。

また、報告会という形で授業の学びを深めることも行った。まず、「パフォーマンス実践演習」（1～2ｾﾒ　夏学期開講）では、集中講義の最終日にグループごとに身体も使った創作パフォーマンス発表を行った。発表会を最終目標にすることで、授業への積極的な取り組みも促すことができた。「日本学インターンシップ演習」（3～4ｾﾒ　冬学期開講）では、派遣先ごとにグループとなって経験や気づきを報告した。活発に行われた質疑応答により、学びを報告会の出席者で共有することができた。なお、次年度に受講を考えている学生も報告会に出席しており、次年度につなげる効果もあった。「日本語教育実習指導及び実習Ｂ」（7～8ｾﾒ　冬学期開講）では、担当した内容ごとに報告があり、日本語教育のさまざまな側面について報告会出席者は考えることができた。以上、いずれの報告会も有意義であり、授業での学びを深めるために有効な方法であった。

（文責：田島智子）

2.基礎的必修科目について

（１）「大学基礎演習Ｉ」(1 年次必修)

Plan（計画）

R4 年度は、扱う内容はほぼ前年度を踏襲し、次のように計画した。①初期は、クラスメートや教員との人間関係を築くこと、入学時ガイダンスで指導しきれなかった履修や学修・ICT に関する指導を主眼とする。②学生の日本語力向上につながる様々な取り組みを行う。③将来の進路や、それに向けて学生時代にすべきことへの意識を持たせる。

Do（実施）

①については、開講前の前倒し回～第 4 回授業で、全体合同または 2 クラス合同授業の形態で、必要な知識や ICT 技能の教授、ICT の実践練習を行った。②については、メール指導、グループディスカッション、「私の薦める一冊」の原稿作成およびプレゼンテーション、漢字能力検定 2 級・日本語検定 2 級合格相当の力を目指しての取組みを行った。③については、学科上級生のスピーチ、キャリアに関する専門家のお話、学科卒業生のスピーチを聴聞し、先達の経験や助言から学び、自分について考える機会を設けた。

Check（評価）

〈受講生の評価〉学期末に実施した、学科独自アンケート（92 名回答）から抽出する。
・「大学基礎演習Ｉ」全体について…有意義との回答 96.7%　・ICT 指導…高評価（1 を最良とする 5 段階評価における 1 と 2）75%　・ディスカッション…高評価 75%　・「私の薦める一冊」原稿作成…高評価 80.5%　・「私の薦める一冊」プレゼンテーションと相互評価…高評価 75%　・漢検・日検 2 級相当の日本語力への取組み…高評価 73.9%　・在学生・キャリア専門家・卒業生のお話を聴く…高評価がそれぞれ、91.3%・82.6%・89.1%。
自由記述の感想もほぼ肯定的であった。
〈その他の評価材料〉R4 年度入学生の漢字検定および日本語力検定の受験結果は、芳しいとは言えない。漢字検定の R4 年度第 3 回を例に取れば、受験者 7 名、合格者 2 名であった。日本語力検定は R4 年度は合格者 0 名であった。授業での取組みが検定試験での好成績という結果には結びついていないということになる。

Act（改善）

授業で扱う項目・内容的の面では良かったと思われるが、具体的な細部については検討と改良の余地があると考えられる。
・ICT 指導…入学時のネットガイダンスの内容を踏まえ、そこで扱われなかった・手薄だった事柄を把握したうえで、学科での学修の特性も考慮して、指導項目をいっそう吟味し、効果的な実践練習を考える。
・日本語力向上の取組みの一環「漢検・日検 2 級合格相当の力をつけること」が、明確な結果につながっておらず、改善が必要であろう。受講者アンケートではこの取組みについての高評価が多いが、その理由として「教員の解説がためになった」「苦手問題集（受講生各自が、自分がつまずいた問題を挙げたものを集約。クラスで解答に取組み、出題学生

が解説する）の取組みがためになった」「自分でも勉強する気になった」などはよいとしても、「自分に任されていたら勉強しなかったことを授業でできたから良かった（ので評価する)」、また「時間が少なかった・中途半端だったのであまり評価しない」など、授業便りで、授業外で自主的に勉強しようとはしない者も一定数いることが窺える。日本学科生には、漢字も含め、高い日本語能力を学生時代に身につけておくことの重要性、2 級に合格すれば評価される（成績に反映される）ことなどを周知しており、それが受験者の増加につながっているようではあるが、充分な勉強をした上で受験に臨んでいるかという点に不安がある。授業での指導時間には限界があるので、自主的・継続的な学習に取り組む姿勢や習慣を、受講生が持つことができるような方策を講じたいと考える。

（文責：高橋美奈子）

（２）「大学基礎演習Ⅱ」（1 年次必修）

Plan（計画）

本科目は日本学科初年次ゼミ科目として開講 11 年目となる。プログラムの柱としている授業前半の「ブックトーク」個人発表と「四天王寺ツアー」グループ発表は、以前より、読解力やプレゼン能力の向上にある程度の効果が認められていることから、昨年度の新型コロナウイルス感染状況への対応を踏襲しつつ、その基本的な授業形態を維持することとした。それに、「日本学表現演習 I」から継続する漢字検定と日本語検定の模試をおこなって、成績評価に加えることとした。

Do（実施）

授業の実施形態は、おおむね計画通りに実施できた。対面実施が必須である漢字検定と日本語検定の模試についても、コロナ対策に振り回されることなく、スムースに実施できた。

Check（評価）

昨年度に引き続き、この科目の独自アンケートを Google Form にて実施し、受講者数約 100 名のうち 67 名から回答を得た。ブックトークは 66 名から「有意義であった」いう回答を得たのに対して、四天王寺ツアーは 59 名の回答にとどまり、後者の満足度がやや低かった。例年の傾向とはいえ、なんらかの対策が必要だと思われる。

また、独自アンケートには「漢字検定と日本語検定の模試」についての設問がなかったので、これについては未評価となってしまった。

Act（改善）

今年度は、当初より最後まで対面で授業が実施することができた。受講学生からは一定の評価を得ていることから、プログラムを大きく変える必要はないと思われる。

とはいえ、四天王寺ツアーの取り組みへのテコ入れ、漢字検定と日本語検定の模試をどのように組み入れるか、またそれらを独自アンケートに反映させることを検討する必要があるように思われる。

（文責：今田健太郎）

（３）「日本学表現演習Ⅰ・Ⅱ」（1 年次必修）

Plan（計画）

本科目は、日本学科のディプロマ・ポリシーを具体的に実践すべく、学生が日本語（表現）についての幅広い知識を体系的に修得し、基本的な事項を理解するにとどまらず、そうした知識・事項にもとづいた精確かつ適切な日本語表現力を身に付けて、これを的確に運用できるようになることを目指している。なお、授業担当は、１年生全員を学籍番号順に４分割し、夏学期の「Ⅰ」は、①野中、②坂田、③中村、④田島が、冬学期の「Ⅱ」は、①坂田、②野中、③田島、④中村がそれぞれ担当した。

Do（実施）

それぞれの授業内容は、Ⅰは、①概論、「言葉とは何か」を考える、叙述・構成の方法を学ぶ、②「言葉と私」の小論文を書く、メールの書き方、③小論文「言葉と私」の発表と相互評価、④敬語の学習、⑤「心に残る表現」の原稿作成とスピーチ、⑥スピーチ「心に残る表現」のルーブリックによる相互評価、⑦「言葉と私」の小論文（最終レポート）、の７項目である。Ⅱは、①表現の工夫について（流行語・キャッチコピー・レトリック等）、②履歴書の書き方の説明と実践、③スピーチ（自己アピール、原稿作成と発表）、④スピーチの相互評価とフィードバック、⑤正式な手紙の書き方の説明と実践、⑥文章の要約のしかたの説明と実践、⑦スピーチ（和の精神と私、原稿作成と発表）、⑧スピーチの相互評価とフィードバック、⑨敬語の学習、の９項目である。

Check（評価）

Ⅰ・Ⅱともに、学期末に学生に対する独自アンケートを実施した。質問項目は、それぞれ上記授業内容に加えて、Ⅰでは⑧授業全体の感想を、Ⅱでも⑩授業全体の感想を尋ね、「評価１＝とても勉強になった　２＝勉強になった　３＝どちらとも言えない　４＝勉強にならなかった　５＝まったく勉強にならなかった」の５段階で学生に評価させた。集計結果は次のとおりである。（自由記述欄は割愛）

Ⅰ	1	2	3	4	5	合計人数
①	62	17	6	0	0	85
	64					
②		18	3	0	0	85
③	52	29	4	0	0	85
④	58	24	3	0	0	85
⑤	56	22	6	1	0	85
⑥	50	24	10	1	0	85
⑦	46	29	10	0	0	85
⑧	67	16	2	0	0	85

Ⅱ	1	2	3	4	5	合計人数
①	43	33	5	2	0	83
②	65	18	0	0	0	83
③	56	23	4	0	0	83
④	54	23	6	0	0	83
⑤	63	17	2	1	0	83
⑥	48	30	2	3	0	83
⑦	52	25	5	0	1	83
⑧	51	24	7	0	1	83
⑨	54	24	2	2	1	83
⑩	63	19	0	1	0	83

Act（改善）

上に掲出したアンケート結果は、概ね良好な学生からの評価と考えてよいだろう。ただ、評価 4･5 の否定的評価が、Ⅰよりも Ⅱの方が若干ではあるが増加しているのは問題である。これは、授業が進むにつれて、授業についてこられなくなる学生がいることを示していよう。毎年のことではあるが、我々担当教員は、より丁寧な授業を心掛けるとともに、より適切かつ有効にピアタを活用すべきである。もちろん、新型コロナウィルスの影響はあるにしても、教員と学生、および、学生同士の人間関係・コミュニケーションをより密なものにして、授業についてこられない学生を出さないように心掛けたい。

（文責：坂田達紀）

（４）「日本学基礎演習Ⅰ」（2 年次必修）

令和４年度は、対面での授業も実施できるようになったため、授業担当者の工夫のもとできるだけ従前の授業パターンに戻して実施した。

Plan（計画）

・1 年次において、本来対面で実施すべき授業をオンラインで受講していることも多かったことから、学生に不足している大学生としての学修能力を確実に修得させ、ゼミでの学修につなげる。←この意気込みが、全体として学生負担であった可能性がある。

・学生の相互評価ルーブリックは、プレゼン回数に応じて「プレゼンテーションにおいて達成すべきこと」→「達成すべきことが達成できているか」という段階的ルーブリックを使用。

・「日本学インターシップ演習」などの実践的な科目に発展的にリンクさせるべく、授業期間内に相互連携の時間を設ける。

・一昨年度は、授業担当者によって課題の内容に相違があることへの不満が示されたので、課題についての担当者間での調整作業を行い、学生間の不満が無いようにする。

Do（実施）

・対面授業の機会を利用して、グループワークやプレゼンは、可能な限り計画通りに実施した。

・メディアリテラシー教育・日本語能力・漢字検定模擬試験ついては計画通りに実施した。

・学科独自アンケートについては、グーグルフォームを使用してこれを実施した。

Check（評価）⇒Act（改善）

・学科独自アンケートの結果を踏まえて評価および改善すべき点について述べる。

★大学生に求められるレベルのレポートを作成できるようになるための学びについて

大変役に立った＝48.1%　ある程度役に立った＝38.9%＝合計　87%（前年度 97%）

★結果として、あなたのレポート作成能力は向上したと思うか

向上したと思う＝64.8%　（前年度＝大変向上した＋ある程度向上した＝91.5%）

どちらともいえない＝31.5%

★グループおよび個人でのプレゼンテーションについての感想

非常にやりがいを感じた＝37%　ある程度やりがいを感じた＝55.6%＝合計 92.6%

（前年度 90.7%）

★シラバスについて変更の必要はない＝88.9%

・一昨年度から比較するとプレゼンテーションに関する指導は満足度が高まり、レポート化作成のノウハウについての内容は満足度が下がっている。科目としての目標は達成されていると考えられるが、こうした変化の要因として、アンケートの自由記述欄に多く記載された全体的に時間不足で忙しいという不満、および担当教員により課題の内容や量に差があるという不満があると思う。シラバスの改変なども必要ないと判断する内容その喪についてはの不満は少ないようであるが、もう少し時間的にゆとりを持たせる、課題の量を削減するなどの授業運営について改善する必要があると思われる。

（文責：南谷美保）

3. 授業相互参観について

Plan（計画）

10 月 13 日（木）の FD 委員会からの依頼に応じ、相互授業参観を実施した。本学科においては教員養成に関する科目、また近年授業に求められている課題に関する科目を公開し、授業内容や方法について教員相互の知識技術の研鑽を目指した。

Do（実施）

参観は 11 月 18 日（金）～12 月 15 日（木）にかけて実施した。全教員が自身の対象授業を設定し、また他の教員の授業に参観した。

Check（評価）

参観後、参観者は「参観シート」を記入し、速やかに授業担当者に提出し、授業担当者は「参観シート」をもとに「評価できる点」「改善すべき点」「検討を要する点」「今後への展望」などの観点から自己評価した、

Act（改善）

1 月 17 日（金）にオンライン学科会議内で合評会を実施した。今年度、各教員が高等教育推進センターに提出した「参観シート」は授業担当教員に直接渡されなかったので、FD 委員がセンターより学科関係の参観シートを一括して受け取り、各対象教員に配布し、それをもとに自己評価を述べ、その後、適宜質疑応答を行った。その上で指摘された問題点について、他の科目にも共通する事例を上げながら改善案を出し合った。

センターに問い合わせた結果、学科教員全員による合評会は行わなければならないわけではないということなので、次年度以降、合評会は、対象授業後に担当教員と参観者の間で適宜実施するものとする。

（文責：森嶋俊行）

4. 学科独自の取り組みについて

（1）「パフォーマンス実践演習」

Plan（計画）

この科目は、学生の対面コミュニケーションの力を伸ばすために、「ヴォイストレーニング、口頭表現、身体表現などの諸要素を実習し、それらを踏まえながら、「他者への理解」あるいは「コミュニケーション」について取り扱ったパフォーマンスを、グループごとに創作し、発表する演習」（シラバスより）である。例年、夏休みの 4 日間の集中講義、

いわば「合宿」のようなかたちで実施され、受講した学生からの満足度も高い。当初の計画は、ここ数年のプログラムを踏襲しつつ、洗練させたものであった。

Do（実施）

令和３年度にはリモートにせざるをえなかったが、今年度は全日程を対面授業で実施することができた。また、昨年度は履修希望者が多数いたために選抜の必要があったが、今年度は履修希望者が適正な人数（20 名程度）であったため、選抜はおこなわなかった。ただ受講生は、ターゲットとしていた１年生よりも２年生が多い結果となった。

Check（評価）

科目の独自アンケートの結果、受講した学生の満足度は、対面授業で実施したこともあって「大変有意義だった」という評価が 100%となった。短期集中のワークショップにより、自分が成長した実感をえられたと考えられる。

Act（改善）

今年度は対面授業を実施する自体が改善ポイントだった。これにより、リモート時よりも大きな教育効果が得られたと考えられる。今後は、対面授業の実施を前提のうえで、さらなる教育効果をあげるための工夫をおこなっていきたい。

（文責：今田健太郎）

（２）「日本学インターンシップ演習」

Plan（計画）

この科目は、日本学科の特性（日本語や日本文化を学ぶ）を活かしたインターンシップ体験を通して、①学生が、自らの進路について考え、今後のキャリア形成に主体的に取り組む、②「職場」を経験することにより社会人としての心構えや必要な技能・知識を習得する、③将来を展望した主体的な学びの契機とする、などを目的としている。

開講から 4 年目に入り、受け入れ先からの要望や昨年度の受講生の様子などを踏まえ事前授業や事後授業を計画した。

Do（実施）

受入先と学生の配属

受入先は、公立中学校（2 校、6 名）、日本語学校（1 校 2 名）、公立学校図書館（2 名）、市立図書館（2 名）、市役所観光関係部署（2 箇所 2 名）、広告代理店（1 箇所 2 名）、イベント企画運営会社（1 箇所 2 名）、印刷出版社（1 社 2 名）、人材教育・育成（1 社 4 名）にお願いした。学生の配属は、8 月上旬の希望アンケートをもとに、9 月初旬に決定を通知した。

実際の授業

事前学習：9 月 5 日 1～3 講時、6 日 1～3 講時（対面）

内容：インターンシップの心構え、基本的ビジネスマナー、会社・企業研究など。

インターンシップ実践：9 月～12 月の間、8 時間×5 日間の就業体験。

評価：受入機関の担当者からルーブリックによる評価をいただいた。

事後指導：実践終了後、個別に礼状作成、ビジネス文書の書き方などを指導。

成果発表会：2月2日1・2講時　自己評価シートによる振り返りと発表用資料作成
2月3日1・2講時　体験発表会（ハイブリッド）、授業アンケート

Check（評価）→Act（改善）

成果発表会は、zoomを利用したハイブリッド形式で実施し、受け入れ先企業ご担当者複数が参加した。学生が司会進行を務め、活発な質疑応答の場となった。また、「わかりやすい文章を書く能力」「分かりやすく伝える能力」「コミュニケーション力」「敬語の知識」「パワーポイント作成技術」「発表する機会が多いので，緊張せずに模擬授業を行うことができた」など日本学科で培われる能力がインターンシップにて役に立ったという報告が複数あった。さらに、成果発表会終了後の受講生アンケートでは、「実際に自分が働く側の立場に立ったことから、社会に出た時のイメージが具体化した」「今後の課題を見つけることができた」「普段学べないことが学べた」など肯定的な評価がほとんどを占めた。しかし、以下の課題も明らかになった。

①本年度も受講生がなかなか集まらず、4セメ生6セメ生に複数回受講案内を送付することとなった。学生に本授業の有益性を十分に周知する必要がある。

②発表会準備と発表会を二日に分けて実施し、資料作成の準備時間とともに発表の練習時間も確保した。しかし、当日の発表では原稿やスマホを読み上げる学生も少なくはなかった。発表の練習を十分に行うように促す必要がある。

③派遣中、コロナ感染により実習を中断した学生もいた。実習先の厚意により、自宅療養後実習を再開したが、今後このようなケースも増加すると考えられる。対策を考える必要があるだろう。

（文責：麻生迪子・野中拓夫）

（３）教員採用試験対策

Plan（計画）

夏学期には、主に４年生への教採対策として、専門試験対策講座の実施、面接・模擬授業の練習などを計画した。冬学期には、例年どおり、キョーサイ合格こころえプロジェクトの実施、３年生向け専門試験対策講座の実施、公立中学校授業見学会の実施を予定した。

Do（実施）

・４月以降の面接および場面指導対策は、教職教育推進センターの協力が欠かせない。回数を重ねるよう、支援委員はGAとしてコーディネートを請け負った。

・専門試験対策講座は、一次試験の結果発表後、実施。現代文（松山担当）は7/30、8/6、17、18。古文（野中担当）は 7/29、8/4、9、10、16。漢文（矢羽野担当）は 8/2、5、9、12、16、19 に実施した。参加者は３名。時期的に、オンラインでの実施となった。

・11 月に 3 年生は自主勉強会のグループを結成。週に一度、グループで教採関連の学習をする時間を設け、仲間とともに教採合格を目指す環境作りを行った。4 年生教採合格者が SA として参加する回もあり、3 年生のモチベーションアップに貢献した。

・１月から「キョーサイ合格こころえプロジェクト」開始。教採合格者が SA となり、後輩の教職志望学生の指導に当たる日本学科独自の取り組みである。実施日程は、1/16、23、2/7、21、3/2、6、10、20、の８回。実施内容は、教採合格体験談、効果的な勉強

方法（ノートの作り方を含む)、学習計画の構想、自治体別「求める教師像」の把握、自己 PR の作成他、面接・場面指導・模擬授業の実地指導が主であった。参加者は、SA４年生２名、教職志望３年生 15 名であった。すべての回を対面で実施できた。

・２月中旬以降、専門試験対策講座を設定した。実施日程は以下の通り。現代文（松山担当）2/10、21、3/10、24。古文（野中担当）2/7、21、3/6、20。漢文（矢羽野担当）2/24、3/10、24　参加者は毎回 10 名程度あり、盛況であった。対面で実施。

・3 月 7 日に、コロナで中断していた公立中学校での授業見学会を再開。3 回生 11 人と 4 年生 1 人が参加した。大阪市立玉津中学校　田沼宏先生（2017 年卒）の授業を参観。ご好意で開かれた合評会では活発な討議が行われた。有意義な一日となった。

Check（評価）

・4 年生教採受験者は、10 名、うち合格者 2 名であった。コロナ禍で例年より内向性の強まったなか、10 名が最後まで頑張っていたことを前向きに捉えている。講師でスタートを切った学生らのアフターケアにも心がけたい。予想しえない激変は今後も起こりうる可能性はゼロではなく、より柔軟な指導、支援のあり方を模索し続ける必要がある。

・合格者の 2 名は、キョーサイ合格こころえプロジェクトを引き継ぎ、後輩をしっかり指導してくれた。後輩も積極的に参加し。先輩の厚意に十分応えた。

Act（改善）

教員をめざして入学する学生の減少が顕著である。また、早い段階で進路変更をする学生も増えている。教員のブラックな部分ばかりが喧伝されているが、魅力の部分をきちんと伝える必要がある。教職科目の授業で動機づけを意識的に行ったが、教職教育推進センターと連携して、違う角度からのアプローチも考える必要がある。

（文責：野中拓夫・松山雅子）

（４）「地域・文化発信演習」

Plan（計画）

本科目は前年度、日本学科の地域連携科目の中核として開講した。授業進行として前年度に引き続き前半に学科各教員による専門的見地を活かしたゲスト講義を実施し、後半に地域の文化を代表する文化資源を実際に訪れ、調査の成果を受講者自らの執筆によるブログ記事として学科ウェブサイトで公表することを目標とした。授業取扱範囲の可能性を広げるため、前年度においては調査対象を誉田八幡宮としたのに対し、今年度においては道明寺天満宮とした。

Do（実施）

【内容及び形態】

今年度受講者は学科５セメスター生３名であった。授業は計画の通り、前半において学科教員が地域の歴史や文化、観光について各々の専門的知見を紹介し、受講者がそれに沿って地域文化発信のテーマや手法を学んだ。こうした授業前半の成果を踏まえた上で 11 月 12 日（土）午後、道明寺天満宮にて宮司へのインタビュー調査と宝物館の見学を実施した。その後授業後半で、学科ブログ記事という形式で、写真を中心に地域の文化

に関する記事を受講者が作成し、それを受講者同士や教徒の間で見せあって記事を洗練させた。

【成績評価】

授業前半の各教員からの課題評価 50%、その他学科ブログ記事やインタビュー調査への貢献等 50%の比率で成績評価を行った。

Check（評価）

学科ブログ記事は令和５年中に実際にオンライン上に掲載できる見込みである。

Act（改善）

前年度、受講者数が５名とあまり多くなかったものの、実際にブログで成果を発信できたことから、今年度の受講者増を期待したものの、実際には受講者数が３名と減少してしまった。さらに、成果物の質も前年度に比較し上昇したとはいえない結果となった。学科会議等で話し合い、日本学科の地域連携科目としてこの科目を育てていくにあたっては、学生への授業の周知や内容等において再考が必要であるとの結論に至った。

一因として、学科各教員によるゲスト講義が、地域文化発信の意欲や質の向上に直接結びつきづらいと考え、次年度授業前半においては、学科各教員によるゲスト講義でなく、少数の教員による地域の歴史文化の体系的な理解を進めることとした。さらに、学生への周知宣伝として、２年次必修科目「日本学基礎演習Ｉ」授業内において、担当教員と前年度受講者による授業紹介を行うこととした。

（文責：森嶋俊行）

以上

人文社会学部 国際キャリア学科

１．はじめに

国際キャリア学科では、教育課程編成・実施の基本的な考え方として、グローバル化した社会、より複雑になりつつある国際問題に対処できる能力・知識・スキルを体系的、実践的に学ぶことを目的として教育課程を編成している。1、2 年次では語学力の向上に重点を置き、さらに 3 年次からは各自の進路・適性に応じて、①英語・英語教育コース、②国際理解・協力コース、③国際ビジネスコースの 3 領域からそれぞれ指定の科目を選択履修します。3、4 年次では「専門演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ(ゼミ)」を受講し、希望者は「卒業研究」に取り組む。

1) 1 年次においては、「英文法Ⅰ・Ⅱ」「Extensive Reading 初級Ⅰ・Ⅱ」「ベーシックコミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」「キャリア英語入門Ⅰ・Ⅱ」を必修とする。加えて、マクロ経済学、英語圏文化概説の授業が選択し、世界の文化や経済についての基礎的知識を学んでいる。

2) 2 年次においては、中級レベル以上の英語力や国際的な感覚を身に付けるために、「Extensive Reading 中級Ⅰ・Ⅱ」・「ベーシックコミュニケーションⅤ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ」を必修として受講する。また、それら学科共通領域に加え、3 年次からのコース制のコアであるゼミ(専門演習)での教育に向けて、①英語・英語教育コースでは、「Reading(Culture)」「Reading(Society)」「Reading(Literature)」「英語学概説」「英語学」、②国際理解・協力コースでは、「国際理解教育」「異文化共生論」、③国際ビジネスコースでは、「国際ビジネス論」「国際経済学」「グローバル・ファイナンス」、の 3 つの領域を土台として科目を選択し、次年度への知識固めに取り組む。

3) 3 年次からは、各自の所属する専門演習(ゼミ)を中心に、学生は各自、コース領域や進路・適性に応じて科目を選択し、履修していく。①英語・英語教育コースでは、「Reading(Language)」「Extensive Reading 上級Ⅰ・Ⅱ」「アドバンストコミュニケーションⅠ～Ⅷ」等、②国際理解・協力コースでは、「国際政治学」「国際問題論」「英国史」「社会情報論」等、③国際ビジネスコースでは、「貿易実務Ⅰ・Ⅱ」「金融システム論」「貿易理論」等の授業が選択できる。また、学科共通領域として、「英米文化論」、「異文化理解」、「国際コミュニケーション論」等も履修することができ、ゆるやかなコース制として学生の卒業要件を満たすようにしている。

近年、社会において、英語の能力がより一層問われるようになってきている。本学科としては、学生の英語の能力向上のため、TOEIC や英検などの資格取得を学生に促していくとともに、異文化に対応できる柔軟な考えを持った学生を育成したいと考えている。したがって後述するが、このような授業を通した指導に加えて学生の自主的学習をサポートする e-learning を希望者に無償で提供し、さらに自主勉強会を応援することで学生の学びの質的保証を確保するように取り組んでいる。加えて、観光領域の拡充に取り組むことで、使うための英語を実践的に学ぶ取り組みに参入している。また、地域連携の取り組みについても、今年は地元を始めとしたさまざまな企業と提携した活動を行ったが、学生の希望をもとにさらに導入していく方向である。さらに今年度はインドネシア、ベトナムな

どの大学とのオンライン交流を進め、多くの学生が参加するなど世界とつながりたいと考える学生の意識を高める取り組みを進めている。

今後の課題として、コロナ明けになり再始動している留学、語学研修、インターンシップ等のプログラムの再開および検討、コース毎の特性を生かしたプログラムの構築が挙げられる。

２．大学基礎演習について

（1）大学基礎演習Ⅰ

全学共通の初年次教育の一環として、建学の精神を基に、大学における専門能力の滋養と大学生活を有意義に送るために必要な情報や技能を提供する。大学生として求められる基礎的な知識・技能・態度を修得し、大学および学部・学科・専攻コースへの所属意識を持ち、4 年間の大学生活を見通して、学科の特色が身に着くような講義を展開する。

大学基礎演習Ⅰを通じて、国際キャリア学科に所属している学生は、自ら学ぶ意義と課題を把握することになる。まず、本学の建学の精神について理解させ、卒業後の進路について話し合い、キャリア形成のための大学生活について教員が学生に説明している。

（2）大学基礎演習Ⅱ

大学基礎演習Ⅰで学んだ学習の意義を踏まえながら、より主体的に大学の学修に取り組むことができるよう、アカデミックスキルを向上させることを目標とした。初年次の学びをより確実にし、2 年次以降の高度な学びへスムーズに移行できるように講義を展開した。大学基礎演習Ⅰでも行われたプレゼンテーションをより発展させ、充実した内容となるよう、プレゼンテーション大会の指導が行われたほか、アカデミックスキルなどの授業については 3 人の本科目担当者が分担して授業を行った。

授業の内容は、図書館の活用方法や文章の読み方、発表の聞き方・質問の仕方、調査・分析結果のまとめ方、プレゼンテーションの構成・引用の規則・参考文献の提示方法などであった。また、大学在学中と卒業後に必要とされるリテラシー能力として、情報収集力や情報分析力、課題発見や問題解決のための考察力、プレゼンテーション準備における協働力や発信力について取り上げ、こうした能力の向上を目指すにはどういう方法があるのかについて理解できるように授業を展開した。

３．授業相互参観について

整理番号	所属	担当教員	月日	曜日	時限	公開授業科目名	教室	遠隔あり	合評会(実施時期)
1	国際	奥羽　充規	11月22日	火	5	教科教育法Ⅳ	4-263		授業後
2	国際	神野　雅代	いつでも可	水	4	Reading(Language)	4-259		授業後
3	国際	中井　誠	11月22日	火	5	マクロ経済学	4-314		授業終了後
4	国際	深見　環	11月30日	水	3	ビジネス英語Ⅱ	2-209		授業後
5	国際	宮脇　敏哉	12月6日	火	4	国際理解教育	4-407		授業終了後
6	国際	山﨑　英一	11月30日	水	2	Extensive Reading初級II	4-259		授業後
7	国際	李　美子	11月22日	火	2	専門演習Ⅱ	2-209		授業終了後
8	国際	柴田　かよ子	12月1日	木	4	Reading(Literature)	4-407		授業後
9	国際	ﾛﾊﾞｰﾄ・ｹﾘｶﾞﾝ	11月18日	金	1	ベーシックコミュニケーションIII	4-306		授業後
10	国際	若松　正晃	12月7	水	2	Extensive Reading 初級II	4-260		授業終了後
11	国際	上野　舞斗	11月30	水	1	英語音声学／実践英語音声学	4-409		授業直後（講師室にて）

教科教育法Ⅳ　奥羽充規　11 月 22 日　　4-263

参加者：若松正晃

（１）授業に関して

・学生の授業内での発表において、相互評価にルーブリックを用いているため、評価する側もされる側も、その評価がわかりやすいように配慮されている。

・先生自らが学生の作った素材を用いて実演することで、実践的な技術を身につけさせようとしていることがよくわかる。

・卑近な例を挙げて説明するなど、理解度の低い学生に対しても柔軟に対応できている。

総じて、先生ご自身の経験をフルに活用された授業内容となっているため、受講している学生には教育現場にいるような感覚で教育法を学べる非常に濃密な授業内容となっている。教科教育法という目的が限定される授業内容ではあるが、先生の理念や思想はどの授業においても実践されていると感じる。先生の授業を参観させていただいた経験を、参観者自身の授業にも活かしていきたい。

（２）学生の授業態度や施設・設備などに関して

・学生の授業に取り組む態度もよく、無駄がない授業であった。

マクロ経済学　　中井　誠　　11 月 22 日　6-212

参加者：宮脇敏哉

（１）授業に関して

先ず、テキストの第 4 章の貨幣と日本銀行について、テキストがない学生のためにプリントを配布しました。そしてスムーズに授業がスタートしました。

授業は、パワポを使用し、マイクを使用しているため、たいへんわかりやすい内容になっていました。学生も集中して受講していました。講義内容は、日本銀行の役割と公開市場操作などを説明し、中央銀行としての金融政策について並びに FRB について解説した。The Bank of Japan is the central bank of Japan(BOJ)日本の中央銀行は、

日本銀行である。中央銀行は、その国の紙幣を発行し、金融政策を担当する銀行である。学生は、静かに着席して、熱心にノートをとっていた。

その後は、アメリカの金融政策と物価やロシアのウクライナ侵攻によるエネルギー価格問題、日本銀行の目的や業務の解説があり、わかりやすい授業内容であった。

私が参考にしたいのは、テキストがない学生への配慮とわかりやすい解説、そして専門的な用語の丁寧な説明です。

ベテランの先生の授業として学生も大変良い授業機会を持っていると感じました。私も中井先生を見習ってより良い授業をおこないたいと思います。

ビジネス英語Ⅱ　深見環　11 月 30 日　　2-209

参加者：山崎　英一

（１）授業に関して

参観授業は、国際キャリア学科 2 年生対象の、夏学期必修、冬学期選択科目である「ビジネス英語」であり、夏学期必修時は実力別クラス分けで低位のクラスを担当されておられたそうで、冬学期はレベルも選べるようだが、数名の変更を除き大部分夏学期履修者と同一らしく、かつ 40 名超の出席者であった。つまり、大雑把には国際キャリア学科 2 回生の実力では後半にあたる学生ほぼ全員を指導しておられることになる。

コロナもあってか 2 号館の 100 名以上楽に入る大教室で、かつ英語に自信がないと思われる学生群の中、ほとんど私語や居眠りのない受講姿勢であるとともに、学生が嫌々取り組んでいるのではなく、静かだが熱心に取り組んでいるとすら思われ、このような環境を実現している深見先生の手腕に敬意を持たざるを得ない。

コツとしては、学生が取り組む作業の前に学生に難易の高いところを説明して取り組みやすくする一方、出欠カードを基にこまめかつランダムに学生を指名し解答を発現させることかと思われる。これにより英語難問への学生の抵抗感を下げることでやる気を刺激するとともに、適度な緊張感を引き出していると思われる。

（２）学生の授業態度や施設・設備などに関して

特に問題ないが、今後はクラス分けに工夫が必要である。

英語音声学　上野舞斗　　11 月 30 日　　4-409

参加者：田島智子、松岡隆、鳥越ゆい子、久原　健佑、若松正晃

（１）授業に関して

全体的にスピーディーな授業展開で学生が良い緊張感をもって受講していた。
授業の最初に 15 回の授業を通しての目的の再確認と今回授業の目的の説明があり、学生が授業に取り組みやすそうであった。また、試験に向けて準備しておくことを説明しており、学生の授業へのモチベーション向上のきっかけ作りがされていた。前回までの学習内容の振り返りについては、前回授業の学生コメントに対し、ポイントを絞って解説しており、学生がわからないことをわからないままにしない工夫を感じた。
授業中に発音確認に Google 翻訳を使用しており、学生が自宅などでの自主学習に活用

できる手法を授業に取り入れつつ紹介しているのはとても良い方法だと感じた。
Google フォームの活用については、リアルタイムで受講生全体のフィードバックを行っており、学生各々が受講者全体と自分の状況の比較や、自分の修得状況を確認・認識できるのはとても良い活用方法だと感じた。

（２）学生の授業態度や施設・設備などに関して

１，遅刻者が多い。対策があった方がよい。

２，換気。十分暖房されていたので、ドア窓は細めに開けた方がよかった。

Extensive Reading 初級 II　山崎英一　11 月 30 日　4-259

参加者:上野舞斗

（１）授業に関して

Extensive Reading 初級 II は、英文を訳さずに読む速読・多読の技能を身につけることをめざした授業である。最初に授業参加への心構え等の確認があり、その後 15 分間、スマートフォンのアプリを使用した個別の多読（作業）があった。作業中は学生たちが学びの見通しを立てやすいよう、スクリーンで注意点とタイマー（経過時間）が示されていた。この流れと教員による配慮の中で学生たちは注意点を留意して、自律的に黙読作業に取り掛かることができていた。活動前の目標提示、手順や注意点、時間の明示が、学習者の主体的な学びを成立させるうえで必須の事項であることを改めて確認した次第である。

また、紙媒体のテキストに入る前には、「注意すべき点、関心を寄せておくべきポイント」として、トップダウンリーディングの心得であるスキーマの概念について確認があった。また学生たちに本文内容に関する事実発問、本文の要約（できるだけ短く）考えさせるという協同作業があり、作業ののち全体共有があった。これが授業で扱う範囲の前振りとなって学生らが本文を読む動機づけとなっていた。

（２）学生の授業態度や施設・設備などに関して

唯一気になったのは、学生が教員の解説をただただ聞くだけで一向にメモを取ろうとしない点である。学科教員で連携し各授業で指導を行う必要がある。

Reading（Literature）　柴田かよ子　12 月 3 日　4-407

参加者：若松正晃

（１）授業に関して

・映画を先に鑑賞させ、その内容を原作で読んでいくといったスタイルの授業

・グループワークでの活動を通して、お互いの理解度を高める工夫をされている。

・予習の段階でのタスクは多くなるが、学生はきちんと取り組んでいる。

・非常に丁寧に準備をされ、授業を実施されていることがよくわかる。

テキストとして使用されている Harry Potter and the Philosopher’s Stone（アメリカ版タイトル Harry Potter and the Sorcerer’s Stone）は、児童向けに書かれてい

るものの、実は解釈が非常に難しい作品である。本作は、英文学における幻想小説、文化的背景、ラテン語をはじめヨーロッパ諸語への深い理解が必要であり、30 名前後のクラスで扱うには難しい作品の一つといえる。先生の授業では、学生に映画版を鑑賞させること
で、作品の世界観を視覚的に補い内容理解を促す工夫がなされている。
文学を専門にされていない柴田先生には大変なご負担になっていると思われるが、先生ご自身の授業準備の精度の高さにより、受講生の理解が促進される授業となっている。
先生の授業を拝聴した経験を参観者自身の授業運営にも活かしていきたい

（２）学生の授業態度や施設・設備などに関して
特に問題なし。

Extensive Reading 初級Ⅱ　若松正晃　12 月 7 日　4－260

参加者：奥羽充規
（１）授業に関して
授業開始の導入から、展開に至るまでの流れが非常にスムーズで学生は適度な緊張感を持ちながら和訳に取り組んでいた。また、展開部のグループ学習ではそれぞれの発表担当内容ついて協力して議論するなど活発な活動も見られるなど、授業への参加意欲も多くの学生から見られた。また、教員の説明内容にも学生に興味を持たせる工夫が随所に見られ、演習と講話のメリハリがついた興味深い授業だった。

（２）学生の授業態度や施設・設備などに関して
遅刻の学生が数名いた。再履修の学生が多いため仕方がないとは承知している。

４．学科独自の取り組みについて

(1)『てんしば」プロジェクト
「てんしば」プロジェクトとは、天王寺の「てんしば」エリアにあるゲストハウスで国際キャリア学科の学生たちが研修も含むインターンシップ業務に参加するというプロジェクトである。学生は、国際キャリアインターンシップという科目を履修登録すれば、卒業の際の単位としても認められる。
国際キャリア学科の学生たちは、様々な国からの観光客の方々に、いかにおもてなしできるかを考え、日々行動している。毎年、ゲストハウスでの接遇やイベントプロデュースをより良いものに仕上げるためイベントチームごとの中間発表会が行われている。令和元年度までは学生たちがゲストハウスでお茶（茶道）の指導をしたり、習字を教えたりと海外からの旅行者がこれまでに経験したことがないイベントを企画したが、令和４年度は、昨年同様、ゲストハウスでの外国人観光客への接遇ができなかったため、てんしば公園を使った来園客向けサービスや SNS のフォロアー獲得のための新しい企画を実施して、できる範囲での活動を行った。

(2) Jump-Start English (JSE)

Jump-Start English (JSE) は、国際キャリア学科の学生たちが、AO あるいは、推薦入試に比較的早い時期に合格し、本学科に入学するまで時間のある高校生に向けて、土曜日の夕方に実施している入学前英語指導プログラムである。学生が中心となって、高校生に英文法、英文読解、コミュニケーションを基礎から教えるもので、毎年実施されている。授業実施に際する細かな指導技術については担当教員が指導しているが、実施に際して、国際キャリア学科の全教員が交代で毎回本プログラムに監督者として参加し、学生の指導にあたっている。本プログラムを通して、入学前に英語力の基礎部分を築き直すことができることはもちろん、新入生同士の関係性、新入生と在学生との関係性を築くこともでき、毎年好評を得ている。令和４年度は、前年度までのオンライン実施ではなく、対面で実施した。あべのハルカスサテライトキャンパスにて学生が授業を行い、昨年度に比べ活気のあるプログラムの実施となった。

(3) TOEIC ゼミ

TOEIC ゼミとは、柴田講師が中心となってボランティアで毎週木曜日のお昼休みに、学習意欲のある数名の学生向けに実施している TOEIC や英検受験のための講座である。この講義を受講した学生の中には、TOEIC で 800 点以上を獲得した学生や英検準 1 級に合格した学生もいて、令和 4 年度においても、800 点以上を獲得した学生が、これから高得点の獲得を目指す学生に個別指導することで、学生同士の協力支援体制が確立されてきている。

(4) 海外留学特待生 100 万円奨学金プログラム

国際キャリア学科が実施している 100 万円奨学金プログラムとは、国際キャリア学科の学生が毎年ニュージーランドに実質 5 名程度の学生が留学し、オークランド大学の付属の英会話スクール（ELA）で 3 月から 6 月までの 4 か月間の語学研修に加えて、ニュージーランドにおいて、インターンシップ（1 か月）を経験させるというプログラムである。今年度も渡航先の受け入れ状況を鑑み、昨年と同様に大学間提携を行っているカナダのビクトリア大学で実施した。

本プログラムは、参加を希望する学生の中から筆記試験と面接を行って学生を選抜し、選抜された学生達は自己負担 50 万円で本プログラムに参加できる。本プログラムは総額で 180 万円～200 万円程度（為替レートの変動による）の費用がかかるものの、大学がその差額（150 万円～200 万円）を奨学金として負担している。本プログラムを終えて帰国した後、TOEIC の勉強に励み、卒業するまでに 730 点突破を目指すことになっている。

令和４年度においては、例年通りに無事プログラムをスタートし、とどこおりなくプログラムを実施した。

（５）英語による観光ガイド研修会

全国通訳案内士を外部講師として3，4回生の学生を対象として藤井寺を英語で観光ガイドしていただき、その活動に生で触れることを昨年に引き続き、体験した。コロナ禍もあり、回数としては１回実施。学生には、日本文化に触れること、ガイドすること、英語を使い楽しんでもらい、喜んでもらう活動に直に触れ、様々な学びと気づきを得られる機会を与えた。現状、多くの学生が観光業界に興味関心を持っており、その後、地域共創プログラムの授業を履修するための授業である。

（６）キャリアコミュニケーションセミナー実施

学生の大学生活でのやりがいを高める仕組みとして、より目標を明確にするために早期（1年生時分）からコミュニケーションセミナーや、就職準備ガイダンスなどを外部講師を招いて実施し、学生の大学生活における動機付けや、目標設定への援助を行った。特にコミュニケーションセミナーでは「コミュニケーション」の取り方についてレクチャーと実践を織り交ぜることで、次年度以降の就職準備ガイダンスへの足場作りとした。

（７）TOEIC e-learning プログラムの導入

1年生の冬学期、2回生以上には夏学期より Really English の TOEIC 講座を、条件を満たした学生に無償でアカウントを提供し、自律的に学ぶ学生への動機づけを行なった。

（８）English Hospitality 研修の実施

国内旅程主任者資格を取ることができる研修を近畿ツーリストと提携して実施した。観光地でのツアーコンダクター実務を留学生を対象に実際に英語で体験しながら学ぶプログラムで、現役の添乗員にサポートを受けながら観光業界・観光地・日本文化・観光英語・添乗員業務等について学ぶことができるプログラムである。夏休み期間中の8月に実施して、15名程度の学生が参加した。

（９）教員採用試験対策勉強会

国際キャリア学科には少数ながら毎年、中高の英語教員を志望する学生がおり、教職科目担当教員（奥羽准教授、上野助教）が指導にあたっている。授業外でも、春休みには、教育実習、教員採用試験を見据えた授業力を身につけるために「模擬授業練習会」と称した実践型の集中勉強会を開催している。また、4月初旬から8月末にかけては教員採用試験を受験する4回生を対象にした学科独自の勉強会を毎週開催している。令和4年度も、対面とオンラインとの併用となった。こうした取り組みも助けて、令和4年度は、２名の教員採用試験受験者のうち、1名が大阪市の教員採用試験（中学校英語）に現役合格した。

（１０）アジア圏の大学との国際文化交流会

コロナ禍により海外への渡航ができず、海外との国際交流ができない状況を少しでも改善すべく企画したオンラインプログラムである。令和4年の8月にはインドネシア、２月にはベトナムと交流会をオンラインで実施した。交流会の中で、それぞれの国の学生が自

分の国や地域の文化や歴史、慣習などを紹介し、お互いに質問しあったり、疑問点などを旧友することで、異文化交流を図った。参加した学生もそれぞれ30名以上の本学の学生が参加しており、次年度にはネパールの大学との国際交流会を予定している。

５．その他

国際キャリア学科は、実践的な外国語能力とコミュニケーション能力を習得し、変動する国際問題に関する基盤となる知識を身につけ、さらに、卒業後のキャリア形成に必要な知識とスキルを獲得し、グローバル化社会で活躍できる人材の養成を目的としている。

そのため、学生は、①外国語能力として、「読む・聞く・話す・書く」の各言語能力において実践的な教育を受け、②高い外国語能力に基づき、グローバル化した社会に即応したコミュニケーション能力を習得し、③環境・民族紛争・宗教・経済・金融等の国際的な問題を認識し、国際社会における日本の役割を実践的に把握する能力を身につける。④言語の背景にある歴史･文化･政治･経済等に関心を持ち、異文化理解への関心と意欲を身につける。⑤自ら課題を設定し他者と協同しながら問題解決にあたり、グローバル化社会で有為の人材となるために必要な知識とスキルを獲得することになる。

FSD活動を通じて、グローバル社会で活躍できる人材を育成するため、今後も様々なイベントや企画を学生に提供するとともに、授業の進め方を工夫し、学生が積極的に授業に参加できるような環境を提供できればと考えている。

以上

人文社会学部 社会学科

１．はじめに

令和３年度の授業は、夏学期においては遠隔授業（主としてZOOMを使う）、冬学期においてはハイブリッド授業（遠隔授業と対面授業を並行して行う）という形態で、主として授業が行われた（3年生と4年生の演習については、対面授業を基本とした）に対して、令和4年度の授業は、4年ぶりに全面的に対面授業を基本にして行われた。とはいっても、文字通りに過去の方式に戻ったわけではない。これまで 3 年間の試行錯誤を踏まえて、新たな授業形態が模索されたといってよいであろう。したがって、この間の ICT を活用した授業のメリットとデメリットをあらためて具体的に評価する必要がある。

さて、学生も教員もIBUネットを基本的に使用することになり、ほぼすべての科目において基本的にICTが活用されることになったことをふまえて、効果的な授業を行う際にICTをどのように使っていくのかという課題は、引き続き追求していかなくてはならないであろう。それぞれの教員の講義形態や講義内容によって取り組み方は異なるが、対面授業のメリットとICT活用のメリットをどのように組み合わせていくのかが課題となっている。

こうした点を念頭に置きながら、本稿の「２．大学基礎演習について」および「３．授業相互参観について」において、個々の教員の取り組みの一端を紹介するが、ウィズコロナ・ポストコロナの時代を見据えた授業のあり方を検討していくための一助としたい。また、「４．学科独自の取り組み」では、聴覚に障害がある学生の授業を配慮する取り組みについて、紙数の関係からその一部にとどまるが、「情報保障相談会＆授業で使える手話講座」を中心にして紹介した。社会学科に限らず、全学的に取り組む際の参考になれば幸いである。

２．「大学基礎演習」について

「大学基礎演習Ｉ」の概要は次のとおりである。「この科目は、全学共通の初年次教育として、建学の精神をもとに、大学における学修と生活の意義を自覚し、大学での学修に必要な技能を獲得することを目標としています。初年次における課題を自覚し、求められる基礎的知識・技能・態度を修得し、四天王寺大学社会学科の学生としての所属意識をもち、大学生活全般および卒業後の進路についての見通しを持てるようになりましょう。大学では、高校までとは違ったアクティヴ（能動的）な学びを身につける必要があります。レポートやディスカッションなどの方法で自分の考えを表現できるようになることを目指すとともに、将来の「生き方」を考えるための機会とします」。

授業計画は以下のとおりであった。

第１回　コンピュータの操作方法の確認（履修登録確認など）
第２回　本学での学び①　建学の精神など
第３回　本学での学び②　個人面談

第 4 回　個人面談など　大学内施設ツアー
第 5 回　履修指導（履修訂正期間 22-28 日）など
第 6 回　学修ポートフォリオ「学修成果可視化」記入など
第 7 回　ノート・テイキング、テキストの読み方など
第 8 回　図書館ツアー：（第 6 回～第 8 回に分散実施）
　　図書館ツアー+ガイダンス（各週二クラス）
第 9 回【学科合同】 大学生活（先輩の話）
第 10 回 レポートの書き方 ① ミニレポート作成
第 11 回 レポートの書き方 ② ミニレポート講評
第 12 回 ディスカッション①　資料の収集と作成
第 13 回 ディスカッション②　ディスカッションとレポート作成など
第 14 回 まとめ（レポート講評など）
第 15 回【学科合同】キャリア　先輩の話（卒業生）

2022 年度は、コロナの感染拡大がやや落ち着き始めた時期に授業が始まった。前年度より、新入生にはノートパソコンが必携になったことを踏まえ、大学の授業開講日前から、新入生全員を集め、第 1 回の大学基礎演習の合同授業を実施した。新入生（以下 1 セメ学生とする）は、遠隔授業用ソフトである zoom や Microsoft 社 teams の設定などのパソコンの基本操作を練習するとともに、ネットを通じた履修登録や連絡網の設定などを行い、大学からの連絡事項などを見逃さないよう基本的知識や技能を学んだ。コロナ感染拡大により、社会全体にデジタル化が進んだとはいえ、学生の多くはスマホの使用のみに限られることが多い。そのため、社会人として必須のスキルとなるノートパソコンの操作に早い段階で慣れることも念頭にあった。

大学基礎演習 I では、到達目標の一つである「（4）教員や友人との適切な人間関係をつくる。」が重要になる。1 セメ学生と面談をすると、必ずと言っていいほど友人関係の構築に関する不安が挙げられている。2022 年度入学の学生は、高校においてもコロナ禍で人との接触が制限され、他人とのコミュニケーションをとること自体を怖がるような印象を受けた。そのため、大学基礎演習 I では、感染拡大を防止する手段を講じつつ、ディスカッションの回だけでなく、多くの授業で学生同士が意見交換を行える時間が設定されている。例えば、パソコンの操作の練習や履修登録の確認においても、教員一人では一クラス 30 名以上全員をくまなく対応するには限界がある。そのため、パソコンの操作においても学生同士で教え合い、コミュニケーションをとらせるように心がけている。「大学での学びに必要な基礎的知識・技能・態度を身につける」ためにノート・テイキングやテキストの読み方も、学生が相互に確認し合うことで、関係性を構築するようにしている。

当該年度での大学基礎演習 I の特色としては、以下の 3 点を指摘したい。初めに、1 セメ学生が大学全体を理解するために、「キャンパス内スタディツアー」と銘打ち、大学内の施

設ツアー（スタンプラリー）を実施したことである。この活動は早くから1セメ学生に大学施設のことを理解してもらい、積極的に活用してもらうことを狙いとしていた。各クラスで4,5名ごとにチームを作り、大学の重要施設であるキャリアセンターや学生支援センター、教職教育推進センターなど10か所程度を訪問し、施設職員から押印をもらうという単純なものである。今回は初めての試みであり、学生支援センターに所属する社会学科のピアサポート学生に協力を依頼した。広い構内で場所がわからず迷う 1 セメ学生たちへ場所を教えたり、屋上庭園では 1 セメ学生の写真撮影を手伝ったりしてくれた。また各施設の職員の方々にもご協力を仰ぎ、ご快諾いただいた。ここに感謝申し上げる。

次に指摘したいのは、感染拡大防止の観点から 2 年間実施できなかった図書館見学ツアーと図書館職員による利用ガイダンスを慣行できたことである。第 6 回から第 8 回に分けて、二クラスずつ分散してガイダンスと見学ツアーを行った。1セメ学生が陥りがちな安易な感想文ではなく、情報収集と分析したことを論理的に説明するものがレポートであると授業で認識させるために、図書館の活用は重要であることを学生に早い段階で知らしめることができた。

最後に、「大学生活（先輩のはなし）」、「先輩のはなし（卒業生）」と題して1セメ生に先輩学生からさまざまなアドバイスを聞く学年全体で実施する合同授業を実施できたことである。ただし、感染予防のために、1 セメ学生全員を一つの教室に集めるのではなく、各クラスが実施される6つの教室に分散して、zoom で遠隔配信するという手段を講じた。

「大学生活（先輩のはなし）」では、5名の先輩学生が、学生運営委員会や、クラブ・サークル活動について、四天王寺大学のピアサポートの活動について、社会学科で取得できる社会調査士・認定心理士について、教員を目指す学生にむけてなど、自らの体験を通じて貴重な話を講演していただいた。6月に実施したが、新入生にとっては大学の授業に慣れるとともにいわゆる中弛みになる時期であったため、彼ら自身にとっても、「課題が多くてあきらめかけた授業に対して、気持ちを引き締めてもう一度頑張ってみる」という意見などが出ていた。

「先輩のはなし（卒業生）」では、キャリアセンターの協力の下で、3名の社会学科卒業生に参加していただいた。学生に早い段階で自らの将来プランを意識してもらうために実施した。小学校教諭、法務省専門職法務教官、福祉NPO法人職員に就いた卒業生3名は、それぞれが就職活動などでどのように考え、その職業に就いたのか、また大学生活で特に学生たちに実践してほしいことについて話をしていただいた。卒業生たちから異口同音に「怖気づかず、多くのことにチャレンジしてほしい」という言葉に、1セメ学生たちも勇気づけられたようであったことからも、このような取り組みは重要であろう。

次に、大学基礎演習 II の概要は、以下のとおりである。「この科目は、大学における学修と生活の課題を自覚し、必要な技能を獲得することを目標しています。具体的には、夏学期の演習をふまえて、レポートの書き方、ディスカッションやプレゼンテーションのスキルな

どをさらに向上させることを狙いとします。大学では、高校までとは異なったアクティヴな学び方を身につける必要があります。この科目では、さまざまな社会問題をとりあげ、テーマについてのグループ学習をすすめるなかで、「生きた学び」を体験します。そこから得たものをもとにいろいろな角度からディスカッションし、自分なりに表現できるようになることを目指すとともに、将来の「生き方」を考えるための機会とします」。

授業計画は以下のとおりであった。

第１回：オリエンテーション（夏学期の振り返りと冬学期の学修計画）
第２回：個別面談とポートフォリオ入力（１）
第３回：個別面談とポートフォリオ入力（２）
第４回：社会問題について考えるために（１）（社会問題へのまなざし）
第５回：社会問題について考えるために（２）（関心のある社会問題について調べる）
第６回：社会問題について考えるために（３）（関心のある社会問題についてディスカッション）
第７回：社会問題について考える（１）（ゲストスピーカーによる講演）
第８回：社会問題について考える（２）（意見発表とレポート作成）
第９回：社会問題について考える（３）（ゲストスピーカーによる講演）
第 10 回：プレゼンテーションの基本と準備（１）（振り返りとディスカッション）
第 11 回：プレゼンテーションの基本と準備（２）（テーマ設定と個別・グループ作業）
第 12 回：プレゼンテーションの基本と準備（３）（資料整理と情報収集）
第 13 回：プレゼンテーションの実際と演習（１）（プレゼンテーションに向けた役割分担とリハーサル）
第 14 回：プレゼンテーションの実際と演習（２）（プレゼンテーションの実施と相互評価）
第 15 回：まとめ

今年度は、コロナ禍で２年間実施できなかったゲストスピーカーを招いて社会問題について考える機会を第７回、第９回に設けることができた。子ども食堂をはじめ子どもを中心として地域を巻き込んだ支援を行なっておられる NPO 法人の方と、視覚障害の当事者の方をお招きして社会問題にまさに最前線で取り組むこと、当事者の経験とはどういうものなのか、肌で感じる機会になった。社会学科の大学基礎演習 II では長年このように社会問題を感じ考える視点をもつ機会を提供しており、この授業をきっかけに子ども食堂に関心をもって卒業研究のテーマにした学生いるなど、その後の学科での学びにもつながっていることがわかる。

基本的なプレゼンテーションの方法（パワーポイントの作り方など）は数年前に比べて高校までの学びで獲得済みの学生が多く、テーマの設定やディスカッションのポイント、考察の仕方などより内容の検討に特化して授業を進められるようになった。一方で、インターネ

ットから情報を得ることが当たり前の学生が多く、情報を鵜呑みにせず自らの視点をもつことを指導することが今後さらに必要になると思われる。

３．授業相互参観について

（1）相互授業参観の実施

令和 4 年 11 月 18 日（金、月曜授業日）から 12 月 15 日（木）にかけて、社会学科の専任教員が担当科目のいずれかを公開し、各自ひとつ以上の公開科目を参観する、という形式で実施した。ただし、2 科目は上記期間内の授業内容が参観にそぐわないという理由で期間前後の公開となった。また、今年度は大学で指定した「数理・データサイエンス関連科目」が公開されたが、社会学科からも 1 科目がその対象となった。公開科目とその担当教員、参観した教員は以下のとおりである。

■担当教員と公開授業科目、参観教員一覧（敬称略）

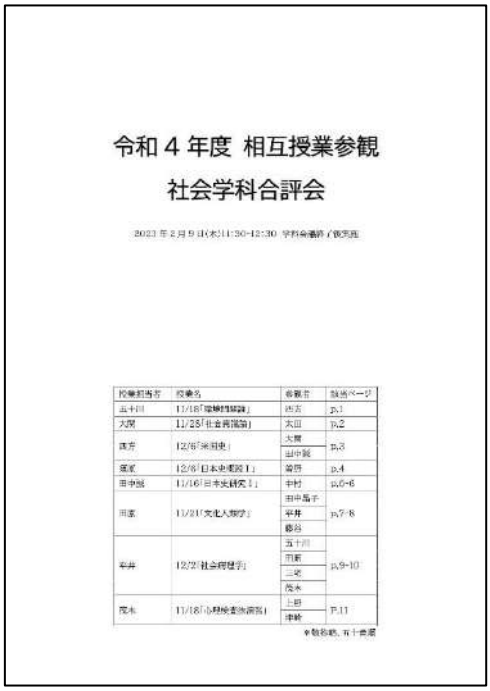
氏名	公開日	曜日	時限	授業名	教室	参観者
田原	11/21	月	1 限	文化人類学	6-352	田中晶子、平井、藤谷
大関	11/28	月	4 限	社会意識論	2-305	太田
須原	12/6	火	2 限	日本史概説Ⅰ	4-412	曽野
曽野	11/30	水	3 限	演習Ⅱ	7-116	—
藤谷	11/21	月	4 限	仏教と経営	4-416	—
茂木	11/18	金	4 限	心理検査法演習	2-410	上野、津崎
上野	11/16 (注 1)	水	2 限	保健統計学	4B152	—
太田	12/1	木	4 限	文化研究概論	講堂 702	—
	12/2	金	4 限		6-353	—
田中晶子	11/18	金	1 限	心理学実験法	4-214	—
平井	12/2	金	3 限 4 限	社会病理学	オンデマンド	五十川、田原、三宅、茂木
三宅	12/5	月	3 限	カウンセリング理論	6－353	—
五十川	11/18	金	3 限	環境問題論	5-210	四方
四方	12/6	火	1 限	米国史	6‐206	大関、田中誠
田中誠	11/16	水	5 限	日本史研究Ⅰ	4-412	中村
津崎	11/18	金	1 限	国際経済論	4-316	—
中村	12/19 (注 2)	月	3 限	地理歴史教科教育法	6-213	—

注 1：数理データサイエンス関連科目として公開。コンピュータでデータ解析を実施するのはこの日までのため、相互授業参観期間前の公開となった。
注 2：相互授業参観期間中は模擬授業の準備回のため公開せず、期間後に模擬授業の実施回を公開した。

（2）合評会の開催

合評会に先立ち、合評会資料を作成した。参観者は参観シートにコメントを記入し、授業担当者はコメントへのリプライを提出した。全てのコメントとリプライは Google Drive 上で学科教員が共有できるようにした。全 11 ページから成る合評会資料の一部を以下に示した。

■合評会資料の一部



令和４年度 相互授業参観

社会学科合評会

2023 年 2 月 9 日(木)11:30-12:30 学科会議終了後開催

授業担当者	授業名	参観者	該当ページ
五十川	11/18「環境問題論」	西方	p.1
大関	11/28「社会調査論」	太田	p.2
西方	12/6「米国史」	大関	p.3
		山中裕	
荒武	12/6「日本史概説 1」	菅田	p.4
田中裕	11/16「日本史研究 1」	中村	p.5-6
用害	11/21「文化人類学」	田中基子	p.7-8
		平井	
		藤谷	
平井	12/20「社会調査学」	五十川	p.9-10
		用害	
		三宅	
		筑木	
筑木	11/18「心理検査法演習」	上田	P.11
		中峰	

※敬称略、五十音順

五十川先生:11/18「環境問題論」

西方先生のコメント

授業に関して

第 7 回授業(エコロジー論的発想の相対化)という授業に参観させていただいた。社会学科学生はセメ授業であり、参加する学生数が 180 名ほどだったようだった。学期の頭に教室変更されていることを五十川先生から知らされていたにもかかわらず、参観を忘れてしまったために、授業に遅刻してしまった。ここにお詫び申し上げます。

授業は対面授業で多数の学生が出席し、zoom による時間受講も数名いた。課題形式は配布プリントを配布してパワーポイントをスクリーンに投影する形で授業が行われた。はじめに前回の授業のおさらいにつって、イギリスのナショナル・トラスト運動とイギリスの自然(景観)がなぜ「美しい」のかについて説明を確認し、今回の授業での問題「コモンズ(共有地)としての自然と人間のかかわり」を提示されていた。授業全体をはじめに示すことで、学生にとっても全体像が分かりやすい構成になっていた。

配布プリントはパワーポイントの主要部分を抜粋し、かつ重要箇所や注目すべき部分は空欄に作り替えて、学生が記入できるように工夫されていた。また、配布プリントは A4 用紙 1 枚の構成に簡潔にまとめられていた。個人的には余裕として紙をさらに大量学のアジール空間論などに興味湧く。環境に対するタイでの無線通信の評価が 180 度転換していることなど、驚かされた。学生にとっては、五十川先生自身が調査された資料構造や前川教の「不法占拠」が面白く感じられていたように思われる。授業構成にかしポートとして各学生の受講生 IDU.net のコメント欄に記入させることで各論の定着を図っていた。

・授業の雰囲気、教室設備に関して

パソコンでパワーポイントを美しく編集しながら配布プリントに熱心に書き込む学生も多く、また、わからない箇所を調べている学生も見られた。その点様では、学生がパソコンを使いながら授業を受けるのは簡単かもしれない。ただし、学生の中にはパソコンで授業とは関係の脱線行為をしているものもいたが、これはやがはスマホ利用にパソコン使用についての「悪い癖」の観点であろう。

授業当日は 11 月中旬とはいえ、3 時限目でも人数密内部は比較的暖房が効く。寒く感じた。寒にはは感染拡大のために窓が開きある程度換気しているなかでやむを得ない面はあるが、教員や学生たちにとっては体調面で気になるところであり注意される。

五十川先生のリプライ

西方先生、参観いただきありがとうございました。この授業は基本的に、一般的な環境問題概論を相対化するところがいつも出発点なのですが、お早の学生は、そもそも関心をもる一般的な環境問題概論を共有しているところが多分にあり、そこからもう一歩踏み込むところです。その実践として、完全論的な説明よりも具体的な事例のなかでひっかかりを見ていくほうがよいかということで、事例多めの構成のスタイルになっています。完璧にならないように、分かりやすいようにとは考えているものの、ご指摘のとおり、聞いてくれる学生は聞くのですが、聞かない学生は全然聞きません。コロナ後パソコン必携を経て、教室は 100 名近い大講義室なのに真剣な目が 40 人になりました。ご観察いただいたとおり、本質はかわっていないと思います。聞く人にはちゃんと届き、聞いていない人にもふとした瞬間に、ふわっと年数を経ていつか響くものがあるような、そんな授業ができればいいなぁと、変わらず、考えています。見届けて、ありがとうございました。

令和 5 年 2 月 8 日（木）の学科会議終了後、資料に基づき、Zoom にて合評会を行った。

参観者のコメントは、有益な手法を学べたという評価や、参観した授業の改善のための提案など様々であったが、多くのコメントに共通して見られたものを以下にあげる。まず、対面の受講者とオンラインでの受講者が混在する中で、資料の示し方や双方向性の確保等に様々な工夫がこらされていることを指摘するものである。次に、パソコン必携化によって、パソコンで資料を見たり調べ物をしたりと有効に活用しながら受講している学生がいる一方、授業とは無関係の脱線行為に使用している学生も散見されることを指摘するものである。さらに、学生の知識量や理解力に合わせ、抽象的な授業内容を分かりやすくするための工夫、例えば穴埋め式プリント、視覚に訴える資料・動画の活用、学生のコメントや回答へ

の授業内でのフィードバックといった方法が取られていることを指摘するものである。

授業担当者のリプライの複数に共通して見られたものは、前提となる一般的知識を共有できない学生を授業参加させるためどのような工夫をこらしているかであった。具体的には、具体的かつ身近な事例をあげる、文章化・視覚化して示す、学生に文章化・視覚化させる、双方向的授業を展開する、といったものである。

相互授業参観の実施形態については、毎年冬学期の同時期に行うため、いつも同じ授業の参観になってしまう、時間の都合でどうしても参観できない授業があるなどの問題が挙げられた。夏学期か冬学期いずれかの開催で良いが、開催時期の変更なども今後検討されることが望ましいという意見が出た。また、相互授業参観によって改めて学科でレベルの高い授業が展開されていることがよく分かり、大変勉強になると評価する声があった。

４．学科独自の取り組み

社会学科には、これまでも断続的に聴覚に障害のある学生が在籍してきた。従来は個々の教員の努力に任せる面が強かったが、令和 4 年度はコロナ禍での授業体制を試行している状況にあったこともあり、社会学科の教員間で可能な限り情報共有するなかで、当該学生（勉学意欲がかなり強い）の意向を踏まえて、時代の要請に合った取り組みを行うことを目指すことになった。なお、この報告では、紙数の関係上、令和 4 年、8 月 29 日に開催された「情報保障相談会＆授業で使える手話講座」を中心にして、その一部を紹介する。

当該学生が入学する前から、UD トークの使用方法、Microsoft Stream や Vrew を用いて動画に字幕をつける方法、口元の見える透明マスクの種類などを学科教員内で教え合った。また、授業開始前のオリエンテーション期間に 1 セメ担任と学生が Zoom で個別面談を行い、Zoom でのやりとりやオンデマンド動画ですべき工夫について具体的に検討した。例えば、Zoom では基本的に口元が見えていればやりとりできるが、一般的でない語（履修要覧、IBU.net などの大学独自の用語）は文字化する必要があることなどである。またオンデマンド動画は文字情報が必須であることなどである。グループワークのやり方についても検討し、紙とペンを用意して、喋る本人が書きながら喋る方法を試すことにした。こうした内容はすぐに学科内で共有することにした。

このように準備と情報共有をしていたが、実際に授業が始まってからは、様々な問題が発生し、その都度 1 セメ担任が相談にのり、学生支援センター、教務課、教職教育推進センターなどと連携しながら対応にあたった。例えば、「和の精神Ｉ」の動画の自動生成字幕が意味不明だったので、教務にかけあって資料を配付してもらうようにした。また情報保障が不十分な授業については担当教員に改善をお願いした。オンデマンド動画も、最初は口話を試みたが、途中から動画の口話は不可能で字幕さえしっかりしていれば良いということが分かったので、その旨オンデマンド授業を担当している先生方に伝えた。

1 セメ担任は手話も勉強して、マスクが外せない状況でも手話で簡単な指示を伝えられるようにした。他の教員も手話が使えたら良いのではないか、情報保障について改めて知って

もらう機会もあったら良いのではないか、と学生本人と話し合い、夏休みの 8 月 29 日に「情報保障相談会＆授業で使える手話講座」を開催することにした。その案内文は、次のようなものである。

■8/29「情報保障相談会＆授業で使える手話講座」案内文

来学期以降＜学生名＞さんが自分の授業を受講したらどうしよう、という不安をお持ちの先生もいらっしゃると思います。そこで、＜学生名＞さんを招いて、社会学科の先生方を対象とした「情報保障相談会＆授業で使える手話講座」を開催します。

前半：情報保障相談会
夏学期の情報保障について、どのようなやり方が有用だったか、不要だったか、あるいはかえって有害だったかを＜学生名＞さんに振り返ってもらいます。また、授業形態や教員の個性によってどのような情報保障が良いかは異なりますし、教員によってできることも異なります。そこで、ご自分の授業ではどのような方法を用いれば良いか、皆で考えましょう。事前に＜学生名＞さんへの質問も募集します。

後半：授業で使える手話講座
まだマスクを外すのはためらわれるご時世、透明マスクに付け替えなくても授業前後のちょっとしたやりとりには手話が便利です（全く手話を知らなかった上野ですが、ネットで手話を検索してかなり活用しました）。＜学生名＞さんに言語学の観点から手話について簡単に説明してもらった後、授業で実際に使える手話を教えてもらいます。＜1 セメ担任名＞の体験ももとに、「資料があそこにあるから取って」「これ今すぐ書いて出して」「これは来週でいいよ」「今日は動画見るから字幕の見えやすい席に座って」「ちょっと待って」などの手話を紹介します。事前に先生方の「使いそうな／使いたい例文」も募集します。

1 セメ担任が学科教員、学生支援センター、その他関係教員に案内を出し、情報保障の質問と手話の例文は Google Form で事前に募集した。Google Form と当日のスライドの作成は学生本人が行った。

■当日の参加要項

＊カメラ ON、マスクなし、表示名「漢字氏名（専門領域、担当科目名等）」でご参加下さい。（表示名変更方法：Zoom 画面下部「参加者」→自分の名前→「詳細」→名前の変更）
＊＜学生名＞さんはスピーカービューで発言者を特定し、口話で発言内容を読み取りますので、参加者は自由に発言して頂けます。
　チャットには、情報の補助＆記録ついでに、＜1 セメ担任名＞が発言者と発言内容を都度

書き込んでいきます。

【情報保障相談会】10:00-11:15
10:00-10:05　趣旨説明
10:05-10:45　＜学生名＞さんによる今学期の振り返り＆事前質問、相談回答（スライド画面共有）　＊録画します
10:45-11:15　情報保障についての質問＆相談　＊録画せず、＜1 セメ担任名＞が要旨をチャットで記録します

【授業で使える手話講座】11:20-12:00　＊録画します
11:20-11:22　趣旨説明
11:22-12:00　手話講座（冒頭で言語学における手話について＜学生名＞さんから説明あり）

参加は、当該学生と社会学科教員 9 名であったが、そのほかに教育学部教員 2 名、また、学生支援センター職員 1 名が参加した。録画した動画および質疑応答や議論の内容をまとめたファイルは GoogleForm で共有し、学科教員や学生支援センターなど関係各所に案内した。なお、スライド質疑応答等をまとめた資料は、学生本人が冬学期の授業配慮申請のときに授業担当教員に配布した。これがあれば一から説明せずにすむので良かった、と言っていた。また、この会に参加した先生は、そうでない先生と比べて対応が異なるので開催して大変良かった、と言っていた。

冬学期も、2 セメ担任が中心になって当該学生と授業担当教員、関係する部署とをつなぐ役割を果たし、その都度、社会学科内で情報共有するようにした。最後に、当該学生本人による「振り返ってのまとめ：文字起こしについて」を紹介して終わりにしたい。

【現状】
・夏学期と比べて冬学期はオンデマンドで受講することが増え、文字起こしを活用することが増えた。
・授業を受ける時は、基本的にスライド資料と文字起こしの二つを活用した。
・文字起こししたものは、すべて「話し言葉」。
・先生が手振りや資料を見せるなど様々な情報を付け加えているため、文字情報だけではそれらの意味を汲み取ることが難しい。
・ノートテイク養成講座で文字を起こすだけではなく、音声情報を視覚情報にするように声かけたことにより、「あー」「えっと」という言葉は省略されるようになった。
・現時点の文字起こしが、利用者の手元にどのくらい溜まっているのか、届いているのかを、度々授業担当の先生に報告していた。
・いつ文字起こしが届くのか不明だったため、勉強計画が立てられなかった時があったた

め、支援センターから支援者に送られる期限がかかれているメールを本人にも送ってもらうようにした。

【改善点】来年度に向けて

・ノートテイカーに「話し言葉」ではなく「書き言葉」にしてもらえるように依頼をしてみる。

・授業担任、支援センター、支援者と繋がれるプラットフォームをつくること。

人文社会学部 人間福祉学科

本報告書の構成は以下の通りである。

１．はじめに
２．大学基礎演習について
３．授業相互参観について
４．学科独自の取り組みについて
（１）ソーシャルワーク演習・社会福祉相談援助演習担当者打ち合わせ会
（２）ソーシャルワーク実習・社会福祉相談援助実習・実習報告会
（３）社会福祉士国家試験対策講座
（４）精神保健福祉士国家試験対策講座
（５）福祉系公務員受験対策講座
（６）その他

１．はじめに

本報告書は、令和４年度に行った人間福祉学科健康福祉専攻のＦＤ活動をまとめたものである。

本専攻のＦＤ活動は、ディプロマポリシーとカリキュラムポリシーに則って、以下の２点（Ⅰ、Ⅱ）を目的としてＡ～Ⅰの活動に取り組んでいる。

Ⅰ　講義・演習との緊密な協働を通して実習教育を充実させる。
Ａ．大学基礎演習
Ｂ．授業相互参観
Ｃ．ソーシャルワーク演習・社会福祉相談援助演習担当者打ち合わせ会
Ｄ．ソーシャルワーク実習・社会福祉相談援助実習・実習報告会
Ｅ．社会福祉士実習懇談会
Ｆ．精神保健福祉士実習懇談会

Ⅱ　受験対策講座を充実させることを通して国家試験（社会福祉士・精神保健福祉士）の合格率を向上させる。
Ｇ．社会福祉士国家試験対策講座
Ｈ．精神保健福祉士国家試験対策講座
Ⅰ．公務員社会福祉職受験対策講座

以上のＡ～Ⅰについて、ＦＤ活動としての概略を説明する。

Ａ．大学基礎演習

従来のこの科目の目的は、1年生にこれからの学習、進路、関係づくりの基礎を提供しながら、「学びのスキル」を習得させることである。教員の提示する課題設定に対し、学生が主体的に取り組み発表するものであり、「学生が主体的に学ぶ」ことを目指している。今年

度からは、対面授業で実施しているが、新型コロナの影響で欠席する学生についてはオンライン授業を認めた。①学生が大学生活に円滑に適応できるようにサポートする、②課題レポートや登校日を利用して学生の状況を把握する、③レポートの書き方の指導に重きを置いた。学科の全教員で担当している。

Ｂ．授業相互参観

近年は「社会福祉士」「精神保健福祉士」養成の指定科目を中心に参観科目として公開しており、また参観者があった科目については事後に合評会を実施している。令和４年度においても「社会福祉士」「精神保健福祉士」養成の指定科目を中心に参観科目として公開し、授業相互参観をおこなった。

Ｃ．社会福祉相談援助演習担当者打ち合わせ会

講義科目と並んで実習を支える基礎となる演習科目に関して、原則年度末に年１回、新旧の科目担当者が一堂に会して、授業方法の実際を相互に開示し、課題等について議論している。この打ち合わせは、第１に教員のファカルティの中核である教授力（とりわけ演習及び実習指導）を高める場、第２に実習生としての態度形成にかかわる個別指導上の課題を共有する機会、第３に社会福祉士養成カリキュラムの課題や改善点を見出す場として機能している。

Ｄ．社会福祉相談援助実習・実習報告会

Ａ～Ｃの活動の集大成として学生主体による実習報告会がある。新型コロナ以前は、大教室での全体発表会と、2 教室に分かれて分科会を行っていたが、２年前からオンライン開催となっていたが、令和４年度は新型コロナウィルス感染拡大防止に最大の注意を払い,
対面での実施とした。実習報告会は学生主体での開催であり、準備から当日の進行においてもすべて学生が行うものであり、文字通り主体的な学びになっている。

Ｅ．社会福祉士実習懇談会　　Ｆ．精神保健福祉士実習懇談会

実習指導者と教員とで、実習指導のあり方を振り返る実習懇談会は、例年 2 月に行われ、実習教育に関する特定のテーマについて議論する重要な機会であるが、今年度も新型コロナウイルス感染拡大防止を理由に開催を見合わせた。しかし、実習時期の変更や実習生の体調不良時の対応など、実習指導者と緊密に連絡を取り合うことが求められた。また、「新型コロナウイルス感染症に対応した学外実習ガイドライン」を作成し、実習機会の確保に向けて実習指導者の理解を求めた。

Ｇ．社会福祉士国家試験対策講座

講義を担当するのは東京アカデミーのインストラクターであり、本専攻の教員は「国家試験受験支援委員会」のメンバーとして、授業の円滑な運営にかかわる業務を担当する役割を担った。3 年生は、夏期と春期の休暇中に集中講義を実施している。今年度は対面授業で実施した。新卒者の合格率は 48.7%（19/39）で、50%を下回る結果となった。一方、既卒者は 24.2%（15/62）と 2009 年以来最も高い合格率となった。総数の合格率も 33.7%と 2009 年以来最高値である。

Ｈ．精神保健福祉士国家試験対策講座

昨年度までと同じく、本専攻の石田が引き続いて講座を担当している。合格率は 100%（3 名中 3 名合格）であった。なお既卒者の受験生は 2 名で 1 名が合格した。

Ⅰ．公務員社会福祉職受験対策講座

公務員社会福祉職に求められる資格（必須ではないが）として、社会福祉士や精神保健福祉士が位置付けられる。公務員社会福祉職受験対策として集中講義で開講しており、本講座修了者から、今年度は 2 名の公務員合格者を輩出することができた。公務員試験を視野に入れた就職活動をする学生増加に貢献し、進路選択を広げる重要な講座である。

２．大学基礎演習について

（１）大学基礎演習Ⅰ

建学の精神をもとに、大学における学修と生活の意義を自覚し、必要な技能を獲得することを目標とする。大学において、求められる基礎的知識・技能・態度、ソーシャルワークに関する基本的な知識を修得し実践する。また、人間福祉学科健康福祉専攻への帰属意識を高め、専攻における仲間意識を育み、大学生活全般への見通しをもてるように、授業計画を策定する。授業形態は、全学共通の到達目標に則りながら、演習の形で行う。

今年度は、コミュニケーションスキルを高めるためのグループワーク、学びのスキルを高めるためのノートテーキングやレポートライティング・スキルの講義、学びのプランを主体的に組み立てるための卒業生の講義、学習ポートフォリオを活用した学びの目標の設定などを実施した。

	日　程	内　容
1	4月6日（水）	オリエンテーション等　授戒会動画　PROG動画
2	4月14日（木）	「用語の理解・試験等について」コミュニケーションのスキルを高める①（他己紹介）
3	4月16日（土）	個人面談
4	4月21日（木）	「ポタジェプロジェクト」紹介、「実習と国家資格について」「公務員志望者向け講座」「2022年卒業生の進路」、学修ポートフォリオ入力
5	4月28日（木）	「PIATA」の紹介　図書館ガイダンス
6	5月12日（木）	学びのスキルを高める①（ノートテーキングスキル）鳥海先生
7	5月19日（木）	学びのスキルを高める②（レポート・ライティング・スキル）平川先生
8	5月26日（木）	学びのプランを組み立てる①卒業生講師　苺谷友樹氏
9	6月2日（木）	コミュニケーションスキルを高める ②答えのあるグループワーク（坂本先生）
10	6月9日（木）	コミュニケーションスキルを高める ③答えのないグループワーク（笠原先生）
11	6月16日（木）	学びのプランを組み立てる ②児童福祉について（上續先生）
12	6月23日（木）	学びのプランを組み立てる ③高齢者福祉について（武田先生）
13	6月30日（木）	学びのプランを組み立てる ④卒業生講師　上田菜央氏
14	7月7日（木）	学びのプランを組み立てる ⑤ 障害者福祉について（原先生）
15	7月14日（木）	各クラス個別面談：PROGの結果について、クラブなど学生生活・学習面のことなどについて

（２）大学基礎演習Ⅱ

「大学基礎演習Ⅰ」で学んだ「建学の精神」と「本学で学ぶ意義・目的」を深めるとともに、11 月と 12 月に実施する見学実習を含む学外活動等とその事前・事後学習を通して２年次以後の学修に必要な基礎的知識・技能・態度のステップ・アップを図る。また、授業全体を通して、自分の進路について考えることができるよう学修を深める。

新型コロナ感染予防対策として、見学実習に関しては、すべての実習参加学生と引率教員

に「実習生健康管理表」（学科独自作成）を配布して、実習前２週間、検温してそれに記入してもらうことにした。

回	月　日	内　容　等
1	9月 22 日（木）	シラバスの確認、アンケートの結果、学科目標の省察と目標の入力
2	9月 29 日（木）	見学実習予定先の調査１
3	10 月 6 日（木）	見学実習予定先の調査２
4	10 月 13 日（木）	見学実習予定先の調査３
5	10 月 20 日（木）	各施設説明・実習先確定
6	10 月 27 日（木）	特別講師　石橋龍太郎氏　山内つき楓氏
7	11 月 10 日（木）	実習の心得（坂本先生）・実習ノートの書き方（平川先生）　　平成４年度「学生選書」募集案内について
8	11 月 17 日（木）	見学実習先最終確認と見学実習ノート作成
9	11 月 24 日（木）	見学実習①　12 月 1 日見学実習の学生は、大学基礎演習Ⅱ休講
10	12 月 1 日（木）	見学実習②　11 月 24 日見学実習の学生、大学基礎演習Ⅱ休講
11	12 月 8 日（木）	実習ノート作成・提出　プレゼンテーション資料作成
12	12 月 15（木）	実習ノート返却、プレゼンテーション資料作成（中間発表）
13	12 月 22（木）	プレゼンテーション資料作成（中間発表）
14	1 月 12 日（木）	プレゼンテーション　実習ノート提出
15	1 月 19 日（木）	学びのプランを組み立てる⑤（学科目標の省察、3 セメ学科目標作成）来年度以降の実習に関する授業について

見学実習一覧表（68 名）

種別	実習先名	実習学生数	引率
高齢	四天王寺悲田院特別養護老人ホーム	8 名	原
	四天王寺悲田院養護老人ホーム	3 名	鳥海
	四天王寺悲田院在宅（デイセンター）	4 名	坂本
	高齢者デイサービス　すごろく	1 名	笠原
障害	（株）PROmessa　ぽんぽこはうす	14 名	平川
児童	児童養護施設　羽曳野荘	16 名	上續
	児童養護施設　清心寮	8 名	石田
	大阪市こども相談センター	14 名	川下

３. 授業相互参観について

（１）実施計画

本専攻の授業相互参観は、「社会福祉士」「精神保健福祉士」国家試験受験資格取得のための指定科目および「教科に関する科目」を中心に、所属教員全員が公開授業を計画し、その後予定された日程等をふまえて授業相互参観を実施した。

以前は 12 月に実施する「実習報告会」（科目名は「社会福祉相談援助演習Ⅴ」「社会福祉

相談援助実習指導Ｃ」）を公開授業としていたため、多数の教員の参観が集中した。それを避けるために、近年は「実習報告会」を公開授業科目とはせず、基本的には教員からの公開授業科目と公開日時の申告により、学科内教員全員が授業相互参観を実施できるように計画している。その詳細は以下の通りである。

（２）授業相互参観の実施

授業相互参観・合評会の実施と参観者は下記の表の通りである。

担当教員	日　時	時限	公開授業科目名	教　室	合評会	参観者
石田（晋）	12 月 1 日	木 1	精神保健福祉の原理Ⅱ	6－303	授業終了後	なし
上續	11 月 28 日	月 3	教科教育法Ⅱ（福祉）	6－303	授業終了後	鳥海
笠原（幸）	12 月 7 日	水 1	ソーシャルワーク実習指導Ｂ	2－213	授業終了後	川下
川下	11 月 25 日	金 3	カウンセリング理論	6－353	授業終了後	坂本・原
坂本（光）	11 月 21 日	月 4	ソーシャルワーク演習Ⅰ	6－212	授業終了後	なし
鳥海	11 月 28 日	月 5	ソーシャルワーク演習Ⅲ	6－213	授業終了後	大西
原（順）	12 月 5 日	月 5	ソーシャルワーク演習Ⅲ	6－353	授業終了後	なし
平川	12 月 14 日	水 1	ソーシャルワーク実習指導Ｂ	6－304	授業終了後	なし

（３）合評会の内容

授業参観者がいた科目については予定通りに合評会が実施された。その後授業参観者が「参観シート」を作成し高等教育推進センターに提出した。以下の内容は授業参観者の「参観シート」を転記したもので、書式は不統一である。

科目名：教科教育法Ⅱ

＜授業について＞

・授業内容は、高校・福祉科目「生活と福祉」という単元について、学習指導案を作成した上で模擬授業が行われた。
・受講生と教員が生徒役になってグループワークに参加したり、教科書の音読に取り組んだ。

＜学生の状況＞

・あらかじめ準備してきた学習指導案に沿って、パワーポイントが作られている。
・質問→解説→グループワーク→教科書音読→まとめ（穴あけ問題）という流れが練られていた。30 分間の授業であった。
・萎縮することなく、のびのびと授業に取り組む様子が評価できる。

＜指導の状況＞

・高校での授業の実際を例示しながら、パワーポイントの利用上の留意点やノートをとることの意義について理解を促すようなかかわりがみられた。
・学生が自由に質問できる雰囲気がある。それは教員と学生とのパートナーシップや信頼関係に裏付けられていることであり、素晴らしいと感じた。

科目名：ソーシャルワーク実習指導 B

・授業開始前からスライドに当日の授業進行が提示されており、授業の流れが把握しやすいと感じた。
・学生との関係がとても良好に見えた。あえて質問がないかを尋ねなくても、学生から積極的に発言があり、それに先生が丁寧に答えるという形が、日ごろからとても自然に行われているように見え、また、一人ひとりの名前を呼び掛けて関わっておられることで、学生も個人として尊重されている感覚を得ていると思った。
・配付物について、自分であれば、配付して説明だけで終えるであろう所を、学生に読み上げさせ、さらに重要部分にマーカーを引かせるというように丁寧に指導しておられ、学生が授業後に資料を見返した時のことまで考えて指導されているのがよくわかった。
・グループワークでは、グループ分けの作業がとてもスムーズで、グループに偏りが生じた際のメンバーの入れ替えも瞬時で、時間的ロスがないと感じた。また、テーマごとに話し合う時間を分割することで、ワークにメリハリが出ていると感じた。
・同じ科目を担当しているが、笠原先生の丁寧な授業には見習うところがとても多く今回の参観で得たことは、さっそく取り入れていきたいと思った。

科目名：ソーシャルワーク演習Ⅲ

・先週まで「ソーシャルワーク実習Ａ」で休講していた再開直後の授業であった。
・残念ながら実習期間が延びている学生が欠席であったが、それ以外は全員出席であった。教員から実習への労いの言葉でスタートしており、受講生も授業参加のムードが高まっていたように思う。
・演習であるが、学生が自ら発言することが少ない「おとなしいクラス」なので、教員の工夫が必要となる。その点、鳥海先生はまず全員が顔を向き合うように机を配置し、正面の学生に質問を担当させるようにされていた。自らの役割を得た学生は、指名されなくても

発言する雰囲気となり、よい緊張感を保てたように感じる。
・また学生から引き出した意見をしっかり受け止め、良い点は褒め、足りない部分は補足していくスタンスで、学生も発言することで「それを大事にしてもらえる」という信頼感を醸成しているように感じた。
・通常は小グループでの活動だったとのことで、今回はクラス全体、しかも授業参観というなかでいつもの雰囲気ではなかったのかも知れない。教員と個々との関係はできていたが、学生同士の関係性がやや希薄のような印象を受けた。しかし、これは今後の授業プログラムのなかで改善されると思われる。

科目名：カウンセリング理論
・「カウンセリング理論」にとても興味があり参観させていただいた。
・認知行動カウンセリングのたくさんある技法を、具体例を挙げながらの説明だったので学生にとってわかりやすかったと思う。聞き取りやすい声のトーンと話し方での授業で良かった。
・パワーポイントのポインター使用は、教員が話している内容がどこなのかがよくわかり、受講生にとってポインター効果があることを実感した。
・前回授業の学生のコメントの読み上げは、他の受講生がどのように考えているかがわかるので、興味深く聞かせていただいたが、学生もきっと同じ気持ちで興味津々に聞いているのだと想像できた。
・授業最初に学生から集められたコメントに対して丁寧に答えている。
・前回の振り返りのまとめをしっかりと行うため、今回への繋がりが分かりやすい。
・一つ一つの説明について、資料の例だけでなく、自らの現場での治療実践であったり、日常の生活体験であったり、分かりやすい例を出しており、学生にも理解しやすい内容となっている。
・パワーポイントも、情報量の割に見やすく作られている。説明時にポインターを使うことも効果的であるので参考にしたい。

４．学科独自の取り組みについて

（１）ソーシャルワーク演習・社会福祉相談援助演習担当者打ち合わせ会

毎年３月下旬～翌年度 4 月初旬に「ソーシャルワーク演習・社会福祉相談援助演習担当者打ち合わせ会」を開催し、「ソーシャルワーク演習・社会福祉相談援助演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」の担当者９名（非常勤講師２名を含む）の参加のもと、各担当者による今年度の授業の振り返りと次年度の演習指導にかかわる改善点及び留意点の確認が行われている。今年度は、2023 年４月３日に担当教員による打ち合わせを実施した。

議事録は次のとおりである。

2023 年4月5日

ソーシャルワーク演習　担当者打ち合わせ　議事録

日　　時:2023 年4月3日(月)15 時 15 分～16 時 45 分
会　　場:四天王寺大学　事務局棟 1 階　第 1 会議室
出　席　者:重野, 脇田, 上續, 大西, 濱田, 原, 吉田, 鳥海(敬称略)
欠　席　者:坂本

1. 担当教員一覧(敬称略)

ソーシャルワーク演習Ⅰ	冬	月曜 5 限	上續, 坂本, 鳥海, 原
ソーシャルワーク演習Ⅱ	夏	月曜 5 限	重野, 鳥海, 濱田, 原
ソーシャルワーク演習Ⅲ	冬	月曜 4 限	重野, 鳥海, 坂本, 濱田, 原
ソーシャルワーク演習Ⅳ	夏	月曜 4 限	大西, 鳥海, 吉田, 脇田
ソーシャルワーク演習Ⅴ	冬	水曜 2 限	大西, 川下, 坂本, 鳥海, 吉田

2. 2022 年度をふりかえって

●受講状況(単位未取得者, 授業計画の変更など)

・演習Ⅲにおいて、途中から欠席し、連絡がとれない者がいた。
・演習Ⅲにおいて、初回に出席したが、履修条件を満たしていないことから退室した者がいた。
・演習Ⅲにおいて、社会福祉協議会の実習に参加した学生が「向いていないのではないか」と職員から言われたとのこと。障害者通所事業所での現場体験(補講)では「適性があるかもしれない」という自己認識の変容がみられた。

●毎回の課題の有無, 期末課題(レポート)の内容

・演習Ⅱにおいては、障害者の意思決定支援に焦点をあてて、本人にとって不利益な自己選択をされる事例を取り扱った。
・演習Ⅳの期末レポートは、地域包括ケアの事例にかかわるロールプレイをふりかえって課題を記述することを課した。
・演習Ⅲの期末レポートは、個別支援計画の作成を課した。

↓

・毎回の課題の有無、期末レポートの有無や内容には、クラスによって違いがみられた。
・次年度以降も裁量に委ねることとする。担当教員の専門分野によって取り扱う事例が異なり、それによって課題の内容も変わることを前提にしてシラバスが組み立てられていることについて、オリエンテーションで受講生に説明する必要がある。

●受講アンケート自由記述回答

・演習Ⅰにおいて、クラスによって課題が質的量的に違いがあることから不公平感を感じているという感想がみられた。

・「課題が多い」という感想がみられた。

3.2023 年度に向けて

【全学共通】

・対面

・コロナやインフルエンザ罹患時の登学停止→出席にかかわる配慮

【クラス共通】

・初回に共通シラバス（添付）＋各クラスの授業計画

・実習指導と同様に「3回以上の遅刻・欠席は単位修得が認められない」を明記

・グループワークの際にはマスク着用を推奨

【演習Ⅱ】

・期末課題（各クラス共通）≒個別支援計画書

【演習Ⅲ】

　ソーシャルワーク実習Ａ

・実習期間：11 月 13 日（月）～11 月 26 日（日）

・2コマの補講（学生と協議）→１月の実習指導 B（水曜 1 限）は休講

【演習Ⅳ】

ソーシャルワーク実習Ｂ

・実習期間：６月５日（月）～７月８日（土）

・5コマの補講＝特別講義4コマ＋学生と協議1コマ

合同授業

・日　時：5月 13 日（土）1・2・3・4限 【６－253室】

・講　師：羽曳野市社会福祉協議会

・テーマ（案）：羽曳野社会福祉協議会の役割と機能，羽曳野市の困りごと解決プロジェクト

↓

打合せ終了後、合同授業の内容や課題について協議を行った

4.クラス・担当者（別紙）

●冬学期　演習Ⅲのクラス

冬学期に5クラスに再編する可能性があるため、それを見越して演習Ⅱで授業内容を完結する。

●配慮を要する学生等にかかわる情報共有

個人情報を含むため割愛

以上

演習科目において、対話や討議などの受講生間のコミュニケーションや、グループによる協働作業は授業の大きな構成要素である。実習に対する動機形成や、コミュニケーションにかかわる主体性の涵養に向けて、教員が継続的にかかわり、実習生としてのレディネスを培う機会となることが期待される。

打ち合わせでは、学生について気になったことや、担当教員が把握した実習意欲などを共有し、実習科目と関連づけていくことが目指されている。

なお、「打ち合わせ会」および「ソーシャルワーク演習・社会福祉相談援助演習」全体の主担当は鳥海、副担当は濱田である。

D．社会福祉相談援助実習・実習報告会

Ａ～Ｃの活動の集大成として学生主体による「実習報告会」を開催した。昨年度までは全面オンラインでの実施となった。今回も感染状況を考慮しながら対面もしくはオンラインの両方を想定しながら準備をした。結果的には対面で開催することができた。実習報告会は学生（３回生中心、編入生など一部４回生）の主体性を高める目的で、準備から当日の進行においてもすべて学生が行うものであり、文字通り主体的な学びになっている。

３年ぶりの対面開催にあたり令和元年度まで実施していた全体発表ではなく、最初から分科会形式で開催、聴講者を変え同じ発表を４回ずつ繰り返して意見交流を行った。聴講者は次年度「ソーシャルワーク実習 B 実習」を希望する学生（ほぼ２回生）である。それに加えて当日の動画を後日１回生にも視聴させた。この実習報告会によって、23 日間、180 時間以上に及ぶソーシャルワーク実習のイメージや自分の目指すべきキャリアとしての社会福祉士像を確立させてもらいたいと考えた。

また、今年度も、実習の履修を希望する１年生には、「社会福祉士に向けての実習」のイメージを早くより持ってもらう目的で、それぞれのグループの発表を Zoom を使用して録画し、その中で関心のある発表をビデオ聴講することを義務付けた。１年生の段階から実習報告会に参加することで、自分の目指すべきキャリアとしての「社会福祉士」をイメージし、意欲を持って学ぶ姿勢にもつながってくる重要なものであると考えている。

（２）社会福祉相談援助実習・実習報告会

「社会福祉相談援助実習」は、社会福祉士の指定実習として 5 週間にわたり現場施設等に通う実習である。例年 6 月上旬から 7 月上旬に大半の学生が実習に行き、若干名が 8 月の夏季期間中に実習を実施している。今年度も一部の施設において新型コロナ感染による対応や実習生の体調不良や家庭環境上の課題などから実習期間を順延したり、別日程を追加

したりして実施した。スケジュールにずれは生じたものの、いずれの施設でも規定の実習時間を満たすことができたため、令和２年度のように学内実習を実施する必要はなかった。

令和４年 12 月 17 日（土）に「実習報告会」を実施した。約 5 週間の「社会福祉相談援助実習」を終えた 3 回生など（一部４回生）が発表学生となり、2 年生など（一部３回生）の聴講学生に対してその経験とそこから得られた知見を毎年報告している。

「実習報告会」は、当日の司会進行など、すべて学生主体で行われている。プログラムや役割分担の企画などについて従来は教員が主に担当していたが、平成 28 年度から学生の主体性を高めるべく学生による実行委員会を作り、プログラムの変更などを企画している。

今年度は、オンライン開催にするか対面開催にするか、感染状況を鑑みながら検討してきた。対面開催とした際も感染対策のため大勢で集まる全体会をやめ、最初から分科会形式で行うことにした（参照：社会福祉相談援助実習報告会プログラム）。

学生の発表は、いずれのグループ（分科会）も優れたプレゼンテーションとなっていた。実習担当以外の教員も参加しており、教員と学生で意見交換する場も設けることで、より良いアクティブラーニングとなり、同時に教員の能力を高める機会にもなっている。

実習の履修を希望する１年生にも聴講することを新型コロナ以前は、義務づけていたが、、昨年同様に動画を記録して実習指導Ａの事前課題の一つとした。

今後も学生の主体性を高める場、学年を越えた学びの交流の場となるように引き続き展開していきたい。

なお、「社会福祉相談援助実習・実習報告会」の担当は坂本（主）、鳥海（副）、川下、大西［短期大学部］、吉田［教育学部］であり、石田、上續、笠原、原、平川、濵田［短期大学部］が参加した。

令和4年度　社会福祉相談援助実習報告会　プログラム
12月17日(土)10:15～15:45

1　グループ発表会(第1部)

10:00	入室開始
10:15	資料配布　連絡事項等説明
	【グループ発表】発表15分＋質疑交流10分
10:25	1回目　発表(15分)／質疑交流(10分)　発表A-Gグループ
10:50	
	移動(10分間)
11:00	2回目　発表(15分)／質疑交流(10分)　発表A-Gグループ
11:25	
	移動(10分間)
11:35	3回目　発表(15分)／質疑交流(10分)　発表A-Gグループ
12:00	
	移動(10分間)
12:10	4回目　発表(15分)／質疑交流(10分)　発表A-Gグループ
12:35	
12:35	休憩

2　グループ発表会(第2部)

	【グループ発表】発表15分＋質疑交流10分
13:20	入室開始
13:30	5回目　発表(15分)／質疑交流(10分)　発表H-Oグループ
13:55	
	移動(10分間)
14:05	6回目　発表(15分)／質疑交流(10分)　発表H-Oグループ
14:30	
	移動(10分間)
14:40	7回目　発表(15分)／質疑交流(10分)　発表H-Oグループ
15:05	
	移動(10分間)
15:15	8回目　発表(15分)／質疑交流(10分)　発表H-Oグループ
15:40	
15:40	受講アンケート記入　　15:45　聴講計画書・受講アンケート・出席票提出

3 グループ発表会　資料目次

【発表方式】　発表15分＋質疑交流１０分

【時間】

第１部　発表A～G	第２部　発表H～O
１回目　10:25～10:50	５回目　13:30～13:55
２回目　11:00～11:25	６回目　14:05～14:30
３回目　11:35～12:00	７回目　14:40～15:05
４回目　12:10～12:35	８回目　15:15～15:40

	発表	分野	テーマ	グループ名	教室
1	発表A	高齢1	高齢者とのコミュニケーションの重要性	スヌーピー	4-259
2	発表B	障害1	利用者との関わり	チャウチャウ	4-260
3	発表C	母子・婦人保護	様々な事情を抱える利用者に寄り添う	しゃけおにぎり	4-261
4	発表D	障害児1	子どもとの向き合い方	チームきせき	4-262
5	発表E	地域1	専門職と地域住民との関わり	ムロツヨシ	4-263
6	発表F	高齢2	虐待を受けていた人への寄り添い方	ちいかわ	4-206
7	発表G	地域2	在宅で暮らす高齢者の実態	くりとたけのこ	4-207
8	発表H	高齢3	認知症の利用者との関り方	ミッフィー	4-259
9	発表I	障害2	障害者の特性に応じた関わり方	チームにんじん	4-260
10	発表J	子ども	子どもたちの最善の利益を守りながら寄り添う	チームたぬき	4-261
11	発表K	障害児2	共感の大切さ	ブランコ	4-262
12	発表L	地域3	住民主体の支援	にゃんこ	4-263
13	発表M	高齢4	多機関連携	シュレック	4-206
14	発表N	病院	病院で働くソーシャルワーカー	ほすぴたる	4-207
15	発表O	障害児3	子どもたちとの関わりの中で	ユニコーン	4-208

1ページ

（３）社会福祉士国家試験対策講座

１．全体の概観

3 年生の社会福祉士国家試験対策講座である「社会福祉探求Ⅳ」では、これまでの指定科目や関連専門科目の学びと連動させながら、国家試験受験を視野に入れた科目である。具体的には「福祉行財政と福祉計画」、「福祉サービスの組織と経営」、「就労支援サービス」について体系的に学んでいる。「社会福祉探求Ⅴ」では、「社会福祉探求Ⅳ」で学んだ科目を中心に復習の講義時間を取り入れ、今回は「社会調査の基礎」、「相談援助の理論と方法」、「社会保障」「権利擁護と成年後見制度」「更生保護制度」について講義を実施した。

4 年生には「社会福祉研究Ⅰ」「社会福祉総合研究Ⅰ」「社会福祉研究Ⅱ」「社会福祉総合研究Ⅱ」を毎週土曜日と夏季休暇中に実施した。今年度の第 35 回会福祉士国家試験の合格率は 48.7%（19 験で 15 名合格）で、合格率 50%の目標を達成することが出来なかった。授業に係るさまざまなこと（講師との連携、小テストの準備、出欠等）は担当教員がローテーションを組んで行った。

２．各講座科目日程等

学年	セメスター	科目名	開講期間	責任者
3 年	5	社会福祉探究Ⅳ	8/16, 8/17, 8/18, 8/19(計 15 回＋定期試験)	坂本
	6	社会福祉探究Ⅴ	2/1, 2/2, 2/3, 2/4(計 15 回＋定期試験)	石田
4 年	7	社会福祉研究Ⅰ	夏学期・土曜 2 限	全員＊
		社会福祉総合研究Ⅰ	夏学期・土曜 3 限	全員＊
	8	社会福祉研究Ⅱ	冬学期・土曜 2 限	全員＊
		社会福祉総合研究Ⅱ	冬学期・土曜 3 限	全員＊

■社会福祉研究Ⅰ・社会福祉総合研究Ⅰ　夏学期

	2022			2限（10：55～12：25）		3限（13：15～14：45）		4限（15：00～16：30）		5限（16：40～18：10）	
回	月	日	曜	科目	講師	科目	講師	科目	講師	科目	講師
*	4	2	土	夏学期プレ試験（第1回学内模試）（10：00～12:15/13:00～14:45）・オリエンテーション（15：00～15：30）							
1		9	土	児童・家庭に対する支援と児童家庭支援制度①	竹元	児童・家庭に対する支援と児童家庭支援制度②	竹元	児童・家庭に対する支援と児童家庭支援制度③	竹元		
2		23	土	社会理論と社会システム①	各務	社会理論と社会システム②	各務				
3		30	土	現代社会と福祉①	坂本	現代社会と福祉②					
4	5	7	土	高齢者に対する支援と介護保険制度①	大西	高齢者に対する支援と介護保険制度②	大西	高齢者に対する支援と介護保険制度③	大西		
5		14	土	低所得者に対する支援と生活保護制度①	竹元	低所得者に対する支援と生活保護制度②	竹元	社会調査の基礎①	竹元		
6		21	土	福祉行財政と福祉計画①	竹元	福祉行財政と福祉計画②	竹元	福祉サービスの組織と経営①	竹元		
*		28	土	定期試験（社会福祉研究Ⅰ）							
7	8	8	月			相談援助の理論と方法①	坂本	相談援助の基盤と専門職①	坂本		
8		10	水			障害者に対する支援と障害者自立支援制度①	竹元	障害者に対する支援と障害者自立支援制度②	竹元	就労支援サービス①	竹元
9		16	火			地域福祉の理論と方法①	各務	地域福祉の理論と方法②	各務		
10		20	土			社会保障①	竹元	社会保障②	竹元	社会保障③	竹元
11		23	火			権利擁護と成年後見制度①	田坂	権利擁護と成年後見制度②	田坂		
12		26	金			更生保護制度①	田坂	更生保護制度②	田坂		
*		27	土			定期試験（社会福祉総合研究Ⅰ）		合格体験談			

■社会福祉研究Ⅱ・社会福祉総合研究Ⅱ　冬学期

	2022-2023			2限（10：55～12：25）		3限（13：15～14：45）		4限（15：00～16：30）		5限（16：40～18：10）	
回	月	日	曜	科目	講師	科目	講師	科目	講師	科目	講師
＊	9	17	土	冬学期プレ試験（第2回学内模試）（10：00～12：15/13：00～14：45）・オリエンテーション（15：00～15：30）							
1		20	火					高齢者に対する支援と介護保険制度①	大西	高齢者に対する支援と介護保険制度(演	大西
＊		24	土	東京アカデミー模試（10：00～12：15/13：00～14：45）							
2		27	火					社会保障④	竹元	社会保障（演習）	竹元
3	10	4	火					人体の構造と機能及び疾病①	大西	人体の構造と機能及び疾病（演習）	大西
4		11	火					模試解説①	竹元	模試解説②	竹元
5		18	火					保健医療サービス①	竹元	保健医療サービス②	竹元
6		25	火					保健医療サービス(演習)	竹元	児童・家庭に対する支援と児童家庭支	竹元
＊		29	土	ソ教連模試（10：00～12：15/13：00～14：45）							
7	11	1	火					権利擁護と成年後見制度(演習)	田坂	更生保護制度(演習)	田坂
8		8	火					心理学理論と心理的支援①	向	心理学理論と心理的支援②	向
9		15	火					心理学理論と心理的支援(演習)	向	現代社会と福祉(演習)	坂本
10		22	火					障害者に対する支援と障害者自立支援制度(演習)	竹元	就労支援サービス②	竹元
＊		23	水・祝	中央法規模試（10：00～12：15/13：00～14：45）							
11	12	6	火					低所得者に対する支援と生活保護制度(演習)	竹元	社会調査の基礎(演習)	竹元
12		13	火					相談援助の理論と方法(演習)	坂本	相談援助の基盤と専門職(演習)	坂本
13		20	火					地域福祉の理論と方法(演習)	各務	社会理論と社会システム(演習)	各務
14		28	水	総合試験（10：00～12：00）		福祉サービスの組織と経営(演習)	竹元	福祉行財政と福祉計画(演習)	竹元		
＊	1	7	土	学内最終模試（10：00～12：15/13：00～14：45）							
15		10	火					総まとめ①	竹元	総まとめ②	竹元

３．既卒者（卒業後３年以内）向け

既卒者の受講を促すことによって既卒者合格率の向上を図るために、今年度は東京アカデミー作成のオンデマンド教材を希望者に聴講してもらうようにした。なお、この教材は過去３ヶ年の国家試験問題から選ばれた重要問題を解説したものである。卒業後３年以内の人に聴講を募ったところ、５名の応募があった。現役生からは 19 名の応募があった。これらの応募者に、下記のオンデマンド教材を年末から年初にかけて３期に分けて配信した。

オンデマンド視聴を希望した卒業生は２名にとどまった。

今後の課題は、①既卒者の視聴応募者を増やすこと、②配信時期の検討、③オンデマンド教材の内容の検討などである。

オンデマンド教材一覧

No.	科　　目	コマ数	時間
1	人体の構造と機能及び疾病	1	1.5
2	心理学理論と心理的支援	1	1.5
3	社会理論と社会システム	1	1.5
4	現代社会と福祉	1	1.5
5	社会調査の基礎	1	1.5
6	地域福祉の理論と方法	1	1.5
7	福祉行財政と福祉計画	1	1.5
8	福祉サービスの組織と経営	1	1.5
9	社会保障	1	1.5
10	保健医療サービス	1	1.5
11	高齢者に対する支援と介護保険制度	1	1.5
12	低所得者に対する支援と生活保護制度	1	1.5
13	障害者に対する支援と障害者自立支援制度	1	1.5
14	就労支援サービス	1	1.5
15	児童や家庭に対する支援と児童・家庭福祉制度	1	1.5
16	更生保護制度/権利擁護と成年後見制度	1	1.5
	計	16	24

（４）精神保健福祉士国家試験対策講座

毎週水曜日４限・５限に開講している。教員が環境を整え学生が主体的に学習する形態をとっているが、例年 11 月～12 月には、特別講師を招き専門科目の集中講座を行っている。今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策関連により学生が集まることが出来る 12 月 25 日（土）の 3 限から 5 限までを利用し開講した。また、10 月 22 日（金）、1 月 8 日（土）には、実際の試験を想定した模擬試験を実施した。

第 24 回精神保健福祉士国家試験新卒合格率は 100%（3 名中 3 名合格）であった。なお既卒者の受験はなかった。精神保健福祉士国家試験対策講座は、受験勉強の促進に有効に機能しているといえる。

（５）公務員社会福祉職受験対策講座（社会福祉特別講義Ⅰ・Ⅱ）

社会福祉特別講義は、公務員採用試験受験支援講座として、東京アカデミーと協働し平成 29 年度より、集中講義で開講している。

社会福祉特別講義Ⅰは、公務員試験の１次試験対策として位置づけられており、一般教養採用試験の国語・算数が授業内容となっている。

本講座は、短期大学部保育科との合同開講となっている。受講対象学生は保育科１年生（1 セメスター）と人間福祉学科健康福祉専攻２年生（３セメスター）である。令和４年度の履修人数は、54 名（短大保育科 37 名・人間福祉学科健康福祉専攻 17 名）で、今年度は、両学科とも多かった。

社会福祉特別講義Ⅱは、社会福祉専門職採用試験に関わる社会福祉の専門知識を確実なものにするための講座である。授業内容は、社会福祉全般・社会学概論・心理学を中心に社会福祉の専門用語の理解、社会福祉に関するテーマの論文対策となっている。

また、本講座は社会福祉専門職公務員採用試験社会福祉協議会採用試験、独立行政法人病院機構（国立、公立）採用試験などにも有効で、社会福祉士国家試験、精神保健福祉士国家試験の学習にも役立てることが可能である。

いずれの社会福祉特別講座も公務員試験を視野に入れた就職活動をする学生増加に貢献し、進路選択を広げる重要な科目である。

（６）その他

（１）～（５）に示した学科独自の演習、実習指導、受験支援は、授業時間内だけでは成立しない科目である。常に学生一人ひとりと向き合い、その学びの質と成果を学生と共に確認していく取り組みが求められている。令和 4 年度はハイブリッド型授業を含めた遠隔授業の実施もあったが、今後もさまざまな ICT を活用した教授方法の向上にも努めていくことが必要である。学科のすべての教員がチームとして学生を育てていく体制を実施しているが、今後はそれらをさらにブラッシュアップして取り組んでいくことが求められている。

なお、この報告書作成者は以下の通りである。

１．はじめに：　原　順子
２．大学基礎演習について：　石田晋司
３．授業相互参観について：　原　順子
４．学科独自の取り組みについて
　（１）ソーシャルワーク演習・社会福祉相談援助演習担当者打ち合わせ会：鳥海直美
　（２）ソーシャルワーク実習・社会福祉相談援助実習・実習報告会：　大西敏浩
　（３）社会福祉士国家試験対策講座：　石田晋司
　（４）精神保健福祉士国家試験対策講座：　石田晋司
　（５）福祉系公務員受験対策講座：　石田晋司
　（６）その他：　原　順子

＊本原稿は、ＦＤ委員（原）と学科長（石田）が回覧した上で承認を受けたものである。

教育学部 教育学科 小学校教育コース

1. はじめに

1.1 小学校教育コースの現状

教育学科小学校教育コースは、多様なニーズのある社会、学校、子どもに応える豊かな人間性と教育に関する専門的知識および実践力、指導力を持ち、「いい先生」とは何かを問い、生涯にわたり学び続け、社会や学校で活躍できる優れた小学校教員になることを目的としている。

本コースは2019年度から新カリキュラムとして設定されたコースで、今年度完成年度を迎えて初めての卒業生を輩出した。4年生の4月1日時点での進路状況については、卒業生113名のうち、公立学校教員（小学校・中学校・高等学校・特別支援学校）40名、講師33名、公立保育園1名、一般就職20名、公務員4名、福祉職4名、その他11名となり、半数以上が教育職に就いている。これらの成果は、学生の基礎学力向上の取り組みや教員採用試験や就職試験対策の充実に加え、本コースの教員および教職教育推進センター・キャリアセンター等の学生への継続的な支援の結果でもある。教員をめざす支援としては、教採 e-learning 講座、エントリーシートや小論文等の添削指導、面接指導、集団討論、模擬授業指導や場面指導のロールプレイの他、卒業生の教員や合格した先輩との交流会や自主勉強会のフォローなど、学生のモチベーションを継続的に促す環境づくりを行っている。また一般就職を目指す学生についても同様に、エントリーシートから最終面接に至るまで、長期にわたる就職活動支援を行っている。

取得可能な免許は、小学校教諭一種免許状の取得に加え、各プログラムの選択によって、学生は特別支援学校教諭一種免許状、幼稚園教諭一種免許状、中学校教諭一種免許状（英語）（数学）、高等学校一種免許状（英語）（数学）がある。

カリキュラムの特徴として、1年生では「学びなおし・学びほぐし」をめざす科目である「扉シリーズ」（「数理探究の扉」「英語探究の扉」）や、プログラム選択を判断するいわゆる「お試し科目」（「多様な子ども理解入門」「子育て支援論」「ベーシックコミュニケーションⅠ」「数学的リテラシー」など）などが開講され、多様な子どもや社会に対応できる「いい先生」をめざして学修している。また、2年生では小学校教育実習の実習要件である「インターンシップ」や「スクールサポーターⅠ」が開講されている。さらに、3年生では配属実習を基本とした教育実習（週に1度の実習を2ヵ月間行い、その後連続して2週間の実習を行う本学独自の実習）に参加することにより、大学で学ぶ理論と現場で学ぶ実践の往還を行うことを通して、実践的な学びの充実を図っている。

1.2 今後の課題

新型コロナウイルス感染の影響はあるものの、今年度は感染防止対策を十分に行ったうえで対面授業を基本とした授業ができるようになり、教育学部での学修に欠かすことのできない模擬授業をコロナ前のように実施することができた。他方、オンラインによる教育の方法やデジタル教材等の教育環境が整いつつあるものの課題もあるため、引き続き ICT 等を活用した教育方法の改善・開発が求められる。

今後学生によるプログラム選択が本格化していくなかで、各プログラム選択者が必修であるプログラム科目を漏れなく履修しているか、プログラム別の卒業必修単位数を理解しているか、各プログラムで行われる各種教育実習の実習要件を満たしているかなど、学生指

導の充実が必須である。また、2 年生になりプログラム選択を変更する学生も見られるため、履修指導の充実が不可欠である。特に、教育実習がかかわるプログラムについては、実習内諾交渉時期を干渉しないタイミングでのプログラム変更を徹底しなければならない。そして、プログラム非選択者のプログラム関連卒業必修単位取得の保障など、学修充実をどのように図るかが課題である。

2.　「大学基礎演習ⅠⅡ」の取り組み

2.1　「大学基礎演習」を実施するにあったって

本コースでは、「いい先生になる」という一貫した理念に基づき 4 年間のカリキュラムを設定しているが、「大学基礎演習Ⅰ・Ⅱ」は、そのもっとも基礎的部分をなすものと言える。大学ディプロマ・ポリシーを受け、大学基礎演習の学修内容をマネジメントした。

〔大学ディプロマ・ポリシー〕

1）教員としての自己分析・自己研鑽の力
学びや実践を通して多様なニーズのある社会、学校、子どもに応えることができる専門的知識及び実践力、指導力を身に付け、「いい先生」とは何かを常に問い続け、自己の実践を振り返り、自己を高めていくことができる。

2）教員としてふさわしい豊かな人間性
多様な立場、考え方の存在を認め、「いい先生」になるという強い意志と情熱および教員としての使命感や責任感を持ち、子どもの多様なニーズを共感的に理解し、課題の解決に他者と協働して取り組むことができる。

3）変化する社会、学校で活躍できる力
学びや実践を通して多様なニーズのある社会、学校、子どもを的確に理解し、専門的知識および実践力、指導力を基に協働して課題の解決や改革に取り組み、実現することができる。

2022 年度「大学基礎演習」のめざすもの

①　これからの大学生活の基盤となる様々な学修や学修ポートフォリオ活用のスキル、および、学習環境の活用のスキル等を身に付けることができる。
②　和の精神を持ち、学生同士がともに学び合い高め合うことのできる人間関係を構築しようとし、真理や本質の探究を目指し、積極的に討議等の協働的な活動に参加することができる。
③　学修ポートフォリオやリフレクションを生かし、自分の学びについて振り返り、自己の成長の姿や学修についての改善点に気付き、今後の学びのデザインを描くことができる。

＜大学基礎演習の内容作成にあたって考えたこと＞

1　主体的に学ぶ力を培い、集団を動かす経験をできるだけ多く積むことができるように、授業の運営は、極力学生が行う。(学級代表による輪番)

2　「いい先生」に関する講義やレポート作成を通して、卒業論文作成の第１歩を学ぶ。

3　討議の時間を設定し、討議の仕方を学ぶとともに、自分の意見を伝えたり、他者の意見をよく聞き自分の考えを高めていったりできるようにする。

4　私の考える「いい先生」の学修を通して、自分が描く教師像をもつとともに、それを目指すために、自分を取り巻く他者の人権・個性を大切にした生活を送ることができるようにする。また、そうした資質や日常の態度こそが教師に求められる

ものであることを理解し、豊かな大学生活を送っていくための基礎となる力を養う。

5　事前に告知された内容についての事前学修、行った授業に対してのまとめの学修を行い、学んだことが確かなものになるようにする。

令和４年度の「大学基礎演習Ⅰ・Ⅱ」は、本学科小学校コースのカリキュラムにおいて 1 年次の 1）基礎教育科目・共通教育科目と、2）専門教育科目の両者における学びをつなぎ、関連づけながらも、「大学基礎演習Ⅰ・Ⅱ」で習得した知識やスキルをベースとして 2 年次、3 年次、4 年次の専門教育科目へと学びをつなげ、発展させていく科目として位置づけられている。具体的には、大学ディプロマ・ポリシーを受け、①本学での学びと生活のための基本的なスキルの習得、②専門教育への橋渡し、③キャリアデザインの 3 点を目標として全 30 回の授業計画を設計した。これは従来の大学基礎演習のカリキュラム上の位置づけと基本的に同様である。

授業運営においては、未だコロナ禍が収まらないことから、対面時における学生同士の間隔も１m以上離れるようにし、密にならないことに気を付けて実施をしてきた。話し合い活動についても、状況に応じながら、適切に行ってきた。

2.2　「大学基礎演習Ⅰ」の内容

回	テーマ	内　容	
1	ガイダンス１	プログラム選択・Google Classroom、IBU ネットの活用、学生支援センター、図書館等の活用について	全体
2	ガイダンス２	1 年間の目標・4 年間の実習等について・PROG テストについて・学級内交流等	クラス
3	ガイダンス３	学校探検の計画・パワーポイント作成の基本	クラス
4	大学探検１	探検内容整理・報告会準備	クラス
5	大学探検２	報告会	クラス
6	レポート作成の基礎１	問いとレポートの構造	全体
7	レポート作成の基礎２	主張と引用	全体
8	人権講話	外部講師	全体
9	「いい先生」について	オムニバス講義 :「いい先生」をテーマに、3 人の担任が各 15 分プレゼンを行う。	全体
10	私の考える「いい先生」プレゼン資料づくり	＊実習校訪問のため各自で課題への取組	課題
11	「いい先生」についての討論会	私の考える「いい先生」討論会 （討論の方法・自分の考えを伝える方法）	クラス
12	学校現場における ICT 教育１	外部講師（徳島県小学校長）	全体
13	学校現場における ICT 教育２	前回の講話を受けての学級討論	クラス
14	大学生活スタートを振り返って１	1 分間スピーチ	クラス
15	大学生活スタートを振り返って２	学級代表者による 1 分間スピーチ 夏セメのまとめ	全体

第４回目に実施した大学探検では、クラス内で訪問する場所を分担し、新しい学び舎にど

のような場所がありどのように活用されているのかを訪ねた。そして、訪ねたことを各クラスのほかの学生たちに報告した。早い時期に人権講話を位置づけ、外部講師を招いて具体的な事例をもとにした話をして頂いた。大阪以外からの学生も多くおり、人権についての知識や理解、それに対する意識は、府県によって温度差がある。早くからのこうした講話の位置づけは大変重要である。

急速に広がる学校教育における ICT の活用について、先進的な取組を進めている小学校の校長先生からのお話を聞く機会をつくった。Zoom を活用したオンラインでの講話である。これによって、小学校現場でどのように活用されているのか、また、どのように活用できるかを学ぶことができた。今年度新しい取組として、「１分間スピーチ」を全員が行う活動を行った。のびのびと話すことができる学生、メモを見ながらたどたどしく話をする学生等、様々であった。教壇で子どもたちに話す機会や、採用試験等におけるスピーチなど、様々な場面で活かしていくことのできる経験の場となった。

2.3「大学基礎演習Ⅱ」の内容

全 15 回の内容は下記のとおりである。ハロースクールに行っている学級があるときには、各クラスで行う基礎演習となる。その内容がシラバス下に示してある。

回	テーマおよび内容	ハロースクール	授業形態
1			全体
2	ハロースクールガイダンス		全体
3		1 組	クラス
4		2 組	クラス
5	ようこそ先輩１＜卒業までの道のり・キャリア形成＞		全体
6		3 組	クラス
7		4 組	クラス
8	私の考える防災教育　＜東北を訪問した学生の報告＞		全体
9		5 組	クラス
10		6 組	クラス
11			クラス
12	私の考える戦争＜「無言館」を訪問した学生の報告＞		全体
13	ようこそ先輩２　＜2 年生をどのように過ごすか＞		全体
14	1 分間スピーチ　＜私の考える大学生活＞		クラス
15	1 分間スピーチ発表・1 年間の振り返り		全体

形態	1 組	2 組	3 組	4 組	5 組	6 組
クラス１	HS	アカデミック・ライティングの復習と今回の課題	レクリエーション計画	レクリエーション計画	アカデミック・ライティングの復習と今回の課題	アカデミック・ライティングの復習と今回の課題
クラス２	HS の交流 PP づくり	HS	レクリエーションの実施	レクリエーションの実施	図書館 （本を借りて読書をする）	図書館 （本を借りて読書をする）
クラス３	レクリエーション計画	HS の交流 PP づくり	HS	アカデミック・ライティングの復習と今回の課題	レポートの構想と執筆 （個別懇談）	レポートの構想と執筆 （個別懇談）
クラス４	レクリエーションの実施	図書館 （本を借りて読書をする）	HS の交流 PP づくり	HS	レクリエーション計画	レクリエーションの計画

クラス５	アカデミック・ライティングの復習と今回の課題	レポートの構想と執筆（個別懇談）	アカデミック・ライティングの復習と今回の課題	HS の交流 PP づくり	HS	レクリエーションの実施
クラス６	図書館（本を借りて読書をする）	レクリエーション計画	図書館（本を借りて読書をする）	図書館（本を借りて読書をする）	HS の交流 PP づくり	HS
クラス７	レポートの構想と執筆（個別懇談）	レクリエーションの実施	レポートの構想と執筆（個別懇談）	レポートの構想と執筆（個別懇談）	レクリエーションの実施	HS の交流 PP づくり

「ようこそ先輩」、「私の考える防災教育」、「私の考える戦争」は、いずれも、学生の話である。学生から学生へのメッセージは、話す側も聞く側もたいへん意義が大きく、特に聞く側は同じ学生の話として、内容がよく伝わりやすい様子があった。また、自分のそうした経験をしたいといった憧れへとつながっていた。学級活動の中で、ハロースクール後の経験の交流の場面を位置付けたことは有効であった。話を進めていく中で、四天王寺小学校の教育の全体像をとらえることもできた。

2.4　成果と課題

（１）成果

・少しずつコロナ禍の状況が改善されたこともあり、対面での授業を基本的に行うことができた。そうした中で、学級内での交流をすることができるようになり、コミュニケーションを図り、仲間づくりを以前より進めていくことができた。

・すべての学生がパソコン必修となり、持参できるようなった。各自が作成いた PPT を見合うときには、小グループで自分のパソコン場面を見せながら話し合うといったこれまでにはみられない光景があった。小グループの場合は、パソコン画面を見せ合うことで話し合いができることがわかった。今後も活用することができる。

・学外講師や先輩の話を聞くことの成果は大きい。学生たちを学年という枠組みにとどめてしまうことなく、積極的に学外や先輩たちからの話を聞く機会を設定できたことはよかった。

・アカデミック・ライティングの基礎を学ぶ機会を設定することで、学生たちがすこしずつ「書く」ことに慣れてきた。

・基本的には学生に進行を行わせた。対面の授業が少なく十分には活躍をさせてあげられなかったが、学生主体で授業を進めていこうという方針はよい。

・「１分間スピーチ」を全員に行わせることはよかった。また、クラス代表を全体で発表させることで、その内容について、全体で話し合うことができた。この話し合いの内容がとてもよかった。

（２）課題

・コロナ禍をくぐってきたことによって、気持ちに揺らぎが起こっている学生が多くなっているように感じる。大学に来ることができない、人とのつながりをうまく形成することができないといった学生が増えているように思う。

・担任と学生が１対１で話をする機会の設定が難しい。しかし、その必要性はある。

・担任団も他に様々な業務をもっており、学年会の設定が非常に難しい。

3.　授業相互参観について

3.1　公開授業一覧

授業相互参観を実施するにあたり、今年度は「授業形態が対面の授業で実施する」との大学方針に基づいて公開授業科目の調整を行った。小学校教育コースで公開授業を申し出た科目と担当教員および授業日は以下のとおりである。

整理番号	担当教員	月日	曜日	時限	公開授業科目名	教室	遠隔有○)	合評会
1	佐藤　美子	12 月 6 日	火	3	初等理科教育法	5-204		授業後すぐ
2	福本　義久	12 月 9 日	金	5	教育課程総論	4-412		授業後すぐ
3	浅田　昇平	11 月 30 日	水	1	教育制度論	5-210		授業後すぐ
4	今井　真理	11 月 22 日	火	2	教科内容論（図画工作）	2-405		授業後すぐ
5	木村　雅則	11 月 25 日	金	4	生徒指導論	5-210		授業後すぐ
6	坂井　啓祐	12 月 12 日	月	3	教職研究Ⅰ（ゼミ形式）	4-414		授業後すぐ
7	坂本　暁美	11 月 30 日	水	3	初等音楽科教育法	8-210		授業後すぐ
8	杉中　康平	いつでも	水	3	道徳教育の理論と方法	4-316	○	授業後すぐ
9	千葉　一夫	12 月 5 日	月	3	教職研究Ⅰ	4-314	○	授業後すぐ
10	土口千惠子	11 月 14 日	月	3	教職研究Ⅰ　（ゼミ形式）	4-309		授業後すぐ
11	早川　透	12 月 7 日	水	4	知的障害教育論	4-309		授業後すぐ
12	船所　武志	12 月 9 日	金	4	初等国語科教育法	4-209		授業後すぐ
13	牧野　浩二	12 月 7 日	水	3	生徒指導論	5-301		授業後すぐ
14	松岡　隆	11 月 30 日	水	2	解析学Ⅰ	4-262		授業後すぐ
15	山田　綾	11 月 28 日	月	3	教育の方法・技術	6-352		5 限終了後
16	和田　良彦	12 月 9 日	金	3	教職論（クラスづくり）	4-314		授業後すぐ
17	堂上　雅三	11 月 14 日	月	3	教職研究Ⅰ（ゼミ形式）	4-406		授業後すぐ
18	永田　麻詠	12 月 6 日	火	1	初等国語科教育法	4-259		授業後すぐ
19	西岡　智	11 月 21 日	月	3	教職研究Ⅰ	701		授業後すぐ
20	原田　三朗	11 月 16 日	水	3	教科内容論（算数）	6-353		授業後すぐ
21	丸山　聡	12 月 12 日	月	3	教職研究Ⅰ（ゼミ形式）	4-408		授業後すぐ
22	生駒　英晃	11 月 22 日	火	4	教科内容論（算数）	6-254		授業後すぐ

23	小柴　和香	12 月 13 日	火	4	初等英語科教育法	6-302		授業後すぐ
24	鈴木　浩太	11 月 22 日	火	2	子どもと家族・社会	4-316		授業後すぐ
25	長澤　洋信	12 月 5 日	月	5	教職実践演習	4-306		授業後すぐ
26	西口　卓磨	11 月 30 日	水	1	教科内容論（社会）	5-301		授業後すぐ
27	森田　英俊	11 月 21 日	月	4	確率・統計学Ⅰ	4-207		授業後すぐ

3.2　相互授業参観報告書

相互授業参観について、今年度は３名の報告書を以下に示す。なお、今年度の相互授業参観の多くは対面で実施されたが、遠隔授業の利点も考慮して参観方法は昨年度同様、対面または遠隔での方法を選択できるようにした。

（1）　報告者：森田　英俊

参観した授業科目名	解析学Ⅰ
授業担当教員名	松岡　隆　先生
参観方法：対面	合評会：授業後すぐ
令和 4 年 11 月 30 日（　水　）	教室：4-262
授業内容は、三角関数の sin と cos の和であった。	
授業の始めに前回の内容の小テストを行っていた。私も別の数学科目で担当する同じ	
学生たちであったが、この小テストへの取り組みは私の授業での演習に対するものよりもやや積極的に見えた。本授業では小テストの点が成績に反映されることへの緊張感も	
理由の一つかもしれない。即、私の授業に導入するかどうかは別にして、検討したい。	
また、この小テストで学生の理解が覚束ないのを見て、小テストの時間をたっぷりと	
延長し、かなり容易な課題に変更してもう一度前回と同じ解説を行うなど、柔軟に対応	
していた。もっともその裏腹に、理解している学生はいささか退屈そうに見えた。ただ	
しこれはこの授業がというよりも、数学という得意・不得意の差が大きい科目に不可避	
でなことあり、私自身も日頃そのバランス取りに苦心しているところである。	
さらに、Geogebra という数学ソフトウェアを用いてグラフを描かせていたのも印象的だった。私の授業では（4 年次の「コンピュータ演習」を除いて）グラフは手で概形を	
描かせるのとスライドで見せるのを併用しているが、本授業で学生がこのソフトをそれ	
ど苦もなく利用しているようなので、私の授業でもスライドで見せることの代用として	
早速取り入れてみようと思った。	

（2）　報告者：生駒　英晃

参観した授業科目名	解析学Ⅰ
授業担当教員名	松岡　隆　先生
参観方法：対面	合評会：授業後すぐ
令和 4 年 11 月 30 日（　水　）	教室：4-262
授業は、前半４５分で三角関数に関する小テストを行い、後半４５分で三角関数の和に	

ついて GeoGebra を用いて調べました。小テストは「sin(θ+3/2π)=□cos(θ)の□に符号を入れる」といった基本的な問題でしたが、なかなか解くことはできませんでした。
「加法定理やグラフをつかってはダメ」という指示もわかりにくかったようです。単位円を描いてもらうことが目的とのことですが、そうであれば「単位円に状況を図示せよ」といった問題を最初に付け足すと良かったかと思いました（前回の授業で類題を解いていたようなので、学生にはもう少し伝わっていたのかもしれませんが)。後半の GeoGebra をつかってグラフを図示していく作業は楽しく感じました。a sin(x)+cos(x)
のグラフが a→∞でどうなるかというのは、学生もかなり興味をもって取り組んでいましたが、振幅の増加と位相差の増加について、もう少し詳しく図示するともっと面白かったかと思いました（大変興味をもって疑問を感じている学生がいたため)。位相差の増加を見るには本来は sin ではなく cos でみた方がわかりやすかったと感じました（a=0 で位相差 0 にするため)。うなりを実際に聴く取り組みは大変面白く思いましたが、小テストに時間がかかったため次回に回すことになったことも残念でした。
学生に寄り添い、丁寧に疑問点を解決している姿が大変参考になりました。

（3） 報告者：生駒　英晃

参観した授業科目名	確率・統計学Ⅰ
授業担当教員名	森田　英俊　先生
参観方法：対面	合評会：授業後すぐ
令和４年１１月２１日（月）４限	教室：４－２０７
二項分布についての復習から、ポアソン分布の導入についての授業を参観しました。「馬に蹴られて死亡した兵士数」や「サッカーの１試合のゴール数」といった例はタイムリーで興味の持てるものでした。また、稀な事象について学生に考えさせる取り組みも興味深く感じました（ポアソン分布に合致するかどうかの判断をどうするのかはわかりませんでしたが)。しかし、肝心のポアソン分布の状況「時間を限定するとき試行回数に関わらず事象が起こる回数が一定になるような状況」をあまりわかりやすく伝えられていないようでした。また、少数法則の収束の状況をただ式で表すだけでなく、視覚化するような工夫があればもっと良かったかと思います。紹介できる証明については書いてもらう方が良いとは思いますが、紹介できる証明の方がずっと少ないとは思います。松岡先生からも指摘がありましたが、学生に寄り添い、わからないところを把握して解決していくような取り組みをもっと取り入れて実施していくことが大切だと思いました。	

今回は、３名の報告書を挙げるにとどめるが、全体として、今年度も教員同士による相互授業参観と合評会が実施され、研鑽を積むことができた。模擬授業を行う教科教育法など遠隔授業に適さない授業もあるが、時間と場所の制約が少ない遠隔での参観も増やしていき、対面授業と遠隔授業の両面を生かした相互授業参観の在り方を今後検討していく。

現時点の課題としては、各授業における効果的な ICT 活用があげられる。パソコンの必携化、各教室の環境整備、IBU.net・Zoom・Google Classroom などの活用により、プリント類の配布物や課題の提出物のペーパレス化が促進された。一方で、学生のプレゼンテーション

スキルや協働的な学びを促進するための ICT 活用における、教員間の情報共有が不足していると考える。今後は、パソコンの必携化にともなう FD・教育改善に取り組んでいきたい。

4.　学科独自の取り組み

小学校教育コース独自の取り組みとして、プログラム選択と「教育基礎演習Ⅰ・Ⅱ」の取り組みの 2 点を挙げる。

4.1　プログラム選択

小学校教育コースでは、小学校教諭免許の取得を基本としながら、多様な子どもや社会に対応できる「いい先生」を問い続けるために、「特別支援教育プログラム」「幼稚園プログラム」「英語教育プログラム」「数学教育プログラム」の 4 プログラムが設定されている。各プログラムにおいていわゆる「お試し科目」が 1 年次に開講され、自分がどのプログラムを選択することで「いい先生」をめざし問い続けるのかについて学生が考え、年度末に今年度の 1 年生の各プログラム選択者が決定した。

プログラム選択の特徴としては、「プログラムで学ぶ＝各プログラムでの教員免許取得」ではないこと、プログラムを選択しないという選択も尊重することが挙げられる。

各プログラムでの学修により、各種教員免許取得をめざすことは基本であるが、かりに教員免許取得を希望しなくても、各プログラムで学びたいという学生の思いを尊重している。そのため、今年度も 2 年生の夏学期に、プログラムを選択しなおすという意志があれば自由に行うことができる機会を設け、4 名の 2 年生がプログラムを選びなおしている。ただし、4 年間で各種教員免許の取得もめざしている学生に対しては、プログラムの選びなおしについて慎重に行うよう注意喚起を行っている。

また初等教育を深く学びたい者や、進路変更によって教職以外の将来を考える者が「プログラムを何も選択しない」という選択も尊重している。プログラムを選択しないことにより、プログラム科目が開講されている時間に初等教育に関する科目や、教員採用試験対策科目を受講することができる。また、教職以外の進路を希望する学生に対しては、「子ども理解領域」として「子ども支援ボランティア論」「インクルーシブ教育の理論と方法」などといった選択科目を設定し、小学校教育コースでの学修が、学生一人ひとりにとって充実したものとなるよう、カリキュラム上の工夫を行っている。

4.2 「教育基礎演習Ⅰ・Ⅱ」の取り組み

教育基礎演習は、大学ディプロマ・ポリシーを受け、1 年生の「大学基礎演習」で培った知識・技能の基盤にして、大学卒業後までを見据えたキャリアデザインを意識して視野を広げ、3 年生からの本格的な専門分野研究につなげることを意図して学修内容をマネジメントした。特に、インターンシップや介護等体験といった学外実習に取り組む学年であることを重視し、教育・福祉現場での学びと大学での学修を関連付け、学びを深めることを目指した。

＜2022 年度「教育基礎演習」のめざすもの＞

教職に向けた意識を高めること、２年生時のインターンシップや学校ボランティア活動、３年生からの専門分野研究や教育実習に向けて、技能を修得することを目的とする。

①　教職に向けた意識を高め、教育現場で適切にふるまえる社会性を身につける。

② 現代の教育現場における課題について、文献や講義と学外実習等での経験を照らし合わせて考え、理解し、自分の言葉で説明できる。
③ ②で得られた知識をもとに集団討論を行い、ディスカッションを通して各自の問題意識を深め、自分の意見を述べることができる。
④ 大学在学中及び卒業後のキャリアデザインを意識してこれからの大学生活を送ることができる。
⑤ 教育・保育に関わる様々な人や活動を知り、広い視野で考えることができる。

＜教育基礎演習の内容作成にあたって考えたこと＞
・大学ディプロマ・ポリシーと内容を関連付けること。
・大学基礎演習での学び（他者の意見と自分の意見を分けること・関連付けること、発表の仕方、発表スライドの作り方、など）を生かすこと。
・大学での学修と実習先での学びを往還させ、実習先で主体的に学べるようにすること。
・実習等での学びを言葉や文字に現して表現し、他者と意見を交わし合うこと。
・グループで役割を分担し、主体的・対話的に探究活動に取り組み、学びを深めること。
・３年生以降の大学生活への発展を意図して、その基盤を培うこと。

「教育基礎演習Ⅰ」の内容
介護等体験やインターンシップ等の学外実習と連動させて進めた。福祉・教育現場での体験を学生同士が報告し合い、問いを立ち上げ、探究する形で展開した。現代の教育現場の課題を知り、関心と意識をもって学外実習に取り組むことで、多くのことを学ぶ機会とすること、また、実習先の職員、利用者、子どもたちから多くを学ぶ為に必要となる資質・能力を高めることを目指した。この取り組みのまとめとして、松原市教育委員長美濃氏による講演「これからの教員を目指す学生に求められること」を行った。また、担任教員からは学生の報告内容を受けて、今後の発展と深まりを意図した視点を提供する話を行った。

	日時	内容	授業形態
1	4/14	オリエンテーション：授業の概要	全体→クラス
2	4/21	教育現場等における豊かな学びを実現するために①	クラス
3	4/28	教育現場等における豊かな学びを実現するために② 「教師という職業」	全体
4	5/12	インターンシップでの学びの共有① グループトーク「インターンシップでの学びの共有」	クラス
5	5/19	インターンシップでの学びの共有② グループトーク「インターンシップでの学びの共有」	クラス
6	5/26	インターンシップでの学びの共有③ グループトーク「インターンシップを通じた問いを立てる」	クラス
7	6/2	インターンシップでの学びの共有④ 「問いに関する資料を探す」資料検索の仕方	クラス
8	6/9	検索し入手した資料を読む 自らの問いに関する報告スライドを作成する	課題
9	6/16		課題
10	6/23	自宅課題の報告会①	クラス

11	6/30	自宅課題の報告会②	クラス
12	7/7	自宅課題の報告会③	クラス
13	7/14	講演「これからの教員を目指す学生に求められること」 松原市教育委員会　教育委員長　美濃亮氏	全体
14	7/21	インターンシップでの学びの共有⑥ 自宅課題報告を受けて、今後のインターンシップや教育実習を視野に、教員から学生に話をする。	全体
15	7/28	今学期の振り返り	全体

「教育基礎演習Ⅱ」の内容

「教育基礎演習Ⅰ」での探究、その後のインターンシップ等の学外実習での体験を踏まえ、さらに視野を広げて、現代の教育現場の課題、その背景にある社会の課題について、意見を交換し合って探究を進める形で展開した。この取り組みを通じて、問いを立てて探究するという３年生以降の本格的な研究の基礎を培うと共に、職業に対する視野を広げ、多様な選択肢のなかから自分のキャリアデザインを考える素地を培うことも意図した。また、５セメスターからのゼミ活動について、その意義を伝え、自分の学びを更に伸長できるゼミを選択できるよう、研究活動の意義やその実際について、情報提供を行った。

	日時	内容	授業形態
1	9/22	オリテ１：履修関係・学生支援委員会より、他	全体
2	9/29	オリテ２：ゼミについて、基礎演習Ⅱの予定、他	全体
3	10/6	探究を楽しもう！	全体
4	10/13	探究を楽しもう！－探究テーマを考える	全体
5	10/20	探究を楽しもう！－探究計画書の作成－	全体
6	10/27	探究を楽しもう！－資料収集	全体
7	11/10	探究を楽しもう！－グループワーク	全体
8	11/17	探究を楽しもう！－グループワーク	全体
9	11/24	ゼミ説明・ゼミ紹介	全体
10	12/ 1	ゼミ紹介	全体
11	12/ 8	ゼミ紹介	全体
12	12/15	探究する力（発表）	全体
13	12/22	探究する力（発表）	全体
14	1/12	先輩に聴こう！「３年生からの大学生活の充実に向けて」	全体
15	1/19	まとめ	全体

＜成果と課題＞

（１）成果

学生は、初めての校外実習（介護等体験やインターンシップ）に不安と緊張を抱えて臨む。その状況において、他の学生も同様に不安や緊張を抱えていることを知るだけでも、安心感を得て、実習に向かう気持ちが高まる様子が感じられた。さらに、互いに体験を報告し合う中で、学びや困りを共有し、自分たちで考えたり教師に相談したりして、課題を解決しようとする姿も見られた。

学外実習での体験から「問い」を立てて「探究」する課題を設定したことで、学生は、実習現場で児童の様子、教師の姿、児童同士、児童と教師の関わり合いなどをしっかりと観察するようになったと感じる。そこから、自分が教師の場に身を置くことを想定した「問い」を立ち上げ、「問い」にかかわる文献を探し、学び、体験と関連付けて報告することができた。この学びは、その後のインターンシップ、今後の教育実習においても必ず生かされると考える。

このような実習と大学の学修の連動は、学生の不安を解消し、意欲を高め、学びを深める。延いては、実習先の児童の学び育ちにも良い影響をもたらすと考える。

（２）課題

２年生という時期は、学外実習を経験しながら、教員を目指すか、他の職種を目指すかを考え始める時期でもある。教員以外の職を考え始めた学生にも意義ある内容にしていくことが必要である。

他学科からの転学生については、校外実習体験の共有やディスカッションなどの協同学習を通して、クラスでの居場所づくりや、学生同士の関係性づくりを比較的良好に行うことができた。同様の体験に基づいた協同学習が効果的に機能したように思われる。一方、併設短大からの編入３年生については、学年が異なるものの、「教育基礎演習」が卒業必修単位であるため履修している現状があり、縦のつながりや関係性づくりがスムーズに構築できなかった。学年が異なること、編入生はすでに保育実習や幼稚園教育実習を終えていたこと、インターンシップ等の校外実習体験の共有ができなかったことなどが要因であると推察する。今後は、大学のディプロマ・ポリシーやカリキュラム・ポリシーに基づく教育基礎演習という科目のなかで、編入生の学修をいかに保障するか、そのためのクラス編成や、学修活動をどのように工夫できるかが課題である。

（附記）本報告書は、FD 委員が作成したものである。なお、「2. 大学基礎演習ⅠⅡの取り組み」は原田三朗先生、「4.2 「教育基礎演習Ⅰ・Ⅱ」の取り組み」は早川透先生にデータや草稿をご提供いただいた。ここに附記し、御礼申し上げます。

（文責　坂本 暁美）

教育学部 教育学科 幼児教育保育コース

１．はじめに

本コースは、平成 31 年度学部改組に伴い新設されたコースであり、令和４年度末で開設後４年が経過し完成年度を迎えた。幼稚園教諭一種免許状、保育士資格の取得に向けた養成を主とし、小学校教諭一種免許状の取得も可能である。コースの基本方針として、この３種免の取得を推奨し、コース運営を行っている。改組前の小学校・幼児保育コースから、幼児教育保育コースに刷新されたことにより、これまで以上に保育者（幼稚園教諭、保育士、保育教諭）の養成に力点をおいたコースとなっている。

入学定員 60 名に対し、令和４年度末の在籍学生数は、１年次生 67 名、２年次生 64 名、３年次生 64 名であり、８名のコース教員で運営を行っている。コース教員の専門分野は、幼児教育学、保育学、教育社会学、発達心理学、健康・スポーツ科学、児童福祉学、音楽教育学など多岐にわたり、それぞれの専門性を活かしながら保育者養成に従事している。

本コースは、以下の３つのディプロマポリシーを設定し、学生指導にあたっている。

１）保育者としての自己分析・自己研鑽の力

学びや実践を通して多様なニーズのある社会、保育施設等、子どもに応えることができる専門的知識および実践力、指導力を身につけ、「いい先生」とは何かを常に問い続け、自己の実践を振り返り、自己を高めていくことができる。

２）保育者としてふさわしい豊かな人間性

多様な立場、考え方の存在を認め、「いい先生」になるという強い意志と情熱および保育者としての使命感や責任感を持ち、子どもの多様なニーズを共感的に理解し、課題の解決に他者と協働して取り組むことができる。

３）変化する社会、保育施設等で活躍できる力

学びや実践を通して多様なニーズのある社会、保育施設等、子どもを的確に理解し、専門的知識および実践力、指導力を基に協働して課題の解決や改革に取り組み、実現することができる。

２．大学基礎演習について

大学基礎演習は４年間の学びを豊かなものとし、大学全体やコースのディプロマポリシーを実質化する上で、極めて重要な科目である。本コースでは、60 数名の学生に対し、３名の教員が担当者となり、１クラス 20 数名による少人数授業を可能とし、授業内容によってクラス別／コース全体を使い分け、授業を展開した。

夏学期の大学基礎演習Ⅰ及び冬学期の大学基礎演習Ⅱの到達目標は以下のとおりである。

＜大学基礎演習Ⅰ　到達目標＞

①大学での４年間の学びを理解し、自分自身の目標と見通しをもって学習をするための心構えをもつ。

②大学で学ぶ上で必要なスキルと知識を習得する。

③幼児教育の現状と教員の仕事について理解する。

＜大学基礎演習Ⅱ　到達目標＞
①論理的に考えて発表したり、意見交流したりする中で柔軟に考える力を習得する。
②基本的な学びのルールを知る。
③将来の展望を持つ。

　これらの到達目標を掲げた上で実施した、具体的な授業内容は以下のとおりである。
＜大学基礎演習Ⅰ　授業内容＞
第１回目：オリエンテーション・大学での４年間の生活を意識しよう
第２回目：大学での学びと生活（1）クラス交流、履修登録の確認、IBU ネットの使い方
第３回目：大学での学びと生活（2）PC をマスターしよう
第４回目：大学での学びと生活（3）キャンパスツアー　大学を活用しよう
第５回目：大学での学びと生活（4）先輩から大学生活の話を聞こう　お困りごと相談会
第６回目：大学での学びと生活（5）高校と大学の違いを考えよう
第７回目：大学での学びと生活（6）担任との個別面談　大学生活をみつめよう
第８回目：大学での学びと生活（7）大学での学びを考える　－教職教育推進センターから－
第９回目：大学生としてのマナー講習　－先輩と講師によるレクチャー－
第 10 回目：読み方（1）文献に触れる
第 11 回目：読み方（2）文献の読み方
第 12 回目：読み方（3）文献を使って交流しよう
第 13 回目：レポートの書き方（1）レポートのルール
第 14 回目：レポートの書き方（2）レポートの表現の実践
第 15 回目：どんな教員・保育士をめざすのかを考えよう

＜大学基礎演習Ⅱ　授業内容＞
第１回目：冬学期オリエンテーション
第２回目：キャリアデザイン（1）いい保育者について考えよう
第３回目：キャリアデザイン（2）いい保育者になるための学びとは
第４回目：キャリアデザイン（3）先輩の話や模擬保育から保育者を意識する
第５回目：ハローナーサリー事前学習（1）オリエンテーションと学びたい内容をとらえる
第６回目：ハローナーサリー事前学習（2）園の先生から現場の視点を学ぼう
第７回目：ハローナーサリー（1）こどもたちと出会おう
第８回目：ハローナーサリー（2）こどもたちを観察しよう
第９回目：ハローナーサリー事後指導：ハローナーサリーの学びの整理
第 10 回目：多様な教育の取り組みを聴く　幼稚園の園長先生をお招きして
第 11 回目：「読み」の交流（1）―専門文献の読みのレジュメ交流
第 12 回目：「読み」の交流（2）―専門文献の「読み」を深める
第 13 回目：「読み」の交流（3）―「対話型論証」を読み解き、自分の見解をつくる
第 14 回目：教育・保育という仕事について考えよう
第 15 回目：１年間をふりかえりとこれからの大学生活・実習などについて考える

令和４年度の夏学期は前年度に引き続き、新型コロナウィルス感染症の拡大により、授業運営の影響を受けた。大学基礎演習においても同様であり、1 年生対象科目ということを考えると、これまでの経験値を生かしつつも、授業実施のための新たな工夫や個々の学生に応じた対応が求められた。そのようななか、担当教員の細やかで丁寧な対応により、当初掲げていた到達目標は概ね達成できたものと考える。特に、コースのディプロマポリシーのポイントの 1 つとなっている「他者と協働する」ことの具体的な取り組みについて進めていった。本コースの先輩による講話や交流、模擬保育の見学といったコース内の学生の縦の関係づくりなどを行った。この取り組みを進める際に教育専門演習（２年次配当）との連携など図っていった。これらの教育活動により、各回の学生のリフレクションでは学びが深化している様子が明らかとなり大変有意義な機会となったことが窺われる。

ただ、授業実施後の学生アンケートについて、「あなたは総合的に判断してこの授業を受講して良かったと思いますか」の設問について、全体の 66.7%が肯定的な回答（「そう思う」「少しそう思う」の合計）をしている一方で、「どちらともいえない」が 27.3%にのぼっている。このことから、各回の学生の学びと授業全体への満足度との因果関係や客観的な要因分析が現時点ではできていない。これらの結果を踏まえて、次年度以降の初年次教育に位置づく大学基礎演習のあり方および進め方について授業担当教員のみならずコース全体で協議するとともに、学生一人ひとりの学びの充実が図られるように細やかで丁寧な対応を心がけていきたい。

３．授業相互参観について

令和４年度冬学期に実施した授業相互参観について、コース教員が設定した公開授業一覧を以下に示す。授業相互参観終了後には合評会を開催し、参加教員相互による授業運営の方法について協議を行った。新型コロナウィルス感染症の影響から、各授業では従前と同様の授業運営が困難となっている場面があるものの、これまでの経験値や各授業での授業の工夫を通して、授業の質の確保を図られるように努めている。今後も授業相互参観の機会のみならず、よりよい授業運営に向けて、コース教員間で情報共有を密に行っていきたい。

担当教員	月日	曜日	時限	公開授業科目名	教室	合評会
小磯　久美子	11 月 25 日	金	5	保育内容の理論と方法「環境」	4-207	授業終了後
田辺　昌吾	12 月 6 日	火	4	保育方法論	5-211	授業終了後
鳥越　ゆい子	12 月 7 日	水	2	保育内容総論	6-352	授業終了後
丹羽　智美	12 月 7 日	水	1	子ども家庭支援の心理学	2-305	授業終了後
門谷　真希	11 月 24 日	木	4	保育者論	6-353	授業終了後
矢倉　瞳	12 月 13 日	火	2	教科内容論（音楽）	8-201	授業終了後
吉田　康成	11 月 24 日	木	3	運動基礎Ⅱ	サブアリーナ	授業終了後
吉田　祐一郎	11 月 22 日	火	1	社会的養護Ⅰ	4-312	授業終了後

４．コース独自の取り組みについて

（１）ハローナーサリーについて

幼児教育保育コースでは「いい先生（保育者）」になることを目指し、４年間の教育活動を進めている。免許・資格取得に向けて定められる実習とあわせて在学期間の早期から子どもに関わる機会の提供に取り組んでいる。その取り組みの１つがハローナーサリーである。ハローナーサリーは大学基礎演習Ⅱ（１年次冬学期配当）の授業時間を利用し、大学に隣接する幼保連携型認定こども園の四天王寺悲田院こども園にクラス別で訪問している。訪問前には事前学習では教員による指導とあわせ、以前にハローナーサリーに参加した４年生よりハローナーサリーの参加の意味についての経験談を聴く機会を設けた。併せてこども園の主任教諭を招聘し、園の概要などを中心に参加者に講話していただき、その後にこども園に訪問した。

新型コロナウィルス感染症の流行以前は、園内において園児との関わりも行っていたが、今年度は観察中心での参加となった。また、訪問後には事後指導としてハローナーサリーでの学びを整理する機会を設定した。学生からは、講義では学ぶことのできない現場での経験から、４年間の大学生活に向けた自身の意欲を持つことができたなどの感想が寄せられているなど、本取り組みの成果が確認されている。

（２）科目「インターンシップ」「保育インターンシップ」の授業運営

「保育インターンシップ」は新カリにおいて新設されたコース専門科目であり、４セメスター配当である。コースの全教員が「インターンシップ」（夏学期開講）または「保育インターンシップ」（冬学期開講）の担当者となり、週１回、保育所等の保育現場でインターンシップを行うとともに、定期的にインターンシップの振り返りを行う授業である。しかし、令和４年度は前年度に引き続き、新型コロナウィルス感染症の影響により、当初予定されていた授業内容の実施が困難となった。このことから、コース教員間で複数回にわたり協議し、「学生が主体的に学ぶ」ことができるよう、授業内容・方法を工夫し、実施した。主な内容は以下のとおりである。

・自分たちが「インターンシップ」の授業で、どのような内容を学びたいのか、主体的に考え、受講者間で議論する。
・保育現場の見学を行い、事前に設定した観察したい内容を現場で確認するとともに、疑問点等を保育者に質問し、主体的、対話的で深い学びを実現する。
・見学終了後にプレゼンテーション形式で報告するとともに、他者の報告に対して自分の経験を照らし合わせて、質問や感想を述べる。

当初予定していた授業内容とは異なったものの、結果として学生のアクティブラーニングを促すことができ、またコースの全教員が担当者であったことから教員間の協働も促されることとなった。通常、ゲストスピーカーとの調整や招聘時の授業運営は教員側が主として行ってきたが、本授業では可能な限り学生が行うようにし、授業内容だけでなく授業の運営に関しても学生の主体性が発揮される場となった。次年度以降にも今年度の授業運営の経験を生かしていきたい。

（３）教育基礎演習における園児を招聘しての保育計画

冬学期の「教育基礎演習」では、２園のこども園・保育園より５歳児の園児を本学に招き、２年生による模擬保育を行った。直接現場や園児と触れ合う機会を設けたことで、より教育保育の現場や子どもを知りたいという学生のニーズに応えられると共に、２年生は実施に際してグループで役割分担を行い、協働する経験を重ね学生同士の関係性が作られた。専門的知識・技術を学ぶだけでなく、個人の考えを他者と共有し対話を重ねる機会となった。また、１年生は２年生の保育参観を行った。学生のニーズを踏まえた授業改善を行うことで満足度の向上が望めたものと考えられる。

（４）教育実習、保育実習に係る情報共有

本コースでは、年４回の実習が実施される（４セメ２月「保育実習Ⅰ(保育所)」、５セメ８月「保育実習Ⅰ（施設)」、６セメ９月「教育実習（幼稚園)」、６セメ２月「保育実習ⅡまたはⅢ」)。令和４年度は新型コロナウィルス感染症の影響で、各種実習において、日程の変更や実習先の変更など、その場その場でさまざまな対応が求められた。通常であっても実習では個々の学生の状況に応じて細かな対応が求められるが、コロナ禍での実習ではより一層必要とされた。そのためコース教員間での情報共有を迅速にかつ密に行う必要性があり、２週間に１回のコース会議での共有とともに、Teams を活用した。実習指導担当教員が中心となり、きめ細かな情報共有を行うことで、日程変更等はあったものの、全般的に無事実習を終えることができており、個々の学生理解も深まったように考えられる。また、実習先の保育現場とも密な連携を取ることとなり、現場と協働した実習が実現できている。

５．その他（今後について）

教育学部では令和６年度に向けて改組が計画されている。幼児教育保育コースにおいてもこれまでのカリキュラムを基本としながらも改組に向けた準備を進めている。

本コースの教育研究上の目的にある、子どもに応えることができる豊かな人間性と幼児教育・保育に関する専門的知識及び実践力、指導力を持ち、生涯にわたり学び続ける優れた保育者の育成を進めるためにも、更なる質の高い教育活動を進めることが求められている。

このことから、学生の学修内容・到達状況も踏まえた学内外での教育活動を充実させることが重要である。そのためにもコースが一丸となり教育活動を進めることができる体制を構築していきたい。その上でこれらの教育活動の実施により入学者の確保、個々の在学生に対するきめ細やかな指導の充実、就職を見据えた出口保障を確実に実現いくことができるよう、FD 活動の活発化に向けた取り組みや、関係する各部署との有機的な連携を図りたい。

教育学部 教育学科 英語教育・小学校コース

1. はじめに

本コースは，中学校・高等学校の英語教員免許状（基本免許状）を主とし、小学校の教員免許状（併修免許状）も取得できることを特色として設置されている。しかしながら、本コースへ入学してくる学生は、卒業後、英語を得意とする小学校教員になることを目指すものも半数近くいる。

2020 年からの小学校 5 、6 年生で外国語科スタートを反映し、中学校・高等学校の英語科教員免許状所持者に採用試験時の加点を行っているため併修免許状として、本学小学校コースの学生で英語プログラムを選び中学校・高等学校の英語教員免許状を取得しようとする学生が増加している。また、大阪府・大阪市を始めとして、小学校の外国語科（以下英語とする）指導と中学校の英語指導の両方が指導できる教員を求められる傾向が強くなり、本コースからは「小中いきいき」等の採用試験合格を目指す学生が増えつつある。

また入学時には、ほとんどの学生が教員志望だが様々な座学や実習を通じて自身の適性などを深く知り「最終的に一般企業への就職を目指すようになる学生もいる。

このように中学校・高等学校の英語教員志望、小学校の教員志望、一般企業への就職志望の３つのグループの学生に対しての教育を担っている。1･2 回生における英語基礎力や、グループ協働の力を培い、３・４回生ではゼミ生どうしの英小コミュニティを活性化している。この取り組みによって、学生の英語力や意欲にばらつきがみられるものの、全体には自ら学び合う学習環境が創成されつつある。

2. 講義、および講義の系統性について

2-1. 大学基礎演習について

概要 : 本学の建学の精神の理解を基本に、大学における学修と大学生活の意義と目的全般にわたり初歩的な自己課題を自覚するとともに、それを支える基礎的知識・技能・態度を修得することで、ＩＢＵ及び所属する学部学科への所属感を確かなものとし、以降の学生生活への見通しを持つ。

到達目標

①本学に所属し、学ぶことの意義を理解し、以降の学生生活に対する自己課題を自覚できる。
②「大学生」としての学修に必要な基本的知識・技能・態度を修得できる。
③「教える」とは何かを理解し、自らの目的意識として具体化できる。
④教員や友人との適切な人間関係を築くことができる。

全面登学となったものの、コロナ下での大学生活への適応のために、教員間でリモート環境のノウハウを共有しあいながらアイデアを出し合い、授業開始前から LINE オープンチャ

ットを開設して、細かく学生とのコミュニケーションをとり、教員やクラスメイトのサポートが入りやすい環境を作った。

授業においては、グループディスカッションとプレゼンテーションを多用する形態にして学生同士、学生教員間のコミュニケーションが密に行われる体制を作った。さらに、例年同様ウェブ学習システムであるリアリーイングリッシュを課題として利用し、学生が授業外においても常に英語の学習をしなければならない環境を作った。同時にPROGテスト結果をもとに個人面談を行い各々が抱えている問題や将来への展望などを聞き取り教員間で情報を共有した。また学習ポートフォリオの入力作業なども行った。また、例年通り、ハロースクール（1年生全員が行う四天王寺東中学校での授業観察）を実施し、教職へ意識づけをすることができた。

以上のような実践は常に教員同士でディスカッションを行いながら計画立案され、FSDの観点からは教員二人が話し合いながら授業を行うことにより教員それぞれの強みを活かし、相互に学び合う環境となっている。

2－2.教育基礎演習について　【ピアース】

概要：自らの教育に関する考えを自覚的に捉えるために、言葉にして発表すること。その際自分本位にならないために、他の学生の意見をよく聞くことに努める。その上で、よい教員になるためには、今の時点で何をしなければならないかを自覚するとともに、その準備を開始する、もしくはいつでも開始できる態勢を整える。

到達目標
良い教員になるためにしなければならないことを自覚し、教員採用試験についてその概要を理解することにより、よい教員になる意識を形成することができる。

今年度より、本科目は、教員養成課程学生の「21世紀型スキル」の醸成を目指し、担当教員2人が意見交換を行い指導の方針を定めた。グループワークを中心とし、教師・学生間また、学生同士が円滑にコミュニケーションをとれるよう、Google FormsやLINEオープンチャットを活用した。

授業実践においては、英語科教員にとって必要な基礎英語力の育成を図るとともに、教育全般に必要な知識・技能の育成を中心に進めた。夏学期には、毎回「英語文法クイズ」を帯活動として行い、アクティブラーニングや PDCA、逆向き設計などの教育学的概念・理論を紹介してから、現代の教育問題を取り上げるディスカッション・グループプレゼンテーションを（日本語で）行った。冬学期は、それまでに蓄えた理論・概念の知識を活かしながら、教育問題をテーマに英語によるディベートを複数回行うことで、教育全般についての知見を深めた。さらに授業実践において必要な英語の抑揚・連結等、発音面の指導を目標に、グループで口頭のみの演劇をする「Reader's Theatre」という活動を行って英語力の育成を図っ

た。

本実践は、学内共同研究助成を受け、1 年を通して、「教員にとって必要な資質・能力」を学生に意識させながら、毎回の授業の振り返り活動を行った。成果を「教員 21 世紀型スキルの自己効力感尺度」(柏木他,2021) を用いた量的分析と、学期末の「振り返りレポート」についての質的分析を行い、2023 年度の実践に活用する。

2-3. 中等英語科教育法の系統性　　【柏木】

英小における中等英語科教育法は、一定のシラバスが練られているものの、その指導内容は相互に系統的に整理されてきたとは言い難く、指導内容の重複や、脱落が懸念されていた。また、4 つの講義の積み重ねによって、新学習指導要領を具現化する教師としての英語力や授業力がどのように段階的に培われるか、視覚化されていなかったことが課題であった。そこで、令和 4 年度は、令和 3 年度より準備を進め、それぞれ専門性の高い専任教員が主に担当し、また、担当講師と指導内容の系統表共有、および議論を繰り返した。主には、以下の内容である。学生らが中学校 1 年生から 3 年生、および高校 2 年生までの教科書の系統性を理解し、それぞれの発達段階に合致した指導を組むことができるようになった。また、重複指導となっていた、フォニックス指導や、学習指導案の書き方指導も段階的に整理でき、その余剰時間では、教えるための英語スピーキング力や文法力、ICT を用いた指導についてもモジュール学習の導入が可能となった。また模擬授業についての「評価ルーブリック」の検討が進んだ。令和 4 年度の 3 回生は、この系統表で学んできており、教育実習先でも比較的英語授業への準備を自律的に進めている。今後は、タブレットによる英語指導、SDGs 等、社会の課題解決に関わる英語指導についても発展的に取り組んでいきたい。

2-4. 教育実習指導について

2-3. で述べた中等英語科教育法の系統性と並行し、教科教育法Ⅲ（2 回生冬学期）には、少人数指導を実現し 2 クラス分割によって、一人一つ単独模擬授業、及び授業レコーディングによる省察を実現することができた。この時期には、集中的に、現場中堅の教員を招聘し、今まさに学校現場で実施されている授業や、実習受け入れ側の視点を学ぶと共に、教師としての遣り甲斐についても話を聞いた。英語教科教育法Ⅲとの直結で、3 回生前期の「教育実習指導」を、本学の専任教員と現場の中学校英語教員によるティームティーチングを実施した。学部生には身近に感じにくい「パフォーマンス評価」についても、中学校のパフォーマンステスト作成法を学んだ。教育実習を目前にした学生の集中力は高く、実習中に差し掛かった学生は熱心に指導案を持ち寄り、質問し合う姿が見られた。授業評価アンケートにおいても「自分の実践力の伸びを感じた」講義として高い評価を得た。令和 4 年度は、英小だけでなく、教小の英語プログラムにおける、「教育実習指導」と指導法の共有を行い、12 月には合同学習会を開催した。

3. 授業相互参観について

コースとして互いの授業は常に開かれた状態でありできるだけ相互に参観することを合意している。令和３年度は相互参観を行い、成果を共有し合うことができた。例として以下の報告があった。

冬学期水曜「海外教育実践プロジェクト」（担当：柏木賀津子・ダニエル・ロイ・ピアース先生を参観した。少人数ではあるが、非常に意欲の高い学生が履修しており、大学院レベルの内容でフィールドワークや海外の小学校との交流授業などに積極的に関わっている様子が印象的であった。

「海外教育実践プロジェクト（同上）」を参観した。少人数の有志を対象に海外での教育実践に備える内容の授業で，見学時にはオンラインでの俳句指導を行う試みの振り返りを「アクション・リサーチ」の形式で行う内容であった。質問紙の回答に基づき，記述統計からの情報読み取りと合わせて，「ディスコース・アナリシス(談話分析)」を通して，自らの授業実践をいかに振り返り，授業設計に役立てるかという意味において，データサイエンスと英語授業の実践が有機的に統合された取組であった。

「日本語研究基礎」（担当：高橋美奈子先生）の授業を参観した。参観当日は学生の発表会だったが、社会言語学理論をしっかり提示した上、学生に調査させた印象を受けて、先生からの発表に対する指摘が教育的で学生の思考を刺激するものであって、大変有意義な授業であった。小学校教育・英語のコース内の授業に活かせる示唆をたくさん受けた。

「ベーシックコミュニケーションⅣ」（担当：ダニエル・ロイ・ピアース先生）の授業を参観した。内容の練られたリスニング指導の実際を参観した。リスニングの英文は、参加者の学生が作成しスピーチを行い、リスナーはメモを取り、スピーカーはその質問に答えたりするため、4 技能を統合した、一人ひとりの学びが相乗となる仕組みであった。

4. コース独自の取り組みについて

例年、中高英語教育コースの学生には中学校・高等学校の英語教員志望、小学校の教員志望、一般企業への就職志望の３つのグループの存在を前提として、（１）英語力の向上、（２）授業の質改善へ取り組み、（３）教員採用試験対策（授業外）、（４）海外教育実習の再スタートを行った。以下例年通りできたものを（A）、変更あるいは実施できなかったものを（B）、逆に取り組みの質や量が増加したものを（C）として報告する。

4－1. 英語力の向上

① （C）在学生オリエンテーション(対面・オンライン)で英語の学習法，また最新の SLA 理論をふまえた英語学習・英検対策のピア・ラーニング形式のワークショップを行い，学生の学習方略とモチベーションの向上の機会とした。

② （A）資格試験受験の奨励と指導：英検などの資格試験受験を折に触れて奨励し、英語面接対策指導を行った。面接指導を受けた学生のほとんどが英検 2 級

に合格した。令和４年度は英検準１級の合格者も輩出できた。

③　（A）iTalk 訪問の奨励 ; i-Talk 主催のオンライン・対面交流イベント・WS への参加勧奨。

④　（C）令和３年度より英語論文提出を卒業研究として４年生に義務付けたが，令和４年度には，新たに APA 形式のフォーマットを整備し，研究の進め方，評価基準等も具体的に明示した。アカデミックライティングの指導を行い、英語論文の構成を含め，学位論文としての質向上に資した(詳細は後述)。

⑤　（A）冬学期１月のゼミの１５回目の授業を合同で実施し、各ゼミの代表が自身の卒業研究について英語で発表した。

⑥　（C）TOEIC の受験に加え、留学を目指す学生に向けて、IELTS 指導を一部の講義に取り入れており、平日の朝の帯学習で IELTS に取り組む学生が見られるようになった。

4－2. 授業の質向上に向けた取り組み

①　（A）全学的に年２回行われる授業評価「学生アンケート」を参考に授業改善に努めた他、授業改善について意見交換を行った。

②　（A）教職関連授業あるいはゼミ等で、その一部あるいは全部を英語で行い、学生への英語のインプットの機会を増やすと共に、英語による授業の実践例を共有した。

③　（C）Google Forms や Google Classroom をほぼすべての授業で導入し、学生の反応をリアルタイムで把握する、期限を決めてレポートをテキスト形式で入力させるなどの取り組みを行った。また Padlet や Quizlet など SNS 交流ツールを講義に積極的に取り入れるようになった。

④　（C）ゼミの授業の質担保のために、ゼミクラスでの日本語英語両言語での論文形式のレポート提出とゼミ内英語プレゼンテーションを行った。

⑤　（A）授業の質担保のために、ゼミクラスでの日本語英語両言語での論文形式のレポート提出とゼミ内英語プレゼンテーションを行った。

4－3. 教員採用試験対策に向けた取り組み

①（A）3 回生対象各種セミナー・面接対策：5～6 月、月２～３回程度設定

教員側で設定した日時が、学生のスケジュールと合わない側面はあったが、模擬授業や英語面接指導では、数名が参加し、それぞれ合格等の成果をおさめた。

②（A）4 回生対象和文英訳・英語エッセイ・英語面接およびディスカッション対策：4 月～9 月、週 1～2 回

教員側で設定した日時が、学生のスケジュールと合わなかったが、ZOOM オンラインでは継続して学んだ参加者が数名いた。

③（C）3 回生および 4 回生対象各種エントリーシート添削について、随時行った。
④（C）3 回生を中心に、近隣自治体の採用試験についての分析を行い、コース教員による英語口頭面接や、英語ディスカッションの指導を希望によって実施し、英語力をつけるストラテジーの相談タイムを設け、数名が参加した。

4－4. 卒業論文の取組

① （C）教職課程において、コースの学生は普段から実践力・英語力を身につけることで多忙な状況に置かれているため、ゆっくりと「研究」そのものについて考える機会が少ない。そのため、各ゼミ担当者が共通で使える「卒業論文規定」及び「卒業論文執筆ガイド」が必要であるとコース内で検討した。その実感から、学生向けに以下のバイリンガル資料を新に作成した。主な内容は以下である。

（1）卒業論文の進め方：「質問紙調査」、「事例研究（授業研究・会話分析・教室観察・開発型・アクションリサーチ）、「文献研究」などの大まかな研究手法の紹介から、具体的な卒論研究の進め方（問題提起→文献収集→「問」を立てること→研究計画→分析→執筆）の詳細な説明を載せたガイド。
（2）卒業論文の進め方（English version）：英語コースの特徴を意識した、上記１）の英語版。
（3）リーディングメモ（Reading memo）：参考文献から得られた知識をまとめるための構造化したメモ用紙。
（4）Thesis template：卒業論文執筆の書き込み可能なテンプレートファイル。

以上の資料は、通常のゼミ内容と並行に使える目的で作成された。将来教員になる学生が「授業実践力」や「教員に必要や資質・能力」を意識しながらも、研究の基礎を学び、卒業研究が実現できるための参考資料として作られた。さらに、以下の資料の初版をも作成した：

（1）卒業研究評価ルーブリック：卒業研究のプロセスから論文執筆までの評価に使用できるルーブリック（Ｒ４年度に、使用は各指導教員の判断に委ねた）。
（2）卒業研究評価表：「卒業研究」の評価の為の、コース共通で利用できる評価表（Ｒ４年度試み）。

コースとして、今後も一層レベルの高い卒業研究の成果を上げるため、以上の１）～４）は、初年度（Ｒ４年度）の実践を経て、加筆修正を行う予定である。また、５）と６）の資料については、今後はコース内協議を経て、修正版の使用検討をする予定である。

4－5. 学生の学び合いや発信、および自立した学習に向けた取り組み

① （C）コロナ禍の影響で、英小のコミュニティや上回生と下回生の交流が少なくなった時期が2年以上続いたが、平成3年度は、徐々にそのコミュニティを復活するために、まず、英小コミュニティスペースの整備を行い、4号館の英小の学習室で学び合いや議論ができるように机・椅子等を整備した。またゼミ代表が集まって連絡を取れるようにした。小中の英語学習を深めるために、オンラインで情報交換ができるようにEiBUDホームページを立ち上げ、異回生の学生の交流や採用試験の勉強会が出来る組織作りを進めている。

4－6. 海外および国内研修

① （C）グローバル教育研修への参加（9月　オーストラリア、2月　カナダ）。
海外留学等の研修は、コロナ禍途中より再開されるようになり、当コースから9月4名、2月3名が参加した。帰国後は、オープンキャンパス、プレエントリー、英語関連講義で、留学での学びをプレゼンしたり、和アンバサダーとして、学外からの海外者のアテンドなどを行ったりし、活発な活躍が見られた。

② （C）英小コース独自で新たに開発した「海外実習プロジェクト」（カナダ、ビクトリア大学、およびカモーソンカレッジ等）を2月実施した。この講義では、オンラインで、フィンランドの小学生25名への英語授業を実施したり、あべのハルカスキャンパスを拠点とした、新世界方面での「言語景観」のフィールドトリップを実施したりした。同時にカナダの提携大学カモーソンカレッジの国際センター長の大阪案内を務めた。

2月（1か月）のカナダ教育実習には、学生一名が参加し、現地モンテッソーリ教育校で、中学校1年生50名に対して、CLIL アプローチに基づく「俳句 to the World」の授業を英語で実施した。また、モンテッソーリの教育やカナダの学校教育について直接現地の教員から学ぶ機会を得た。また引率教員が現地公立小・中学校の視察を行い、次年度からの学生の視察・実習先との連携を具体化した。

③（C）個別にも留学を目指し準備する学生が見られるようになった。、カナダ、イギリス等へ短期留学を実現していた。（夏休み1名,春休み3名）

④（C）iTalk主催の国際交流プログラムに積極的に参加した。また、iTalk主催の「和グローバルコンペ」には、英小から4チームが参加し、3チームがグランプリを獲得した。学外のフィールドワークにも自主的に取り組み、英語をもちいたグループでの取り組みが盛んとなっている。

4－7. 地域連携・貢献

①（C）河内長野市英語村（8 月）にボランティア参加

河内長野市の要請を受け、当コースの学生や教小の学生が協力し、積極的にボランティア参加した。学生らは ICT 活用や動作をとおした実践的なブースでの英語による活動を工夫した。

②（C）藤井寺市でらっこイングリッシュ（6 月・2 月）にボランティア参加

地域連携課の要請を受け、当コースの学生が積極的にボランティア参加。当初 6 月の 1 回の開催予定であったが、保護者や市生涯学習課・教育委員会から高評価で急遽追加実施となった。

5. まとめ

本年度は、グローバル社会に貢献する英語教員の 21 世紀型スキル、人間関係の構築力、英小コミュニティのお互いの尊敬と多様な価値観を認め合う、学び方を進めてきた。これらの取組に加え、カナダ・オーストラリア等に留学した学生ものべ、20 名近くに上っており、国際社会における多文化共生社会を実感し、不確実性時代を生き抜く際の豊かな人間性の大事さを実感する学生も多くみられる。

１・２回生の大学基礎演習・教育基礎演習での、グループの協働や人間関係創り、講義などでの実践的フィールドワーク、現職教員の招聘による、最先端の小中、および高校の授業の体験、英語科教育法（Ⅰ～Ⅳ）の具体内容の共有と系統性、地域貢献や海外実習等をとおしたて、学生はその視野を拡げ、達成したいゴールを明確にしてきた。また、令和 6 年に向けて、教小コースの「英語プログラム」選択学生と、英小コースの学生の合同勉強会組織（EiBUD）をスタートさせ、4 年間英語教育を学びつづける基盤が創成されつつある。今後は、この学びが、自己のキャリア形成へと繋がり、実を結び、教職への確かな道筋になるように導きたいと考えている。

教育学部 教育学科 保健教育コース

1. はじめに

教育学部教育学科保健教育コースは、児童生徒の健全な発育発達と心身の健康の保持増進に関する専門的な知識・技能および教育現場に求められる実践力・指導力を有し、高い人格と倫理観、豊かな教養を備え、時代の要請に応える優れた養護教諭の養成教育を目的としている。本コースでは、養護教諭養成を主軸とした教育プログラムを展開しており、併せて、小学校教諭１種免許状が取得できる。

学生にとっては 4 年間を通じて、多忙な学習スケジュールとなるが、大学での学びの質をより向上させるため、後述する保健教育コース独自の教育活動も実践しながら、充実した魅力ある「養護教諭・小学校教諭養成課程」の構築に努めている。また、定期的にコース会議を行い、講義の進行状況、情報通信技術（Information and Communication Technology : ICT）教材を用いた講義方法の有効性、学生による授業評価、教員の教育・研究活動状況等について討議を重ね、教員の資質の維持向上も図っている。

昨今、多様な健康課題と複雑な家庭・社会環境を背景に持つ児童生徒が増加し、児童生徒の健康管理に加え、心身のケアを担う養護教諭の職務及び保健室の果たす役割が、以前にも増して、重要視されている。コース教員は、定期的に国内外の学術集会に参加し、「チーム学校」の一翼を担う養護教諭養成に関する最新情報を収集するとともに、本コースにおける学修成果も発表する等、他大学との交流も深めながら、時代のニーズに応じた教育プログラムの導入と実践、省察と改善に努めている。

2. カリキュラムの概要

1 年次は、教育実践理解期にあたり、教育者として必要なコミュニケーション能力や表現力及び幅広い教養を身につけ、教職への関心を深め、意欲の向上を図る。主な専門科目として、「養護概説」、「学校保健」、「解剖生理学」、「学校看護学」、「栄養学」等を開講し、養護教諭の職務遂行に必要な知識と技術を習得する。

2 年次は、基礎的教育実践力養成期にあたり、「学校救急処置」、「公衆衛生学」などの専門科目を通じて医科学的知識の更なる充実を図り、「精神保健」、「健康相談」、「小学校専門科目・教科教育法」を通じて、子どもの学習能力・心身の発育発達と小児期・学童期・思春期特有の心身症及び心のケアについて学びを深める。また「臨床看護学演習」では、医療機関における機能と役割を理解し、医療・看護の最新の知識を習得するとともに、学校と医療機関との連携を理解し、生命と健康の尊さを学ぶ。本演習には、医療機関での実習が含まれ、令和 4 年度臨床実習対象医療機関は、四天王寺病院、藤井寺市民病院、城山病院、東住吉森本病院であった。

3 年次は、発展的教育実践力養成期にあたり、「微生物学」、「薬理学」、「保健統計学」などを受講し、学校における保健指導や健康教育に必要な知識と技術を養う。「養護実習」では、教育現場での養護教諭の職務と役割、保健室経営および児童生徒の健康課題、保健組織のあり方等を理解するとともに、健康診断や健康相談、保健教育について学習し、養護教諭としての総合的な教育力・使命感・責任感を身につける。さらに、「教育専門演習Ⅰ・Ⅱ」

では、養護教諭が行う調査・研究方法の基礎を学び、自ら研究課題を見つけ、意義を見出し、積極的に研究心を高めることにより、次年度の卒業研究に繋げる。

4 年次は、研究・研修期にあたり、「教育専門研究Ⅰ・Ⅱ」で、大学生活の集大成として、卒業研究に取り組み、自らが立てた仮説を検証するため、収集したデータを多角的に分析し、成果をまとめ、結論を見出し、卒業研究としてまとめる。「教職実践演習（養護教諭）」では、大学 4 年間で学んだ知識と理論および養護実習等で修得した教科指導力や保健指導力並びに健康相談や救急処置法の技能と方法を統合し、使命感や責任感に裏打ちされた学識と技能、実践的な指導力を有する養護教諭としての資質の構築とその確認を行う。

3. 大学基礎演習

1 年次に開講する大学基礎演習Ⅰ・Ⅱの目標と主な内容は下記の通りである。

(1) 目標

＜大学基礎演習Ⅰ＞

① 本学に所属し、学ぶことの意義を理解するとともに、今後の学生生活に対する自己課題を自覚する。

② 大学生として、また教育学科保健教育コースに所属する学生として、教職を目指すための学びに必要な基礎的知識・技能・態度を身につける。

③ 自分の将来を社会との関係で考え、教職への、社会人への問題意識を持つ。

④ 社会に生きる人間として、教員や友人との信頼関係を築く。

＜大学基礎演習Ⅱ＞

① 本学・本学科に所属して自ら学ぶ意義と課題を把握する。

② 社会人および教員の準備段階として位置づけ、大学生および教育学科保健教育コース所属の学生としての学びに必要な基礎的知識・技能・態度を身につける。

③ 自分の将来を社会との関係で考え、教職への、社会人への問題意識を持つ。

④ 自分の考えを発表し、お互いに討論する中で教員や友人との信頼関係をつくる。

(2) 演習の概要と指導上の工夫

①ICT の積極的活用

初回の大学基礎演習にて、IBUnet の使用方法全般の解説と、「課題管理」を使って、レポート提出および課題への取り組み等ができるように指導した。また、「授業資料」にアップロードされた電子媒体の演習資料のダウンロードの方法、提示された URL へのアクセス、オンデマンド教材の利用方法等についても解説した。加えて、「クラスフォーラム」や「Q&A」から質問やディスカッションをする方法についても説明をし、積極的な利用を通して、オンライン授業に慣れることができるように導いた。

②図書館活用法

図書館の利用については、図書館課課員による図書館ツアーと図書・文献検索オリエンテーションを行った。本演習では、OPAC を用いて、本学蔵書の中から興味関心のある本を検

索し、実際に数冊借りて読むという実践を行った。また、各授業でのレポート・論文作成に必要な論文・資料収集を円滑に行うため、CiNii、Medical Online、EBSCO host、医学中央雑誌等、学術雑誌検索法についても習得してもらった。

一連の図書館活用法を学んだ後、コース内でビブリオバトルを行った。発表の内容や技法等、学生間で評価をさせ、最も評価の高かった上位 3 名が、図書館主催のビブリオバトルに出場し、1 名が優勝をした。本プロジェクトを通して幅広い領域の知識と教養を習得し、また、プレゼンテーション力、ディスカッションする能力を高めることができた。

③学外実習

大学基礎演習Ⅱ受講生が、四天王寺小学校にて教育現場での初めての実習となるハロースクールに参加した。受講生は、少人数のグループに分かれ、小学校 1～5 年生の各クラスにて、半日見学実習を行った。また、本コース卒業生が、同小学校に養護教諭として勤務しており、先輩から養護教諭の職務の実際と私立学校における保健室運営の特徴等についても学びを深めることができた。

④養護教諭が担う保健教育

養護実習では、保健室での実習だけでなく、保健教育を担当する機会が増えている。そこで、大学基礎演習Ⅱにおいて、1 年生を対象に、養護実習・教育実習（小学校教諭）を終えた 3・4 年生が実習先で実践した研究授業を再現するという取り組みを行った。本取組は、学年間連携を図り、先輩から後輩へのピアエデュケーションの一環と位置付けるとともに、養護教諭が実践する保健教育の実際について学ぶ好機となったと考える。

⑤養護教諭が実践する安全教育

大学基礎演習Ⅱにおいて、養護教諭の立場から、健康な心と体を育む「遠足」を企画するプロジェクトを行った。具体的には、児童生徒（対象校種・学年、人数）、引率者、場所、経路の詳細、遠足の目的と期待すべき学びの内容、遠足の総予算、服装や持ち物、安全・危機管理等を盛り込んだ遠足の企画書を作成し、パワーポイント・スライドおよび遠足のしおりを提示して、クラス内で発表会を行った。発表会終了後、互いの企画を評価および考察することで、養護教諭が実践する学校保健・安全活動、保健教育、危機管理、応急処置体制等について、理解を深めることができた。

⑥キャリア教育：教員採用試験合格体験記

今年度の本コース教員採用試験現役合格者数は、養護教諭 3 名（大阪府 1 名、大阪市 1 名、奈良県 1 名）であり、「教員採用試験現役合格体験記」と題した講演会を実施した。教員採用試験に向けての対策だけでなく、本学で 4 年間をどのように過ごしたかについて詳細に語ってもらった。また、現役合格を果たした 3 名は、養護実習、教育実習（初等教育）、加えて、学校ボランティア活動にも積極的に参加しており、保健室と養護教諭の役割、小中高等学校における養護教諭の職務の相違、児童生徒の健康事情や取り巻く社会・家庭環境等、多くを学んでいた。1 年生は、先輩の体験談を聞くことで、養護教諭になるという目標が明

確化され、学習意欲が更に高まったと思われた。

4. 授業相互参観について

令和 4 年度冬学期に実施した公開授業の実施日時、担当者と担当科目は下記の通りであった。授業参観終了後、合評会を実施した。

＜岡本啓子＞

日時：令和 4 年 11 月 30 日（水）2 限　6 号館 213 教室

科目：教職実践演習（養護教諭）

対象：教育学部教育学科保健教育コース 4 年生 32 名

参観者：0 名

内容：第 9 回：養護実践事例検討演習①「中学校マラソン大会（持久走大会）当日」の事例（疑似体験）

本授業の学習目標は、マラソン大会の疑似体験を通して「危機管理体制・救急処置活動・災害時の連携・子どもの心身の健康課題に応じた支援」について考えを深めることした。事例に関する情報を授業資料として事前に配付し、履修生個々に事例理解や設問の検討を行うように指示をした。授業においては、教員からの演習の進行、事例説明などでの留意事項等を行った後、自己の事前学習の結果を基にグループワーク（4 人）を開始した。マラソン大会の進行・教職員の配置・周辺地域の地図・マラソン経路等が掲載されている図をスクリーンに映し、履修生全員が常にイメージができるようにした。グループでのディスカッションでは、ワークシートを用いることで上手く進行が取れているようであった。内容のまとめを行い、グループごとに発表を行った後、個々に評価表を用いて評価を行った。具体的な検討内容として設問①は、雹が 1 年生女子の頭に当たってうずくまって泣いている状況での対応の検討。設問②は、避難指示が出た際の避難誘導方法の検討。設問③は、学校へ戻る途中に発達障害のある 1 年生男子のパニック症状への対応の検討である。本時は最終セメスターということで、大学・学校現場などの学びを統合させての体験内容もグループメンバー（4 人）個々に多様であることから、ディスカッション内容も多岐にわたり、充実した内容がまとめられていた。受講生全員が積極的に討論に参加し、学習態度は良好で、本授業での学習目標は達成されたと評価する。

＜久保正二①＞

日時：令和 4 年 12 月 8 日（木）3 限　6 号館 253 教室

科目：疾病と治療 II

対象：看護学部 1 年生 91 名、4 年生 1 名

参観教員： 1 名（仲谷和記）

内容：肝胆膵疾患の病態と治療、特に外科的治療について講義した。肝胆膵臓器の解剖と生理について講義し、理解していただくように努めた。次いで、各領域の良性疾患および悪性疾患の病態を図示しつつ説明し、それらの病態に基づいた治療、特に外科治療について講義した。治療については、写真やビデオを活用して、理解できるように努めた疾患も病態の理解とそれに基づく治療が重要であることを強調した。なお、授業の最後に確認テスト（小テ

スト）を行い、授業の理解度を確認したが、ほぼ正解であり概ね理解していると判断された。これらによって、本授業での学習目標は達成されたと考えられる。

参観記録：仲谷和記

最新の知見を含む、臨場感の溢れる講義であった。私も、久保先生と同様、医学系の座学の講義を同一学科同一学年の学生を対象に行っているが、私の講義より学生の受講態度がよく、大いに感心するとともに、自身の講義の参考になった。

＜久保正二②＞

日時：令和 4 年 11 月 24 日（木）4 限　6 号館 301 教室

科目：　学校看護学 II（疾病 I）

対象：教育学部保健教育コース 1 年生 36 名

参観教員：0 名

内容：外傷を中心とした救急疾患、特に学校現場で遭遇する外傷について、その原因、症状、病態及び対処について、実際の症例の写真などを含めて講義した。また、学校現場での救急処置、他の教員やスタッフとの連携、救急隊や病院での連絡についても講義した。なお、授業の最後に確認テスト（小テスト）を行い、授業の理解度を確認したが、ほぼ正解であり概ね理解していると判断された。これらによって、本授業での学習目標は達成されたと考えられる。

＜仲谷和記＞

日時：令和 4 年 12 月 5 日（月）1 限　6 号館 304 教室

科目：教育基礎演習Ⅱ

対象：保健教育コース 45 名（2 年生 41 名・3 年生 4 名）

参観教員：1 名（松本珠希）

内容：テキスト「学生のレポート・論文作成トレーニング（改訂版）（桑田てるみ編、実教出版）」を用いて、論文作成における「引用」の重要性とルールを説明した後、雑誌記事「日本は例外？若者の『気候不安症』（西村カリン、ニューズウィーク日本版 2022 年 9 月 20 日号、p70）」を題材にして、実際に引用の練習を行った。

参観記録：松本珠希

本演習では、『学生のレポート・論文作成トレーニング 改訂版: スキルを学ぶ 21 のワーク』（桑田てるみ著，2015）をテキストとし、次年度から始まる「卒業研究」も視野に入れ、前回の演習に引き続き、「論文作成基礎知識」について解説をされた。今回の演習では、学術論文の作成および参考文献引用方法、倫理的なルール（盗用・剽窃・改竄 等）にフォーカスを当てた内容であった。大半の学生が、本格的な論文を執筆した経験がないため、本演習への理解を高めるため、「STAP 細胞」の事例も挙げながら、詳細に解説されていた。また、演習後半は、「Tokyo Eye: Why Don’t You Feel “Eco-anxiety”?日本は例外？若者の『気候不安症』」（西村カリン, Newsweek 2022.9.20）を題材に、「直接引用と間接引用を用いて、

感想を書く」という課題に取り組んだ。保健教育コースでは、これまで、教育専門演習Ⅰ（3年次夏学期のゼミ）にて、論文作成の基礎知識に関する演習を実施していた。しかし、2年次冬学期に、本演習を実施することで、ゼミで展開する卒業研究が、より円滑に進行すると考えられた。体調不良等が生じ、一部の学生が、Zoom での参加となったが、各自、熱心に課題に取り組み、また、必要に応じて、グループ・ディスカッションに参加するなど、養護教諭・健康科学・保健教育領域の研究に取り組む意欲も向上したように感じられた。本演習の教育目的も達成され、アクティブ・ラーニングを積極的に取り入れた演習の展開から、参観者である当方にとっても、有意義な演習となり、多くを学ぶことができた。

＜松本珠希①＞
日時：令和4年11月30日（水）3限　6号館254教室
科目：疫学
対象：看護学部看護学科49名（2年生47名・4年生2名）
参観者：2名（高等教育推進センター　田和正己・市居康人）
内容：第9回「疫学調査法④（交絡とその制御法：年齢調整死亡率）」
　本授業では、疾病頻度を記述し、疾病と曝露の因果関係を推察し、臨床場面や地域活動で応用するための疫学研究方法（記述疫学研究、生態学的研究、横断研究、症例対照研究、コホート研究、介入研究）について概説した。また、2種類の誤差〔偶然のばらつきである偶然誤差と一定方向に偏った系統誤差（バイアス）〕と交絡、それらの制御法についても解説を加えた。授業の後半は、「年齢調整死亡率」の事例を取り上げ、演習問題を解きながら、交絡制御法について、理解を深めてもらった。指導者からの問いかけにも積極的に発言する等、学生の受講態度は良好で、本授業で取り上げた領域に関する知識の理解と習得がなされ、本授業の目標が達成された。

＜松本珠希②＞
日時：令和4年11月30日（水）4限　6号館304教室
科目：公衆衛生学
対象：教育学部教育学科保健教育コース45名（2年生41名・3年生4名）
参観者：0名
内容：第9回「地域保健研究発表」
　本授業では、「地域保健活動と学校保健との関連を探求する」ことを目的に、「地域保健研究発表」を実践した。具体的には、受講生全員が、調査対象地域（例：大阪府羽曳野市）を選び、その地域の保健活動の特徴、各地域保健活動が学校保健に果たす役割、市町村民の安全を守る地域の取り組み、地域創生、各地域の抱える課題等を調べ、パワーポイントで作成したスライドを用いて 7 分間で発表をした。また、今回の地域保健研究をテーマにした保健だよりを作成し、受講生全員に配布した。発表後は、質疑応答を重ね、ルーブリックをもとに自己・他者評価を行った。加えて、評価表をもとに、自己の発表を振り返るとともに、地域保健研究から、養護教諭が実践する学校保健活動・教育についても考察してもらった。各発表の内容が興味深いだけでなく、本コース生の発表技術も高まっていると実感した。受

講生は、積極的に討論に参加するなど、学習態度は良好で、本授業で取り上げた領域に関する知識の理解と習得がなされたと評価する。

5. コース独自の取り組みについて

(1) ICT を活用した模擬授業実践演習

2 年生を対象として「教育基礎演習Ⅰ・Ⅱ」において、オンライン授業およびハイフレックス型（対面・オンライン同時進行型）授業を想定した小学校・中学校の保健教育を構築させ、学習指導案の作成と授業実践を展開した。学生の授業実践力だけでなく ICT 活用能力の向上も認められた。加えて、教育実習（小学校教諭）および養護実習に参加した 3 年生は、実習校にて、ロイロノートがインストールされたタブレットを用いて保健教育領域の研究授業実践にも積極的に取り組んだ。

(2)「教育専門演習Ⅰ・Ⅱ／教育専門研究Ⅰ・Ⅱ」

①目的

保健教育コースの「教育専門演習Ⅰ・Ⅱ／教育専門研究Ⅰ・Ⅱ」（専門ゼミ）では、下記に示す 4 領域のいずれかを選択し、2 年間に亘り、各領域の専門知識を習得するとともに、調査研究能力を養うことを目的としている。

a) 学校保健看護学研究（担当：岡本啓子）：多様性が尊重される中、安全・安楽に生活を送るための支援が必要とされています。多様な健康ニーズを抱える子どもに対応できる養護教諭の専門性について考えていきましょう。本演習では、「疾病・障害がある子どもの支援」「発達障害がある子どもの支援」「チーム学校による支援」「学校における医療的ケア」「学校における危機管理」など、一緒に考察していきます。

b) 小児保健研究（担当：久保正二）：小児疾患には遺伝子異常に基づく疾患や先天性疾患が含まれ、様々な治療が必要となり、時には障害を抱えることもあります。その際には家庭、学校、医療機関や地域の人々と連携して疾患の治療とともに成長を見守る必要があります。小児疾患について様々な観点から学習していきます。

c) 健康科学・社会医学研究（担当：仲谷和記）：我が国の青少年を取り巻く社会環境、生活環境などの変化に伴い、家庭や学校、地域社会における健康課題は多様化、深刻化していると言われています。本演習では、そういった健康課題を様々な角度から学習していきます。

d) 公衆衛生学・Women’s Health 研究（担当：松本珠希）：女性活躍推進法が制定され、日本でも「女性の活躍」が謳われて久しいです。女性の人生の選択肢は広がりましたが、それに伴い、女性の心身症（心のからくりが関与して起きる体の病）もまた多様化、複雑化した感は否めません。本演習では、女性の長い一生の各ライフステージ（小児期・思春期・性成熟期・更年期・老年期）における「心と身体の相関」に関連する諸問題を、bio-psycho-social（生物学・心理学・社会学的）な観点から多面的に考察します。

② 主な内容

a) 各専門ゼミの卒業研究作成マニュアルを作成し、そのマニュアルを基に、卒業研究への

心構え、卒業論文の作成方法、年間調査研究計画の立て方、教員採用試験及び就職活動との両立の仕方、過去の卒業研究の事例等の内容を含めたオリエンテーションを行う。

b) 各研究領域の学術論文（原著論文・総説論文・症例研究報告）を読み、研究内容を理解するだけでなく、方法論、結果の解釈の仕方を学び、また、ゼミ内で討論を重ねることにより、各研究領域への理解を深める。

c) 学術論文及び過去の卒業研究を事例として取り上げ、各種研究方法（質問紙調査、インタビュー調査、フィールド調査、行動観察、実験、実践研究、資料分析、文献研究、教材研究・教材制作）の実際について学ぶ。

d) 文献検索ツールの使用、図書館利用のコツ、公的資料の使い方等、文献収集方法について学ぶ。

e) 収集したデータの分析及び解釈の仕方、統計処理、図表の作成等の演習を行う。

f) 学術論文及び過去の卒業研究を事例として取り上げ、卒業論文の構成（要約・諸言・方法・結果・考察・結論・謝辞・引用文献）を学ぶ。論文作成開始後は、文章の点検及び推敲の仕方についても、各専門ゼミで指導する。

g) 定期的に研究発表（卒業研究構想発表と現況報告）を行い、4 年次の最後のゼミにて、卒業研究発表会を行う。

h) 学術研究の実際を学ぶため、学会や研究会等に積極的に参加する。

③ 卒業研究発表会：4 年間の学びの集大成

1 月 22 日（土）3～5 限に、合同ゼミ「卒業研究発表会：4 年間の学びの集大成」を開催した。4 年次生 32 名が各卒業研究を 7 分間で発表をした。3 年次生と教員はルーブリックを用いて評価をし、第 1～3 位および特別賞を含む 4 名を選出し表彰をした。長時間にわたる発表会ではあったが、どの演題も、心身の健康とその関連要素について、養護教諭の観点のみならず、多角的に調査研究および考察しており、非常に興味深く、心に響く内容であった。令和元年度から始まった新カリキュラムでは、Covid-19 の影響もあり、多くの制約もあったが、本発表会を通して、第 1 期卒業生が 4 年間の学びの集大成としての調査・研究成果を、ともに学ぶ仲間、3 年次生、コース教員間で共有することができ、有意義な時間を過ごすことができた。

(3) 四天王寺小学校・四天王寺東高等学校中学校との連携事業：現職養護教諭から学ぶ

四天王寺小学校養護教諭（林夏美先生：本コース卒業生）、四天王寺東高等学校中学校養護教諭（伊藤久美子先生：10 年間看護師を経験）を招いて講演会を開催し、健康診断、健康相談、応急処置、学校保健活動等の実践から、学校における保健室の機能と養護教諭の役割の実際を学び、理解を深め、意識向上への動機づけとした。また、養護教諭になるための心構えや勉強方法等、大学 4 年間の過ごし方等についても探究することができた。

(4) 養護教諭教員採用試験対策講座

3 年生を対象に、希望受験地をもとに、都道府県別のグループを編成し、受験地の出題傾向を考慮しながら、教員採用試験対策講座を実施した。筆答試験対策の主な内容は、「学校

保健の構造・学校保健計画」、「からだのしくみと働き」、「学校環境衛生」、「学校給食」「健康診断」、「健康観察・健康相談」、「こころの健康」「学校安全・応急手当（救急処置）」、「感染症・疾病予防対策」、「保健室の役割・養護教諭の職務」、「保健教育・学習指導要領」、「事例・対応」、「法規・法令」、「答申・時事問題」等であった。本講座では、過去に出題された問題や実践問題を活用し、詳細な解説を加えることで、各領域の知識の定着を図った。二次・三次試験対策では、出題が予想される問題について解説と実技訓練指導を行い、併せて、模擬（集団）保健指導と授業、面接指導を行った。加えて、最近の学校保健の動向、コロナ禍における養護教諭の職務と保健室の役割、児童生徒の心身のケア等について討論をする機会も設け、学生たちの意見交換を通して思考力と判断力の育成も図った。

本年度の養護教諭教員採用試験現役合格者は 3 名（大阪府 1 名、大阪市 1 名、奈良県 1 名）であった。伝統ある養護教諭養成機関として、有能な養護教諭を育て教育現場に確実に送ることこそ、本コースの使命ともいえる。今後は、養護教諭としての現場即戦力を養うためにも、救急処置に関する実例や判例についての学習を強化し、学校看護技術や保健指導などの実践力をさらに積む時間も確保するなど、より一層の教育プログラムの改善と発展を図りたいと考える。

(5) 高大連携事業

①高大連携校 4 校における定期健康診断の補助実習

本実習は、本学での演習（学校看護学演習・臨床看護学演習）、臨床実習、養護実習を経験した 4 年次生を対象に、エクステンションセンター事業と教職実践演習（養護教諭）の一環として行われるものであり、健康診断の内容及び手順、検査方法を実地で学ぶことにより、養護教諭に必要な知識・技能の習得に役立てることを目的としている。令和 4 年度は、大阪府立高校 4 校（富田林高等学校、懐風館高等学校、藤井寺高等学校、長吉高等学校）にて実施した。本実習参加学生は、健康診断の内容及び手順、検査方法を実地で学び、養護教諭に必要な知識・技能の習得に役立てることができた。

②高大連携事業（大学授業体験出張講義）

平成 25 年度より、大阪府立河南高等学校の e（エスペランサ）コースで高大連携事業の一環として、教育学部を目指す生徒を対象に授業を行っている。本授業（担当者：松本珠希）では、我が国における養護教諭（保健室の先生）の歴史、諸外国の養護教諭、養護教諭の存在と役割、保健室の機能、子ども達を取り巻く現代的健康課題など、多岐に亘り、詳しく解説した。保健室は、けがをしたり気分が悪くなったりした時に処置をしてもらうところだが、心身の健康について学ぶ学習室でもあり、最新健康情報の発信基地でもある。朝食欠食や夜更かし、運動不足、喫煙や過剰な飲酒等、不健康な生活習慣が心身の健康にどのような悪影響を及ぼすのか解説するとともに、児童生徒の心に響く健康教育（保健の授業づくり）についても紹介した。

(6) 学外研修

①日本養護教諭養成大学協議会への参加

2022 年度日本養護教諭養成大学協議会は、以下のプログラムに沿って、Zoom によるオンライン形式で開催され、岡本啓子が代表評議員として参加し、総会の議決にも関わった。

日時：令和 3 年 9 月 9 日（金）　9 時 30 分～16 時 30 分

＜プログラム＞

開会の辞、会長挨拶　9 時 30 分～9 時 40 分

1. 総会　　9 時 40 分～10 時 45 分

2. 講演　　11 時 00 分～11 時 45 分

文部科学省初等中等教育局 健康教育・食育課

健康教育調査官　　松崎　美枝 氏

「文部科学省からの最新情報（リアルタイム型配信）」

3. 養成教育セミナー　12 時 30 分～16 時 25 分

「養護教諭養成大学教員の授業実践力の向上－反転授業の設計」

講演「反転授業の授業設計について」　　熊本大学　川越　明日香 氏

ワークショップ（グループワーク）　（14 時 20 分～15 時 50 分）

全体会および講師による講評・まとめ

4. 閉会の辞 16 時 25 分 ～16 時 30 分

初中等教育において令和の日本型学校教育の構築に向け「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現が提唱されている中、高等教育においてもこれらを積極的に検討することが求められているため、ポストコロナを見据えた質保証が喫繁の課題となっている。養護教諭養成教育に関わる主要な 3 科目（養護概説、健康相談活動、看護学）を取り上げて、反転授業の設定について確認、ワークを行った。Zoom のブレイクアウトセッション機能の活用により、教員間のディスカッションによる課題共有など充実した研修であった。

経営学部 経営学科

１．はじめに

経営学科では、大学 4 年間の学びを支えることに加え、就職活動には不可欠である基礎学力の向上からキャリア形成までを視野に入れ、卒業時点において有意な人材として社会からの評価が得られるレベルの能力・知識・スキルが獲得できることを目標としている。本学科の授業科目は、経営学・法学の基本を学科共通科目として開講し、学科共通教育科目から専攻ごとの専門教育科目へと、特色を活かして専門性を深めることにより、経営学専門科目の学年進行配置として段階的に無理なくそれぞれの分野が修得できるように科目を配置している。

平成 28（2016）年度の専攻分離後、令和元（2019）年度に完成年度を迎えた。公共経営専攻は、専門的知識を効果的に修得して、将来、倫理観を備えた公務員となって社会貢献し、活躍することができる人材を養成し、企業経営専攻は、希望進路による自由科目選択、キャリア形成支援に向けたインターンシップを核としたキャリア開発科目と資格検定科目の連携による学修を進めている。

その結果、公共経営専攻から、令和元年度は 14 名、令和 2 年度は 17 名、令和 3 年度は 20 名、令和 4 年度は 44 名の公務員試験の合格者を輩出することができた。公務員試験に対応する指導として、採用試験のエントリー手続きの前の面談から始まり、最終面接に至るまで、個別対応で寄り添う支援をするとともに、学生も長期にわたる受験を続けてきた成果である。企業経営専攻では、授業の特色に応じてアクティブラーニングを積極的に導入するなど、多様なアプローチで学生の学びを支援する体制を整え、成功経験を重ねながら能力開発が促進できるように、「学科独自の取り組み」の機会を設け、学生指導に努めてきた。コロナ禍でのインターンシップ体験や就職活動は簡単ではなかったが、不安を抱える学生たちをゼミ担当教員、キャリア担当教員が継続して励まし、支援を行った。

学科の特徴のひとつである特待生制度（奨学金制度）も定着し、上位で入学した不本意入学学生の退学予防とモチベーションの維持として機能し、公務員や組織のリーダーとして活躍できる人材、起業家などの輩出に寄与していると考えられる。

さらに、学生には、多様な挑戦の機会を設け、段階的にできることを増やすことによって、学生のやる気を引き出し、成功体験を積む機会を提供する環境づくりとして、経営学科が令和４年度に取り組んできた特色ある授業科目および取り組みは以下のとおりである。

２．大学基礎演習について

大学基礎演習Ⅰでは、「大学生としての基本を学ぶ」、大学基礎演習Ⅱは「大学生として学内外での学びを深める」をテーマに、学科専任教員の全員体制でクラス別授業、全体授業を効果的に行っている。授業の実施にあたって、学生に関する情報は学部会議やメール等を活用して教員間で共有しながら進めている。公共経営専攻、企業経営専攻の両専攻の学生が、進路に対する視野を広げ、積極的にコミュニケーションできる環境づくりに努めた。

大学基礎演習Ⅰは、全体での対面による履修指導を実施し、ノート PC 必携化に対応した PC の操作説明等も取り入れて万全を期した。令和 4 年度も「学びの基本」として、文章の

書き方、レポートの書き方、ノートの取り方など、初年次に大学での学びのリテラシーの向上に万全を期した。さらに、「個人面談」、「キャンパスツアー」により担任教員、クラス学生との関係性の構築に注力し、コロナ感染による制約が残る中でも最大限の工夫により、学生一人ひとりの大学での学びや学生生活の意義等を紹介し、考えられるよう配慮した。また、キャリア関連科目との連携強化を意図した「キャリアの基本」も継続して、低年次インターンシップにつなげながら、個々のキャリア意識の向上を図った。

大学基礎演習Ⅱも、早い段階での「個人面談」を実施し、クラス別授業と全体授業を織り交ぜて「学びの基本」「キャリアの基本」を継続し、大学での学びが深められるよう体系的な学習を行った。また、経営学科が毎年、恒例で実施しているビジネスプランコンテストを4回の授業（アイデア発想、ビジネスプランづくり、各クラスでのプレゼンテーション）により、ノートPC必携化による特徴あるPPT作成が実践されている。

また、資格検定試験の紹介・推奨を兼ねた「検定試験体験」、多様なインターンシップを紹介する特別講座、4年生の公務員合格・就職内定体験談、専攻・クラスの垣根を越えた「コミュニケーションゲーム」など、多彩なメニューを企画・実施した。

なお、大学基礎演習の振り返りアンケートでは、1年間の大学での学びについての総括の結果、「ビジネスプランのプレゼンテーション」「先輩による就職活動体験談」「キャンパスツアー」が、学生間の相互理解、キャリア意識向上、今後の就職活動への興味・関心につながったようであった。このふりかえりには、学科内で情報共有することにより、今後の大学生活の満足度を高める改善につなげ、次年度の全面対面型授業を視野に入れて、個別クラスと合同授業を検討する。さらに、コロナ禍により遠隔授業で蓄積したZoomを活用した授業ノウハウも生かした個別クラスの教室を繋ぐ連携学習を効果的に導入していきたい。

３．授業相互参観について

令和4（2022）年度は、以下のとおり、概要にあげた内容で授業参観を実施した。

学科選抜科目	概　　要	参観日時・場所	合評会日時・場所
①社会保険法（浅野）	医療保険(4)公的医療保険の給付範囲、小テスト２	12月9日(金)2限 5-210教室	授業終了後、同教室にて
②地域活性化演習（天野）	道明寺ビール町屋再生MONZENプロジェクト見学	11月30日〈水〉5限 4B-155教室	授業実施後、実施教室にて
③ショップビジネス論（伊藤）	売上予算管理の基礎知識と実証分析	12月1日(木)3限 2-205室	授業終了後、同教室にて
④商取引法（霍）	企業の取引活動と商法について解説・検討	11月19日（金）1限 4－206教室	実施後、同教室にて行う
⑤構造主義入門（加藤）	行動原理の理由等の観点の掘り下げ	11月24日(火) 1限 4-414 教室	実施後、実施教室にて
⑥人的資源管理（木村）	人事制度についての解説と検討	12月8日(木) 1限、4-259教室	実施後、教室内にて行う

⑦ 民法Ⅳ(契約法)(後藤)	民法の契約法に関する授業・復習問題演習とその解説	11 月 18 日(金) 1 限 5-210 教室	実施後、教室内で
⑧ マーケティングⅡ（隅田）	企業によるマーケティング戦略の概要と応用	12 月 7 日(水) １限・5-303 教室	実施後、実施教室にて
⑨ 実学マネジメント論（富田）	起業家講話から、ビジネスを知る（マツダ紙工）	11 月 23 日（金） 3 限　5-210 教室	実施後、実施教室にて
⑩ 商業簿記Ⅱ（原田）	決算仕訳と精算表の作成	12 月 7 日（水） 1 限 6-354 教室	実施後、実施教室にて
⑪ 法と倫理（春名）	マナーに関するディスカッション	11 月 30 日（水） 1 限　4-406 教室	実施後、実施教室にて
⑫ キャリア演習Ⅲ（東野）	ビジネスコミュニケーションを学ぶ	11 月 30 日（火） 2 限 2-205 教室	実施後、実施教室にて
⑬ 金融論（福田）	多様な金融機関	11 月 21 日（月） 3 限 2－209 教室	実施後、実施教室にて
⑭ 工業簿記Ⅰ（山﨑）	個別原価計算の解説と問題演習	12 月 10 日(金) 2 限 5-211 教室	実施後、実施教室にて

上記のとおり、授業参観を行ったが、多くの授業において、参観はなかった。経営学科の場合、教員一人が担当する授業や学生支援が多いため、それぞれが担当している授業の合間に授業参観することは厳しい状況である。今後、教員を補充して、時間を確保できるようにしていきたい。

４．学科独自の取り組みについて

(1) 特待生制度（経営学部総合奨学金制度）について

両専攻において、学生の学習意欲を高め、将来の目標が達成できる経験を増やすために各専攻、成績優秀者 1 学年 12 名（4 学年計 96 名）を特待生とする経営学部総合奨学金制度の 1 年次の特待生は一般入試前期日程（チャレンジ試験を含む）の成績により決定するが、対象となる上位者は第一希望大学の合格により本学を辞退するため、令和 5 年度（2023 年度）も対象者の人数は半減となった。

2 年次以上について、公共経営専攻は成績評価 GPA に加えて公務員試験の模試の成績等を評価し、企業経営専攻は GPA に加えて各種資格検定の合格実績や、学部で取り組むインターンシップ、地域連携活動などの学内外で行っている各種取り組みでの貢献等を評価している。特待生に選抜されると、学業はもちろんのこと、それ以外の活動等にも積極的に参画しようとする姿勢が見受けられる。特待生に選ばれた学生は、経営学科学生の模範として学科を牽引する役割であることの自覚をもって、他者を巻き込み課題解決し、協働しながら成長することを目標としている。

(2) キャリア演習Ⅰ・Ⅱ

就職力をはじめとする下記に掲げる 4 つを目的とし、外部教育機関と連携して、「キャリア演習Ⅰ」「キャリア演習Ⅱ」を令和 4（2022）年度も 2 年生の必修科目として実施した。

ⅰ.企業経営専攻では就職試験で多くの企業が利用する SPI 試験、公共経営専攻では公務員試験の教養試験への早期対策および早い段階から就職に対する自覚・認識を学生に促すこと。

ⅱ.大学の講義をより円滑に履修するための基礎学力の向上。

ⅲ.2 年次学生の講義出欠状況・講義中の態度の把握、専門演習ゼミ選択時に備えた学生状況全般についての把握。

ⅳ.教員（担任）と学生の円滑な関係の構築、face to face による学生指導の機会の確保。

① 公共経営専攻

東京アカデミーと連携し、一般教養(数的処理・社会科学・人文科学・自然科学)の講義を行っている。これは 1 年次の公務員講座の内容と、3 年次の実践的な講座の内容を架橋するもので、公務員を目指すうえでは重要なものである。キャリア演習Ⅱでは、2019 年度から 2 クラス（担当者 2 名）に分け、一般教養に関する学習をサポートする体制を強化している。

② 企業経営専攻

各セメスター（夏学期：言語分野、冬学期：非言語分野）の初回授業と最終授業において、確認テストを実施している。2022 年度の夏学期のプレテストの平均点は 40.2 点、ファイナルテストの平均テストは 65.3 点で、平均点が 25.1 点アップし、冬学期のプレテストの平均点は 42.0 点、ファイナルテストの平均点は 60.9 点で 18.9 点アップし、成果が認められた。

2022 年度の総合平均点は 60.9 点となり、2021 年度の総合平均点 65.3 点と比べると平均点が下がっている点については実施形式が異なることや問題の難易度を高くしたことも関係していると考えられる。

2022 年度、効果的に学修を進めるために、従来どおり講義実践上の配慮（小テストの実施、解答テクニック指導、視覚情報教材の工夫）を行った。

(3) キャリア演習Ⅲ

企業経営専攻 3 年次で全員が体験する「インターンシップⅠ」に向けて、事前学習としてビジネスマナーの習得に加え、日常生活の中で約束事を守ること、自己管理すること等を徹底指導している。また、3 年次の 6 月には授業内容の習得状況を確認するため、ビジネス実務マナー検定試験の全員受験を課して合格を目指し、授業で受験対策も行っている。

2022 年度は、毎回の授業内での目標の設定と振り返りをさせ、フィードバックも行った。授業実施後の感想では、例年どおり「この授業を受けて、目標を立てることの重要性を理解できた」「書くことを通して表現力向上に役立った」という前向きな意見や、「知らなかったことや勘違いしていたマナーを正しく知ることができてよかった」という意見が多かった。また授業内でのアクティブラーニングについて、コロナ禍で自己のコミュニケーション能力に不安を抱いていた学生からも好評であった。

(4) オールインターンシップ

本授業は、「キャリア演習Ⅲ」「インターンシップⅠ」「インターンシップⅡ」と続く必修科目で、3 年生全員が実際に就業体験をするキャリア科目の授業である。授業では、事前学習（各種提出書類を書くための実践的指導を含む）を行い、3 年生夏季休暇中に就業体験を行う。3 科目を受講することで仕事理解と将来の就職活動に向けてのキャリア形成推進となる重要な位置づけとなっている。5 日間から 10 日間インターンシップについて、2022 年度も新型コロナウイルスの影響が若干あり、WEB での実施や期間を短縮した企業があったことに加え、実施時間を確保するために複数の企業、団体でインターンシップに参加した学生もおり、夏季休暇中から 12 月末日までの期間となった。

この経験をとおして、当初就職に意欲的でなかった学生も、就職をより身近に意識し、仕事について主体的に学ぶ機会となり、例年、多くの学生にとって就業体験の経験が将来の職業選択に向けて大きな役割を果たしていると考えられる。

(5) キャリア演習Ⅳ（模擬就）

本授業は、「キャリア演習 I」、「キャリア演習 II」「キャリア演習 III」「オールインターンシップ」の集大成として、2021 年度より導入したプログラムである。例年 3 月から本格的にスタートする就職活動に向けて、企業へのアプローチから選考までのプロセスを体験する。本プログラムに、SPI 試験受験や合同企業説明会を組み込み、模擬面接では面接官に企業の人事担当者を起用した。学生はステップごとに、教員、企業面接官からフィードバックを受け、学生自身の課題を確認するとともに、気づいていない不安もクリアできた。事前事後で意識変化の確認アンケート（5 件法）では、すべての項目で授業開始前に比べて数値が上昇した。中でも「私はグループディスカッションに自信を持って臨める」、「私はグループ面接、個人面接に自信を持って臨める」、「私は、就職活動は具体的に何をすべきかを理解している」、「私は前向きに就職活動にのぞめている」などの 5 段階評価が 1 以上上昇し、満足度も 4.52 と高い評価点を示した。2021 年度は、コロナ禍のため、全面遠隔対応としたが、2022 年度は前半 2 日間を対面とし、後半 2 日間は遠隔を効果的に導入した。

(6) 公務員受験関連科目

公共経営専攻が多様な公務員をめざすことができる支援を行うとともに、企業経営専攻においてもキャリアの選択の一つとして地方公務員や公安職をめざすことができる支援として、東京アカデミーとの連携授業を導入している。2022 年度はコロナ禍の収束程度により、例年通りに東京アカデミーのスタッフ・講師と本学教員の間で、定期的に授業の問題点などを共有することにより、昨年度より全体的に改善して実施することができた。

① 公務員基礎演習（旧：公安職特別演習）

公安職・市役所等をめざす企業経営専攻の学生を対象として実施する東京アカデミーとの連携授業である。真剣に公務員をめざす学生の基礎力を養成している。公共経営専攻においては、多様な公務員志望の学生の基本的知識を習得する場としている。

② 行政職特別演習

公共経営専攻の 2 年次では、行政職を志望する学生等を対象として、行政職特別演習（専門科目主要 7 科目）を東京アカデミーとの連携授業として開講している。専攻の専門教育科

目としての位置づけであり、卒業単位として認定している。国家公務員や地方上級の合格に必要な、3 年次の公務員プログラムに続く専門科目の基礎を 2 年次の行政職特別演習として段階的に学ぶ機会として設けている。本授業は本学教員が担当する経済学、憲法、民法等の専門科目とも連動させて、公務員試験の合格につながるように期末試験は本番を見据えて出題している。共通教育科目で開講されている科目も活用しながら、3 年次講座へつなげるなど、専門科目を伴う国家公務員や地方上級の志望者を手厚くバックアップする体制をめざしている。

③ 公務員試験に直結する特色ある授業科目

公務員試験で必要となる知識・スキルの習得を目指し、論作文、グループワーク、自治体研究、エントリーシートに関する講義及び演習課題を実施し、添削・フィードバックをする「公務員特別演習」や近年公務員試験においても採択されることが増加している SPI 及び SCOA 試験への対策講座も設けている。

④ IBU 公務員プログラム

1) 1 年生講座

2022 年度も 5 月から公務員試験の入門講座を実施した。原則的には対面授業で実施し、一部遠隔での受講対応も行った。本講座は新入生の公務員試験学習のスタートとして、授業と相乗効果を促す体制を取っている。

2) 3 年生講座

教養科目は全員受講を課しており、専門科目は国家公務員や国税専門官、県庁などをめざす学生が受講している。本年度は前年度と比べ、出席率は芳しくなかったので来年度は出席を促す体制をとっていきたい。専門科目を受講している学生が必ずしも専門科目を必要とする自治体を志望しているとは限らないが、志が広がることを想定し、また就職した後の昇任試験においても役立つこともあり積極的に支援している。

3) 公務員受験のための模擬試験

本年度は昨年度に引き続き授業期間外に模試日を設けることにより、計画的に対面で実施することができた。

4) 令和 4 年度卒業生の公務員試験合格実績

公務員試験受験結果(実数 19 名、のべ 44 名)は下記のとおりであった。

国税専門官 1 名、大阪府庁 1 名、大阪市 1 名、堺市 1 名、高槻市 1 名、守口市 1 名、摂津市 1 名、羽曳野市 2 名、松原市 2 名、富田林市 2、岸和田市 1 名、大阪狭山市 1 名、奈良市 1 名、桜井市 2 名、宇陀市 2 名、東近江市 3 名、特別区 1 名、河南町 4 名、かつらぎ町 1 名、紀美野町 1 名、明和町 1 名、山添村 1 名、十津川村 1 名、上北山村 1 名、大阪府学校事務 5 名、岸和田市消防 1 名、自衛隊一般曹候補生 4 名。

(7) 必修化している資格取得支援

① 簿記能力検定 3 級 1 年生全員受験（必須）のための支援

7 月実施の全経簿記能力検定試験 3 級について、入学年度に全員受験（受験料は大学負担）を実施している。これまで資格試験等に挑戦したことがない学生たちに、成功体験をし、自信をつける機会にするために設けている。2022 年度は対面授業となったが、検定試験と

もに欠席する学生が多く、実受験者数全経簿記能力検定試験 3 級合格者は 133 名受検中 57 名（合格率：43%）であり、前年の実受験者数の合格率より若干上昇した。この全経簿記能力検定試験 3 級に合格したことで自信を持ち、2023 年度 2 月実施の全経簿記能力検定 2 級商業簿記は 28 名受検中 13 名合格（合格率 46%）であり、2 級工業簿記も 17 名受検中 10 名合格（合格率 59%）となり、昨年度より若干合格率が下がった。

② ビジネス実務マナー検定全員受験のための支援

3 年生夏学期オールインターンシップの就業体験の実施に向けた「インターンシップⅠ」の授業の一環として、授業内容の習得状況を確認するとともに、学生がビジネスマナーや社会人に必要な行動力、判断力、表現力を磨く為の知識習得を支援するために、平成 30（2018）年度より、受験料は大学負担として 3 年生全員に受験を課している。

2022 年度のビジネス実務マナー検定 3 級受験結果は、165 人受験し、105 名合格（合格率 64.1%、前年合格率：3 級 52%）あり、12.1 ポイント上昇した。授業内での重要事項の徹底復習と直前の検定対策の指導が功を奏したと考える。なお、2 級は、今回 6 名が受験（合格率：50%）した。

本年度は「ビジネス実務マナー検定試験」実施において多大なる貢献をしたとして公益財団法人実務技能検定協会より大学に感謝状が贈呈された。また、本学科の学生 1 名が「実務技能検定協会個人成績優秀賞」（2022 年度ビジネス実務マナー検定 3 級受験者 5,819 名、合格者 3,960 名の中から優秀賞は 15 名）を受賞することができた。

③ 成功体験を積む「ライセンスセミナー」

本学科では、将来のキャリア形成に役立つ資格取得を支援する科目として、ライセンスセミナー科目を設けている。単に知識の習得レベルを確認するだけでなく、合格することによって成功体験を積み、目標にチャレンジして達成する喜びを経験する機会としている。

(8) 企業との連携授業：「実学マネジメント論Ⅰ・Ⅱ」

実学マネジメント論は社会人のリアルを学ぶ本学部の特色ある授業のひとつである。本科目は、「働くとは」「仕事とは」「社会人になるために必要なことは」をテーマに、社会人講師の職業を通じた「職業理解」を促進するとともに、様々な業界について、第一線で活躍するビジネスパーソンや公務員から経験等に関する講義を受け、将来のキャリアを考え、職業適性を発見することを目的としている。

2022 年度は、対面授業とオンライン授業のハイブリッド方式で実施した。前半は、昨年同様、学科教員独自依頼による信販、自動車販売、生保、税務署、製造業、信金の 7 社・団体、後半は近畿経済産業局・経済産業省の講師派遣プラットフォームを活用、本学のインターンシップで連携している大阪労働協会の選定により、食品、建材、衣料、製紙、美容用品の中小企業 5 社による講義を実施した。本授業をきっかけにインターンシップも受け入れていただいたり、実際に採用いただいたこともある。学生からの授業感想は前向きな意見が多く、「知らなかった業界に興味が湧いた」「仕事の厳しさと楽しさが理解できた」「知識よりも情熱やポテンシャルが重要であるとわかった」など、好評であった。

(9) 海外インターンシップ

2017 年度より、毎年春休みに実施しているオーストラリア・シドニーでの経営学科海外インターンシップは、2020 年度、2021 年度はコロナにより中止となったが、2022 年度は、2023 年 2 月 9 日～3 月 11 日に実施することができた。特待生の支援については、コロナの影響により 2 年生と 3 年が対象となった。その結果、2 年生が 2 名、3 年生が 2 名の参加により、ホームステイをしながら、学校での日本語教師補助、飲食系企業などで 4 週間のインターンシップを行った。航空券や燃料費の高騰、円安などで参加費用が約 70 万円と高騰しており、特待性の 30 万円の補助を得ても、金銭的に参加できなかった学生が多く、来年度も同様に費用が高額になることが予想されることから、行き先や内容、期間について再検討することとしている。事前オンライン語学研修について、本年度は見送った。

(10) 低学年インターンシップ、就活支援

平成 27（2015）年度より始まった低学年からのインターンシップ体験イベント等がコロナ禍のため中止になっていたが、2022 年度は 3 年ぶりに再開した。大阪労働協会主催の 2 月合同企業説明会インターンシップに加え、本年度から始めた柏原羽曳野藤井寺消防組合 2day インターンシップ、藤井寺市観光課 1day インターンシップにも多くの学生たちが参加した。

(11) ビジネスプランコンテストと起業支援

平成 26（2014）年度から経営学科独自の取り組みとして、「IBU ビジネスプランコンテスト」を行っている。「出でよ！未来の起業家たち」をテーマに、新商品、新サービス、アプリケーション、公共サービスについての学生のビジネスプランを公募し、創造性を競うものである。授業で学んできたマーケティングや財務などの知識を実際に活用し、商品開発、ベンチャー創業、公共サービスについて知恵を絞って事業計画にまとめることで、起業家精神を涵養し、学生起業家、経営者、マーケターを育成、輩出することを狙いとしている。

第 9 回目となる今年度も、大学基礎演習での全員参加はじめ、関連科目等で学科を越えて全学年を対象にプランを公募したところ、グループや個人から約 150 プランの応募があった。書類選考の第一次予選、教員による第二次選考を通過した 11 プランについて、ブラッシュアップして、学科教員全員と関連科目非常勤教員 4 名が審査員となり、アイデアの独創性、学生らしさや社会性、市場性、発表完成度、プレゼンテーションスキルの観点から審査を行い、優勝、特別賞、準優勝、入選作品を選定した。創業を目指す学生、プロジェクトを行いたい学生やチームに関西ベンチャー学会所属の教員・非常勤講師・事業化コーディネーターが支援を行っている。

(12) 学生プロジェクト活動

学生主体の下記の地域連携活動のサポートを経営学部設置当初より継続的に行っている。

① 地域連携研究会 Glanz

経営学部 1 期生（2008 年）の有志学生たちから始まった地域との協働による研究会（Glanz）活動を学部横断的に発展させて組織化した学生主体の地域貢献活動を経営学部の教員で支

援している。毎週水曜の授業前の昼休み時間に行っていた定例打ち合せはコロナ禍となり、実施を見送ってきたが、少しずつ活動を再開し始めている。

②「こよみ手帳」の制作

地域情報誌として、商店街の紹介やお得情報カレンダー、世界文化遺産の古墳などの情報発信として、毎年発行している「こよみ手帳」が第 11 号の発行を迎えることができた。2022 年度は、コロナの影響が緩和され従来のような情報収集が再開できた。羽曳野市・藤井寺市の市役所や商工会、商店街等多くの方々からのご協力をいただき、例年どおり地域（羽曳野市・藤井寺市の市役所や商工会、商店街等）へ配布を行った。「こよみ手帳」の発行について、毎年、10 月下旬頃に住民の方から商店街の店舗に問い合わせがあったり、藤井寺市長から継続的な発行を応援いただいている。

③ 地域イベント・まちづくりボランティア支援

地域連携関連授業の履修生や、すでに履修した有志学生が中心となって、羽曳野市・藤井寺市などを中心に、役所や商工会、寺社、まちづくり NPO 等の実施する様々なまちづくり・まちおこし活動にボランティアスタッフとして参画している。現地に赴き、まちづくりや地域ビジネスを体験的に学ぶことで、地域に関心を持ち愛する心を涵養するとともに、将来の地域を牽引する若手リーダーの育成、輩出を狙いとするものである。令和 4 年度については、これまでコロナ禍により延期・中止となっていたイベントも次々と再開され、延べ 100 名以上のボランティア学生・卒業生・教員が、津堂城山古墳・ハレマチビヨリ、(3/27)、道明寺歴史まつり（5/3)、道明寺天満宮宮子屋（7/24、2/12)、世界遺産登録 3 周年記念イベント・シュラホール（7/17)、藤井寺ハロウィン「デラハロ」（3/27)、羽曳野市古墳 DE るるる（11/13)、藤井寺市民まつり（11/23）マルシェ de たいし（11/27）に企画、参加することができた。

④ 地域への SNS を通じた情報発信

学生が地域との交流や関わりを深め、収集した情報を発信するため、本学卒業生の勤務するメディア企業とも連携しながら、地域ブログ「オオサカジン・街ブラ企画藤井寺」、Facebook ページ「IBU 地域連携ニュース」、Instagram 「#fujiidelike」などでの学生の手による投稿、シェアを行なった。

⑤ 企業・地域との産官学連携

産学連携企業である、松原市に本社を置く米穀製販大手・食品メーカーである幸南食糧株式会社と昨年度締結した連携協定に基づき、地域の名物やお土産となる新商品「羽曳野かすおでん」の共同開発を進めてきた結果、レトルトパッケージ商品が完成し、1 月 7 日にイズミヤ古市店の協力を得て、販売会を行ない、来年度の本格販売および、地域のグルメなどの目指すとともに、羽曳野市のふるさと納税への採用などを目指していく。

羽曳野市役所前の大蔵印刷株式会社と、同社の運営する「河内こんだハニワの里 大蔵屋」とともに、本学園 100 周年記念事業の一環として、水無月祭での「はにわづくり体験」(6/26)、「古墳 de IBU」（8/28）のイベントを実施し、学部の域を超えて学生が運営に携わった。さらに、イオンモール藤井寺の実施する地域連携企画「古墳にコーフンツアー」への参加として「子供こふん縁日」への出展を行った。

また、藤井寺市が国の地域活性化助成金によって作成したデジタルパンフレット、小冊子

に本学学生６名がモデルとして撮影協力した。その他、大阪商工会議所が運営する「大阪企業家ミュージアム」との連携した企業家精神について学ぶ機会も設けている。

(13) 公務員自主勉強会

対面指導の再開により、下記のとおり、一人ひとりの学生に寄り添う指導が可能になった。

1 年生は、例年通り 4 年生の合格体験談を対面で直接聞く機会を設けることができ、将来の公務員試験へのモチベーションを高めることができた。

2 年生は、従来、警察や自治体の方々を招待しての 1 年生向公務員説明会の開催を恒例としていたが、コロナ禍により 2020 年度より開催できていない。準備段階で実際に公務員の方と触れ合い、学習のモチベーションを高めるとともに、先輩と後輩との人間関係作りという点からも有意義なイベントであるため、来年度以降の開催をめざす。

3 年生は、随時一般知能に関する質問を受け付けたり、課題管理を行ったり、ゼミ後の時間を使い自主勉強会を開催した。春休み期間においても毎週火曜日に全体の勉強会をゼミ担当教員全員でサポートし、春から始まる公務員試験に関する対策および出願・エントリーシート等の指導に加え、各ゼミ担当教員による一般知能等に関する少人数での個別勉強会も開催している。恒例としている 4 年生の合格体験談を今年は対面で直接聞く機会を設けることができ、公務員試験に向けてモチベーションを高めることができた。

4 年生は、担当教員と東京アカデミーが連携して、随時、個別の勉強会、面接練習、集団討論の練習、出願先の相談・日程把握など、学生一人ひとりに寄り添う手厚い指導を行うとともに、夏休み・春休みの長期休暇期間にも、毎週 1 回、全体での勉強会を開くことによって、昨年度よりも多くの合格者を輩出することができた。

以上

看護学部 看護学科

１．はじめに

看護学部は、教育理念に基づき、①豊かな教養と高い倫理観を醸成すること、②自ら考え、課題を発見し、解決の方法を見出し、行動できる主体性と創造性を涵養すること、③看護の本質を熟考し続け、どんな状況であっても最善の看護を提供できる実践力を身に着けることを目的としたディプロマ・ポリシーあげ、卒業時に修得すべき能力を学生が 4 年間でバランスよく修得できるようにカリキュラム編成に努めている。特に看護学部の開設時より看護学部のカリキュラム・ポリシーにあげている教育方法として、アクティブ・ラーニングの有力な教育形態の一つであるシミュレーション教育に関する長期目標「教養と専門性を高め、それらをもとに自ら課題を発見し、その解決に向けて探究できる学生を育成することを目的に、四天王寺大学看護学部におけるシミュレーション教育法の確立を行う。」を中心に取り組んできた。

これらの取り組みを実現するために、教員自らアクティブ・ラーニングの教授法を修得し、学習環境を整え、学習目標を設定し、課題発見と問題解決に向けて探究できる学生を育成することを目標にコロナ禍での感染拡大に努め、計画・実践した内容について報告する。

２．授業相互参観について

2022（令和 4）年度、冬学期は以下のとおり相互授業参観の実施科目の公開授業一覧表を作成した。

月日	曜日	時限	公開授業科目名	教室	遠隔あり（〇）	合評会（実施時期）
11月8日	火	3,4	看護政策論	6-354		
11月8日	火	1	精神健康と生活支援	6-253	〇	
11月21日	月	1.2	在宅療養生活支援技術演習	6-106		
11月7日	月	3	災害看護支援論	6-351		
11月10日	木	3	フィジカルアセスメント	実習室1,2		
11月25日	金	2	成育生活支援論	9-121	×	
11月18日	金	2	成育生活支援論	9-121	×	
11月28日	月	4	健康教育論	6-351	必要時	

３．学科独自の取り組みについて

1）教員の教育力・研究力向上のサポート

教員の研究力向上および科研費獲得に向けて、「外部資金獲得の方法，教育と研究の両立」のテーマにて講演会を開催した。外部資金の獲得に向けての自分の準備，進め方について各領域から一人（基礎・災害，成人，精神，母性，小児，老人，在宅，公衆衛生） 8 領域，1 領域 10 分で話をしてもらった。科研費は、全ての分野にわたり、基礎から応用までのあらゆる研究者の自由な発想に基づく研究『学術研究』を発展させることを目的とする競争的研究

資金であり、審査を経て独創的・先駆的な研究に対する助成を行うものであり、科研費の採択は研究計画やキャリアに大きな影響を与える。講演会は科研費獲得者の貴重な機会になったといえる。

2）大学基礎演習

1.リテラシー教育の強化のための取り組み

1）教科書の検討

2021 年度までは「ゼミで学ぶスタディスキル」というアカデミックな良書を教科書として利用していたが、学生の活用は芳しくなかった。さらに、入学年度に沿って学生の文章力が低下する現状から日本語や文章作成のリテラシー教育の強化の必要性を感じていた。そこで、教科書を「これならできる！レポート・論文のまとめ方」という書籍へ変更を図った。教科書選定には初年次教育やリテラシー教育に使用されている書籍を検索し、内容を吟味した結果、文章作成に特化し、図式やイラストが掲載され、内容がシンプルで文量の多くない書籍として選定した。

2）ワークシートの工夫

本授業では個人の課題に対するレポート作成を課した。その際に①レポート課題の絞り込み、②レポート作成のためのアウトライン作成、③文献検索、④文献要約について、学生が作成できるように、それぞれのプロセスのワークシートを教科書にもとづいて作成し活用した。

2.自己教育力の促進

1）詳細な授業計画の提示

学生が本科目の全体像と本科目の全体像から、何を学ぶのか何を行うのかを理解したうえで授業に参加できるように、初回授業で詳細な授業計画を提示し説明を行った。授業計画には、全 15 回の授業ごとの①概要、②講義形式、③キーワード、④一般学修目標、⑤個別行動目標、⑥持参課題、⑦事後課題、⑧評価ルーブリックを掲載した。

2）ルーブリックの導入

今年度より本格的なルーブリックの導入を行った。ルーブリックは教育者が学習者に教育の意図を示すことができるとともに、学習者がパフォーマンスレベルで何を学ぶのかを理解することが期待できるとされている。さらに、学修到達度を自分自身で評価することで、自己の学習課題を明確にすることができる。今回、看護学部のディプロママポリシーと授業目標をもとに、①文章要約ルーブリック、②文章作成ルーブリック、③グループワークルーブリック、④プレゼンテーションルーブリック、⑤レポートルーブリック、の 5 種類ルーブリックを作成した。このルーブリックはそれぞれ 5 項目 4 段階の評価基準で評価できるようにした。学生は授業ごとに、指定されたルーブリックで自己評価をするとともに教員も同じルーブリックを使用して評価できるようにした。例えば、授業方法がグループワークの場合は③グループワークルーブリックで評価できるよう指導した。ルーブリックは印刷した紙媒体を配布したが、実際の評価の際に学生が入力しやすく、教員も入力状況を確認できるように Google forms で運用した。

3.チームで働くことの序章

今年度は初年次教育として他者との協働作業の実際を体験学習するために、2022 年度からグループワークを本格的に実施した。対象学生は高校時代も COVID-19 の制限がありグループワークなどの経験が少ない状況であったことから、グループワークの前にチームビルディングゲームなどを実施して、他者と共に活動する楽しさから、学ぶ楽しさへの発見に繋がるように工夫をした。

4.モチベーション向上への取り組み

グループワークでは、健康もしくは看護に関連する課題に対し情報収集しプレゼンテーションを行うことを最終目的とした。そこで、グループワークのモチベーションを向上させ、チームの凝集性を高めるため、プレゼンテーション賞を創設した。プレゼンテーション賞は学生による投票によって２グループが受賞し、看護棟にその受賞を掲示した。

3）シミュレーション教育法の発展

シミュレーション教育推進委員会を中心に、学部全体でシミュレーション教育を導入し推進していくため、教員間の情報交換会、各領域におけるシミュレーション教育内容の情報収集・集約を行った。教育に関する教員間の情報交換会では、今年度のシミュレーション教育マトリクス表から各領域や各教員におけるシミュ レーション教育の捉え方が異なっていることがわかった。そのため共通認識できる枠組みの作成を進めること、学生の事前学習の充実を図り効果的なシミュレーション教育に繋げるために IBU.net の小テスト機能の活用などアクティブ・ラーニングの導入を検討する必要がある。また、教員の人材不足による機器トラブル対応やシミュレーションセンター専従のスタッフの常駐により学生の学習環境が整うと考える。

次年度は、現行のシミュレーション教育の内容をブラッシ ュアップしながら、各領域におけるシミュレーション教育を充実させるとともに領域横断的に取り組んでいき、学生のコンピテンシーの育成を目指した効果的な学習方法の発展に努めていく必要がある。

4）看護実践開発研究センタープログラム実施

四天王寺大学看護学部看護実践開発研究センターは、大学院修了者の実践能力・研究能力を育成し、また現職で活躍する看護職の現任教育を行い、キャリア開発を支援する場である。さらに地域との連携を行いながら人々の健康や病気からの回復を促すための人材育成や研究能力育成を行う。

看護学部が有する看護実践開発研究センターでは、看護実践開発研究センタープログラムが始まり今年で 4 年目となる。令和４年度は令和３年度 219 万円の収益金を学部教員および大学院生を対象とした研究助成金の規定等を含む組織化を図りつつ研究助成者の決定・助成を行った。60 万円の助成金額に対し 28 万円と申請額は達しなかったが、今後は研究 1 件あたりの金額を増やしながら研究助成金を活用していく。令和 5 年度は令和 4 年度の収益金 165 万円の中から 60 万円を研究助成金にあてる予定である。

また複数の研修会を実施し、令和４年度も現場の看護職および大学院修了者の実践能力・研究能力向上のために次のようなプログラムを実施した。

①慢性疾患患者のセルフケア能力の改善を目的とした直接的な看護介入に関連した知識・技法の習得

②重複疾患、問題行動を繰り返し、入退院を繰り返す対応困難患者への PAS セルフケアセラピィ(PAS-SCT)介入技法の習得

③セルフケアプログラムと PAS-SCT 介入を、介入型事例報告・事例研究としてまとめる知識と技法の習得
④在宅看護における看取り教育と在宅ケア・保健指導に活かすコーチングの技法習得
⑤コロナ禍における新人看護師の教育方法の習得を目的とし、コースは、A：欲動展開に基づく最新セルフケアプログラム、B:対応困難患者へのケース・フォーミュレーションと PAS-SCT 介入技法、C：現場に必要な実践研究能力の育成～事例報告から事例研究の展開～、D：在宅看取りにおけるグリーフケア、E：在宅ケア・保健指導に活かすコーチング～対象の意欲を高め主体的健康行動を促す技術～、F：コロナ禍での看護基礎教育の現状から見える新人看護師の課題と対策、G：組織変動における間 G 管理者のリーダーシップ支援のための支持的サポートプログラムであった。

A～C コースにおいては 30 名の定員に対し 56 名の参加、DEF コースは参加者が少なかったため中止とし、G コースは 10 名の定員に対し 7 名の参加となっており、コースによって参加者が異なるが 90%の充足率となった。さらに新型コロナ感染症拡大下・災害時の看護職のメンタルヘルス介入プログラムを 5 回実施予定であるが 3 回を終了し、合計 78 名がコロナ禍・災害後の看護職のうつ/PTSR 悪化予防介入プログラムへ参加しセルフケア看護介入技術、危機時における個人と組織への介入技術を修得している。今回オンラインでの実施のため看護職には、参加しやすくオンライントラブルも少なく 3 月 18 日で終了となる。

2022（令和 4）年度の活動状況は以下のとおりである。

会議	開催日	時間	実施内容と実施者
第 1 回	外部資金獲得の方法，教育と研究の両立	6 月 27 日月曜日 16:30-18:00 （ハイブリッド開催）	・外部資金の獲得に向けての自分の準備，進め方について各領域から一人（基礎・災害，成人，精神，母性，小児，老人，在宅，公衆衛生） 8 領域，1 領域 10 分で話をしてもらった。
第 2 回	授業参観	＊授業参観実施者の予定 ＊教授優先で実施	2021 年度：基礎・災害 2022 年度：精神：7/27，1-2 限，3 名の先生が参加。 2023 年度：成人 2024 年度：母性 2025 年度：小児 2026 年度：老人 2027 年度：在宅 2028 年度：公衆衛生 今年度は 3 名の教員の参加があり内容が学生に難しいのではないか、し

			かし学生はよく参加していたことがコメントとして得られた。
会議	開催日	時間	実施内容と実施者
第3回	依存的な学生への教育的アプローチ	8月22日月曜日 16:30-18:00 オンライン	・自分で自律的に学習しようとしない学生に対する対応の方法，授業における工夫，日常の指導方法について各領域から一人，1 領域 10 分で話題提供をしていただいた。
第4回	自立的な学生を育てるための実習指導の展開	9月26日月曜日 16:30-18::00 オンライン	・実習を前に自立的な学生を育てるための授業，実習の展開方法について各領域から一人，1 領域 10 分で話をしてもらった。 学生のやれていることを認めながら関心を高め実習にとりくむ力の強化方法についての検討を行った。

４．評価と課題

1）文部科学省研究費の申請書において、倫理的配慮を含め工夫した点や留意事項等の実際を教員相互で学び合い、情報共有を図る機会となった。今後も採択率の向上と若手教員の自己効力感の推進力につながるよう継続していく必要がある。

2）大学基礎演習においては、今年度より本格的なルーブリックの導入を行い、教育者が学習者に教育の意図を示すことができるとともに、学習者がパフォーマンスレベルで何を学ぶのかを理解すること、学修到達度を自分自身で評価することで、自己の学習課題を明確にすることができた。学生のポートフォリオを適切に評価できる・学生と教員が目標を共有できることから今後も継続・発展させていく必要がある。

3）学生のコンピテンシーの育成を目指した効果的な学修方法の発展のために、シミュレーション教育を中心に思考し判断し行動する一連のプロセスを体験的に学ぶことができた。今後もシミュレーション教育推進委員会と連携しながら、知識や理論を知るレベルから学生が自ら課題を発見し、考え課題解決に向けて行動できるレベルへの達成を目指すシミュレーション教育の充実が必要である。

短期大学部 保育科

１．はじめに

新型コロナウイルス感染症の拡大が少し収まりつつある状況の中、2022 年度は、全ての授業を対面で実施することができるようになり、当学科でもかねてより進めてきた「保育実践演習」を中心に、科目間連携、教員間連携を図りながら、「質の高い保育者の育成」を目指す教育・研究活動を進めることができた。

以下、今年度の保育科の教育活動に関する FD 活動の結果として報告する。

２．「保育実践演習」について

(1) 概要とシラバス

「保育実践演習」は、短期大学部保育科の初年次教育の授業にあたる「保育実践演習Ⅰ」を含む、「保育実践演習 II」「保育実践演習 III」「保育実践演習 IV」と 2 年間に渡って続く授業である。異学年集団での学びあいも含み、保育科の核となる授業でもある。この授業は毎年の授業アンケートや学生のワークシートを参考に教員間で毎年評価を行い、次年度の計画及びシラバスを作成している。今年度の「保育実践演習」の概要及びシラバスは以下のとおりである。

受講者数　　1 年生（保育実践演習ⅠおよびⅡ受講者）　79 名
　　2 年生（保育実践演習ⅢおよびⅣ受講者）　79 名
担当教員　　保育科専任教員 11 名
基礎グループ　A～H の 8 グループ（1 グループあたり 1，2 年生合わせて約 20 名）
使用教室　　講堂 701 教室（メイン教室），講堂 702 教室及び 703 教室
　　音楽棟 多目的室 2 部屋及びリズム室，図工室，サブアリーナ, 小体育館

シラバス　表 1 及び表 2 参照

表１　令和 4 年度夏学期「保育実践演習Ⅰ・Ⅲ」シラバス

回	日程	１年：保育実践演習Ⅰ	２年：保育実践演習 III
1	4 月 6 日	基礎グループ発表・オンライン授業について（授業としてカウント）	–
2	4 月 11 日	オリエンテーション・自己紹介・名札づくりについて	オリエンテーション・自己紹介（春のレクリエーション大会実行委員の募集）
3	4 月 18 日	幼稚園長講演「幼稚園教諭という仕事」	講演「社会人になるにあたって」
4	4 月 25 日	保育の学びに出会う（先輩から実習体験・名札作りを学ぶ）	実習体験を語る：学外実習への心構えや名札作成について後輩に伝える
5	5 月 2 日	名札をつけて子どもに向けて自己紹介をする（自分を知る）	実習での自己紹介についてアドバイスし、1 年生の自己紹介を聞く

6	5 月 9 日	春のレクリエーション大会	春のレクリエーション大会
7	5 月 16 日	休講	模擬保育の準備
8	5 月 23 日	模擬保育への参加（１）	模擬保育の実践（１）
9	5 月 30 日	模擬保育への参加（２）と幼稚園半日体験オリエンテーション	模擬保育の実践（２）と総括的振り返り
10	6 月 6 日	保育に出会う（幼稚園半日体験）①	教育実習
11	6 月 13 日	保育に出会う（幼稚園半日体験）②	教育実習
12	6 月 20 日	観劇	観劇
13	6 月 27 日	幼稚園半日体験の振り返り・人形劇/ペープサート/楽器演奏などの基礎を学ぶ	出前保育のダンスを作る（2 グループ合同で）
14	7 月 4 日	出前保育ビデオ鑑賞・演目研究と役割分担・2 年生からダンスを教わる	1 年生にダンスを教える
15	7 月 11 日	演目練習	講演「保育所の仕事」（保育所所長から学ぶ）
	7 月 25 日	まとめ「子ども・保育と出会う」について	まとめ「子ども・保育にかかわる」について

表２　令和４年度冬学期「保育実践演習Ⅱ・Ⅳ」シラバス

回	日程	２年：保育・教職実践演習（幼稚園）	２年：保育実践演習ＩＶ	１年：保育実践演習ＩＩ
1	9 月 20 日	オリエンテーション（1，2 時限併せて）	保育探究演習報告会準備①	オリエンテーション
2	9 月 27 日	子育て支援体験準備①	卒業生の講演	卒業生の講演
3	10 月 4 日	子育て支援体験準備②	子育て支援体験準備③	出前保育練習①
4	10 月 11 日	子育て支援体験①（ウラで探究演習報告会準備）	子育て支援体験①（ウラで探究演習報告会準備）	出前保育練習②
5	10 月 18 日	子育て支援体験②（ウラで探究演習報告会準備）	子育て支援体験②（ウラで探究演習報告会準備）	（教育実習Ｉ）
6	10 月 25 日	子育て支援体験反省会	子育て支援体験反省会	（教育実習Ｉ）
7	11 月 1 日	保育探究演習報告会準備②	保育探究演習報告会準備③	出前保育練習③
8	11 月 8 日	保育探究演習報告会（実習補講として 1 年生も参加）	冬の運動会の準備①	出前保育練習④
9	11 月 15 日	冬の運動会の準備②	冬の運動会の準備③	出前保育練習⑤

10	11月22日	冬の運動会の準備④	出前保育のリハーサルに参加	出前保育のリハーサル
11	12月6日	冬の運動会の準備⑤	冬の運動会の準備⑥	地域に出る：出前保育
12	12月13日	冬の運動会のリハーサル	冬の運動会	冬の運動会
13	12月20日	講演「社会人になるにあたって」/運動会の反省	運動会の反省を後輩に伝える/施設実習について後輩に伝える	施設実習について先輩から聞く
14	1月10日	休講	休講	施設長講演「施設実習で学んでほしいこと」
15	1月17日	保育科卒園式リハーサル―行事運営を学ぶ―	保育科卒園式	卒園式参加（全員）
	1月24日	最終レポート―まとめ：２年間で培った保育実践力について―	まとめ：２年間で培った保育実践力について振り返る	まとめ「子ども・保育を知る」について:保育科で学んだもの

(2)地域の幼稚園・保育所などとの連携

今年度も、新型コロナウイルス感染症対策を十分に行い、夏学期の幼稚園見学活動を6月6日（月）と6月13（月）の両日（午前・午後）に、四天王寺悲田院こども園と白鳩羽曳野幼稚園の2か所において実施できた。冬学期には、地域の幼稚園・保育所での出前保育活動及び、地域子育て支援センターでの子育て支援体験活動も行うことができた。

① 出前保育（1年冬学期：12/6）

・学校法人久宝文化学院 白鳩羽曳野幼稚園
・社会福祉法人誉田福祉会　誉田保育園
・学校法人志紀学園 志紀学園幼稚園
・社会福祉法人羽曳野市社会福祉協議会 ベビーハウス社協

コロナの状況を鑑み、出前保育に出向くのは、昨年度と同様、演技を行う1チームのみとした。園側の配慮もあり、参加する幼児も年長クラスを中心に少人数に絞っていただいたため、交流する機会を設けることができなかった。

② 子育て支援体験（2年冬学期：10/11, 10/18）

・羽衣子育て支援センター（高石市）10/11
・柏原市つどいの広場「ほっとステーション」（柏原市）10/11, 11/18
・富田林市第1幼児教育センター（富田林市）10/11
・富田林市第2幼児教育センター（富田林市）10/11, 10/18
・南海愛児園子育て支援センター（高石市）10/11, 11/18
・ひかり保育園（藤井寺市）10/11, 10/18
・藤井寺カンガルー教室（藤井寺市）10/11, 11/18
・東羽衣子育て支援センター（高石市）10/18

事前にそれぞれの子育て支援先での参加する上での配慮すべき事項などを全員で共有した。また、事後の反省会での発表は2年生のみでの開催とした。

(3)外部講師による講演

今年度は以下の方々に外部講師としてご講演をいただいた。

① 卒業生の講演（1年・2年冬学期）

・池口　紗弥香先生　五條市立葛城保育所　保育士

・山本　葵先生　はるな幼稚園　教諭

② 幼稚園園長の講演（1年夏学期）

・山本　樹宣子先生　元藤井寺市立幼稚園　園長

③ 保育所所長の講演（2年夏学期）

・井上　斉美先生　社会福祉法人昇人会　ももの木保育園　園長

・羽野　瑞希先生（本学保育科卒業生）

④ 社会人になるにあたっての講演（2年冬学期）

・小里 樹実氏　本学入試・広報課職員（本学保育科卒業生）

⑤ 児童養護施設に関する講演（1年冬学期）

・中條 薫先生　社会福祉法人 児童養護施設　羽曳野荘　理事長・施設長

⑥ 保育科卒園式への学外来賓者（１・2年冬学期）

・松本 千幸先生　社会福祉法人福文会 松の実保育園 園長 及び本学非常勤講師

・荒木　環先生　社会福祉法人粉浜福祉会業務執行理事　及び本学非常勤講師

・岸和田かおり先生　社会福祉法人羽曳野市社会福祉協議会　ベビーハウス社協前園長
及び本学非常勤講師

(4)科目間連携と実施時期

当学科では、「保育実践演習」と他の数科目間で科目間連携を行い、成果をあげていた。今年度に実施できたものを以下に記す。

① 「保育実践演習Ⅳ」と 「保育・教職実践演習（幼稚園）」（2年冬学期）

文部科学省指定科目「保育・教職実践演習（幼稚園）」と当科独自の科目である「保育実践演習Ⅳ」を連携させている。教育効果を上げることをねらって、両科目を時間割上連続して開講している。そのため、「保育・教職実践演習（幼稚園）」の授業内容として必要な、個人の教職に関する知識や技術についての課題の克服（出前保育での 1 年生へのアドバイス，行事経験を通しての役割分担等）、地域の保育現場及び子育て支援現場での実践的な活動を含み、2年間の学びのまとめとなる授業内容で構成している。

② 「保育実践演習Ⅳ」と「保育内容・表現（総合）」（2年冬学期）

昨年度同様、「保育内容・表現（総合）」（2年生対象授業）と連携し、「保育実践演習Ⅱ・Ⅳ」の中で『保育科卒園式』を実施した。『保育科卒園式』は、保育施設における卒園式を「表現の場」と捉え自分たちの卒園式を自分たち自身で作り上げることで、そこでの保育者、子どもたち双方の表現を学ぶことを目的に2014年から取り組んでいる活動である。

昨年度はコロナ感染予防のため、1年生全員はオンラインでの参加であったが、今年度は

1 年生も対面で参加し「保育実践演習」の授業内で行うことができた。今後も卒園式を「保育実践演習」と「保育内容・表現（総合)」の科目間連携を以って、保育科全員参加のもと実施する予定である。

③ その他

従来から行っている科目間連携として、1 年生の出前保育の練習の期間は、「保育実践演習Ⅱ」と「小児体育 II」及び「音楽 IV」と連携し、学生の表現力がよりいっそう習得できるよう授業内容を配慮している。

３．授業相互参観について

本年度の各教員の授業相互参観のための公開授業担当科目は以下のとおりである。

整理番号	所属	担当教員	月日	曜日	時限	公開授業科目名	教室	遠隔あり(○)	合評会(実施時期)
1	保育	原　祐子	11月21日	月	1	表現（総合）	サブアリーナ		11月21日3限
2	保育	奥野　孝昭	12月13日	火	4	小児体育Ⅱ	小体育館		公開授業終了後
3	保育	東　隆史	12月7日	水	1	プログラミング	4-158		公開授業終了後
4	保育	伊達　由実	11月21日	月	1	表現（総合）	サブアリーナ		11月21日3限
5	保育	韓　在熙	12月12日	月	5	教育原理	2-311		公開授業終了後
6	保育	梅野　和人	11月24日	木	1	子育て支援	6-211		公開授業終了後
7	保育	奥　千恵子	11月18日	金	1	音楽理論	6-251		公開授業終了後
8	保育	吉田　郁	11月21日	月	1	表現（総合）	サブアリーナ		11月21日3限
9	保育	明石　英子	12月15日	木	3	保育内容　人間関係	6-252（保育実習室）		公開授業終了後
10	保育	内本　久美	11月21日	月	1	表現（総合）	サブアリーナ		11月21日3限
11	保育	齋藤　奈都美	11月18日	金	1	音楽理論	8-210		公開授業終了後

４．学科独自の取組について

(1) 公立受験対策勉強会の実施と「社会福祉特別講義Ⅰ」への保育科学生の受講

公立受験希望者への指導は、当初はオンライン（ZOOM）やメールでの指導を行うとともに、受講希望者に対面での面接や実技等の試験対策指導を行った。保育科教員全員が其々の専門性を生かし、受験内容に応じて個人指導を行った。また、公立希望者同士の学び合いの場として、集団討議・グループワークなどを集団で行った。そのことにより、自分の良さに気付き、他学生の姿に触れ、学びが深まったように思われる。

数学分野については、教育学部の原田三朗先生の「算数」の授業 15 回を実質的に公立受験対策の指導に充てていただいた。

その結果、今年度は、大阪市（2 名)、羽曳野市、藤井寺市（２名)、富田林市、河南町、香芝市、葛城市、名張市の８つの地域において 10 名(実質 8 名)の合格者を出すことができた。

さらに、今年度も１年生への公立受験対策として、人間福祉学科健康福祉専攻が東京アカデミーと協働して開講している夏学期の集中講義「社会福祉特別講義 I」（石田晋司先生担当）を引き続き保育科の１年次生も受講できる形にしていただき、合同開講にしていただくこととした。１年次から将来の保育者としての自分の姿を意識することで、卒業までの学びに向き合う姿勢が大きく変わったと思われる。

(2) 高大連携事業の実施

昨年度に引き続き、奈良県立桜井高校普通科保育コースとの高大連携授業は、今年度は6月、11月の2回の実施となった。6月は「保育内容総論」の授業を行い、押し花、花の絵本やペープサートなどを体験し、保育は系統性をもった総合保育であることを体験できるようにした。

11月は、「子どもの世界を覗いてみよう！」という授業題目で実施した。保育科1，2年生の桜井高校卒業生3名が参加し、高校生と共にジェスチャーゲームを楽しんだあと、教員からゲーム遊びとつなげて「子どもの内面を理解することの大切さと保育者の専門性」について話した。そして、授業後半に卒業生一人ひとりから実習で関わった子どもとのエピソードや自身の専門的な学びについて話し、保育の魅力を後輩たちに伝えた。桜井高校の卒業生が高大連携事業の連携授業に参加した意義は大きく、桜井高校からも高い評価を得ることができたと考える。

今後も保育科で学んだ学生が母校でその学びを活かし、またそれが高校生にとっても有意義でさらに保育科への志が高まるような高大連携授業を、対象高校を拡大し行っていく予定である。

(3) ルーブリック評価導入への具体的検討（造形）

「図画工作ⅠⅡ」　「保育内容・表現」ともに対面で授業を行った。しかし2年生はコロナの影響で、実習の延期が相次ぎ、対面で授業に出られなかった分を課題にして後から提出する学生も多かった。

正確で、公平な成績評価が、学生の学習意欲を増すと考える。授業の単元ごとにどこに観点を置いて評価するのかを明確に伝えて、作り始めることを大切にした。授業の課題作品は昨年同様に自身で写真を取り IBU net の学習成果可視化「造形ポートフォリオ」にコメント、日時とともにアップした。そして、ほぼ100%の学生が活用することができた。

授業の回数とともに積み重なってたまっていく作品の写真を見ることで教員も学生もその学びを可視化でき、評価が適正であると納得できたように思う。

伝える評価の観点をより分かりやすく伝えられるように今後も努力したい。

(4) 2年生「保育探究演習」授業と「学びの発表会」の実施

2年生（3セメスター）開講の「保育探究演習」は、卒業必修科目として、学生が6つの保育テーマ（「多文化保育」「野外活動」「音楽アンサンブル」「造形アート」「子どもの自然科学」「特別支援保育」）から1つを選択し、そのテーマに基づいて保育を自らの興味や関心に沿って深めることを目的とし、また、学生が主体的・協働的に学ぶことを通して質の高い保育の専門性を育むことを目標として2020年に設定した保育科独自の科目である。

「保育探究演習」の授業方法の特徴をまとめると、①学外での学びを取り入れ、より実践的に保育を学ぶことができるようにすること、②15回の開講を時間割上設定しているが、その時間割にこだわらず柔軟に開講時間を設定することで、学外での学びの成果が高まるようにすること、③学生の自主的な学びが行われるよう、外部講師の講演を取り入れたり、少人数グループでより実践的に深く学ぶ内容を予習したり、学外の学びの現場においても

保育者などの具体的な話を聞きながら学ぶことができるにすること、④夏学期の「保育探究演習」のテーマごとに学んだ内容を報告する発表会を「保育実践演習」（Ⅱ・Ⅳ）授業において開催し、2 年生全員で学びを共有するとともに、1 年生にその学びの成果と自主的に学ぶことの楽しさや保育・幼児教育のよさを伝えることができるようにすることである。

特に、保育探究演習（多文化保育）において、今年度の受講生（12 名）は、韓国新丘大学の保育科学生とのオンライン交流活動を計画・準備し、10 月 11 日に交流活動を行った。

日韓の学生たちは、お互いの言語での挨拶や自己紹介、両国の保育文化の手遊びや歌、お互いの伝統文化の紹介、さらには保育における共通課題について質問し合いながら両国の保育情報を得る等、多くの学びと感動のある交流となった。言葉の違いを超えて、お互いが学び合い、笑顔があふれる楽しい活動であったが、特に、活動終了後の参加学生の感想には、

「多文化保育の授業を通して、たくさんの異文化について学ぶことができた。韓国の保育学生さんとも交流することができ、とても楽しかった。」、「多文化保育の授業を受けて様々な国の保育の支援について学ぶことができた。また、韓国の学生の方と交流するために、韓国語を勉強し、準備をしてとても貴重な時間になった。」、「多文化の授業を通して異文化について考えることができ、様々な文化を大切にする保育について学ぶことができた。韓国の学生との交流も初めての体験ですごく楽しかった！」等、学生自らの多文化体験を通してお互いを配慮・尊重することの大切さや文化の多様性について気付いた内容が多く書かれていた。このような経験は、将来の保育現場において、多様な文化を背景にもつ子どもや保護者とのかかわりにおいて生かせる保育者の専門性としての学びとなっていると考える。

また、「保育探究演習」授業で学んだことを「学びの発表会」を通してみんなと共有することで、学生が自らの学びを振り返り、その意義や重要性、さらなる課題を再確認することは、文部科学省が提示している教職実践演習の内容とも合致していると考える。

５．まとめにかえて

2020 年当初から 3 年にわたる新型コロナウイルス感染拡大危機の中にあっても、当学科の「保育実践演習」授業はぶれることなく、許される限りの授業形態を模索しながら、教育の質を落とさないようにと粛々と取り組んでいる。その結果、従前通りとはいかないまでも、本授業のねらいである慈愛に満ちた保育者の資質として必要な能力、すなわち学生個々の知識・技術習得を通しての専門性、協働的な学びを通しての社会性や豊かな人間性を培うことができていると自負している。

今後は、令和 5 年 1 月 27 日厚生科学審議会感染症部会での決定を受けて令和 5 年 5 月 8 日からは新型コロナウイルス感染症が第 5 類感染症の位置付けとなったことを踏まえ、保育現場や地域と連携した学修活動を通して、学生の自主的・主体的な学びをより深め、慈愛に満ちた保育者に育ちあうような経験ができる本学保育科の「保育実践演習」としての在り方を、改めて追求していきたい。

短期大学部 ライフデザイン学科

１．はじめに

令和４年度になって学科名がライフデザイン学科に変更になった。それに伴いライフデザイン学科の特徴である８つのフィールドについても見直しがなされ、「ビジネス・ＩＣＴ」「医療事務」「フード」「ファッション」「インテリア」「グローバルカルチャー」「トータルビューティ」「ブライダル」に改編された。

また、ジェネラリストとスペシャリストという２語をキーワードに、従来のライフデザイン・ゼミナールⅠとⅡを再編した。８つのフィールドについて専門的な知識を持つスペシャリストに対して、８つのフィールドを関連させてより広い視野から俯瞰できる能力を持つジェネラリストの育成を目指す。そのために、ライフデザイン・ゼミナールⅠではライフデザイン学科の２年間の学びを理解することを授業目標とし、ライフデザイン・ゼミナールⅡ では自分に合ったライフプランを描けるようになることを授業目標とする。またジェネラリストについては、１つのフィールドに拘らずに学びの視野を広げて物事に対処できる能力を育成するために、ライフデザイン実践演習を開講した。

これまでの３年間は新型コロナウイルス感染症拡大により、授業を実施するにあたり様々な制限を受けてきた。特にライフデザイン学科は実習系の授業が多いため、デメリットが大きかった。令和５年度に入り、原則対面で授業を実施できるようになるので、学生が満足できるような授業が、今後ますます求められている。

２．初年次教育科目（ライフデザイン・ゼミナールⅠ・Ⅱ）について

学科名がライフデザイン学科に変更されるのに合わせて、初年次教育科目の内容についても見直しが行われた。これまではライフデザイン・ゼミナールⅠ・Ⅱにおいて、初年次教育とキャリア教育を同時に並行して行ってきたが、令和４年度からはキャリア教育を独立させて、１セメスター時での「キャリアデザイニング」、２セメスター時での「ライフデザイン・ゼミナール Ⅱ」で自己理解を深め、ライフプランとキャリアプランの描き方を学べる内容とした。それによって３月から始まる就職活動を円滑に進めていけるように配慮している。具体的には、応募書類の作成や採用面接試験、企業研究の仕方、就職活動時に必要なビジネスマナーなどである。ライフデザイン・ゼミナールⅡの１回目の授業と最終回の授業で行った自己評価アンケートの結果を表１に示す。特に大きく変化した項目は無いが、19 番目の「履歴書で自己 PR や志望動機を表現できる」が 0.7 ポイント上昇しており、履歴書の書き方に少し自信を持てるようになったことがうかがわれる。また７番目と８番目の自分の強みについての質問項目も 0.6 ポイント上がっており、自分自身の自信へと繋がっているようだ。

一方のライフデザイン・ゼミナールⅠについては、ライフデザイン学科の２年間の学びやライフプランについて理解できるような内容とした。具体的には各フィールにおける過去の学習例や、人の一生がどのように描けるか、といった内容である。これらを通して２セメスター時に新しく開講する選択科目の「ライフデザイン実践演習」へ繋げ、学びの視野を広げてジェネラリストとしての力を育めるようにした。

表１．ゼミナールII授業前後でのアンケート結果（5段階評価の平均値）

質問項目	自己評価	
	9月	1月
1.自分から挨拶ができる	4.0	4.2
2.正しい敬語を使うことができる	3.4	3.7
3.進路決定活動（就職・進学）に適した身なり、立ち振る舞いができる	3.3	3.6
4.社会で必要なビジネスマナーを理解している	3.2	3.7
5.人前で、話したいことをわかりやすく伝えることができる	2.5	2.8
6.人の話を聞き、それに対して自分の意見を伝えることができる	3.1	3.4
7.自分の強みを理解しており、答えることができる	2.8	3.4
8.強みを発揮した出来事や事例（エピソード）を挙げることができる	2.8	3.4
9.自分の弱みを理解しており、答えることができる	3.5	3.8
10.短大生活で力を入れて取り組んでいることがある	3.4	3.6
11.目標を設定し、計画を立てることができる	3.4	3.7
12.社会に興味を持ち、情報を得ることができる	3.3	3.5
13.卒業後の自分の姿がイメージできる	2.4	2.5
14.現在、考えている卒業後の進路がある	3.3	3.6
15.仕事について興味をもち、情報を得ている	3.2	3.4
16.就職活動の流れが理解できている	2.9	3.4
17.気になる企業や職業について調べることができる	3.6	3.7
18.履歴書の目的や位置づけを理解している	3.1	3.5
19.履歴書で自己PRや志望動機を表現できる	2.6	3.3
20.就職の面接試験で、採用担当者からの質問の意図を理解し、受け答えができる	2.8	3.0
21.思うように行かなくても、行動し続ける覚悟がある	3.4	3.6
22.卒業後の進路に迷ったとき、誰に相談すればよいのか分かっている	3.7	4.0

３．授業相互参観について

ライフデザイン学科では、必ず参観しなければならない授業を１つ選んで相互授業参観を行っている。今年は11月28日（月）２限目の「スタイル画」で行った。授業終了後合評会を行ない、座席指定に関するコメントや、学生の進み具合と授業進度についてのコメント等が寄せられた。

その他にも「カラーセラピー」には経営学部の教員が参観し、板書や学生ワークをスマートホンで撮影したりしていた。また「キャリアの基礎 II」には教育学部の教員が参観し、講評をいただいた。

４．学科独自の取り組みについて

(1) 資格取得について

ライフデザイン専攻では授業と資格がリンクしており、様々な資格にチャレンジするこ

とができる。表２と表３に令和４年度の学生の資格取得状況を示す。今年はサービス接遇検定が新たに加わり、準１級と２級を合わせて 14 人の合格者を輩出した。また色彩検定２級も 14 人が合格しており、昨年の２人より大幅に増加している。全体的に見ると、学生数が減少しているせいか、昨年に比べて受験者数が減少傾向にある。

表２．資格取得

検　定	級	合格者数	受験者数	欠席者数
秘書技能検定	2 級	6	9	1
	3 級	1	1	0
ビジネス文書技能検定	3 級	16	20	1
ビジネス実務マナー検定	3 級	21	39	1
サービス接遇検定	準 1 級	7	8	0
	2 級	7	8	0
医療秘書技能検定	3 級	8	29	2
ドクターズクラーク		8	9	0
MOS (WORD)		1	1	0
MOS (EXCEL)		6	6	0
MOS (PowerPoint)		3	3	0
色彩検定	2 級	14	15	0
	3 級	18	19	0
食生活アドバイザー検定	3 級	8	15	0
メイクアップ技術検定	2 級	15	16	1
	3 級	20	21	1
	ベーシック	10	13	1
ファッション販売能力検定	3 級	1	1	0
アソシエイトブライダルコーディネーター		1	1	0
建築ＣＡＤ	３級	0	1	0

表３．認定称号

認定称号	人数
秘　書　士	11
上級秘書士	7
ビジネス実務士	10
食空間コーディネーター3 級	12

単位取得で認定される称号については、今年から秘書士をビジネス実務士に変更している。そのため、令和３年に入学した学生が秘書士を取得し、令和４年に入学した学生はビジネス実務士を取得している。

(2) 就職支援について

令和５年３月に卒業した学生数は 93 人、そのうち 79 人が就職を希望し、76 人が就職を決定している（４月４日現在)。就職率は 96.2%である。なお文部科学省と厚生労働省が令和５年３月 17 日に発表した資料によると、２月１日現在の短期大学生の就職内定率は 86.8%であり、ライフデザイン専攻の同時期の内定率は 93.7%なので、それより高い。昨年度は内定が決まるのが遅かったが、今年は内定を早い時期に決めた学生が多く、夏休みが終わる頃には約 70%の学生が内定を決めてる。キャリアセンタースタッフによる迅速かつ的確なサポートが実を結んだ結果と考えられる。

なお卒業生 93 人のうち、進学者数は７人（本学への編入４人，他大学への編入１人，専門学校２人）であった。

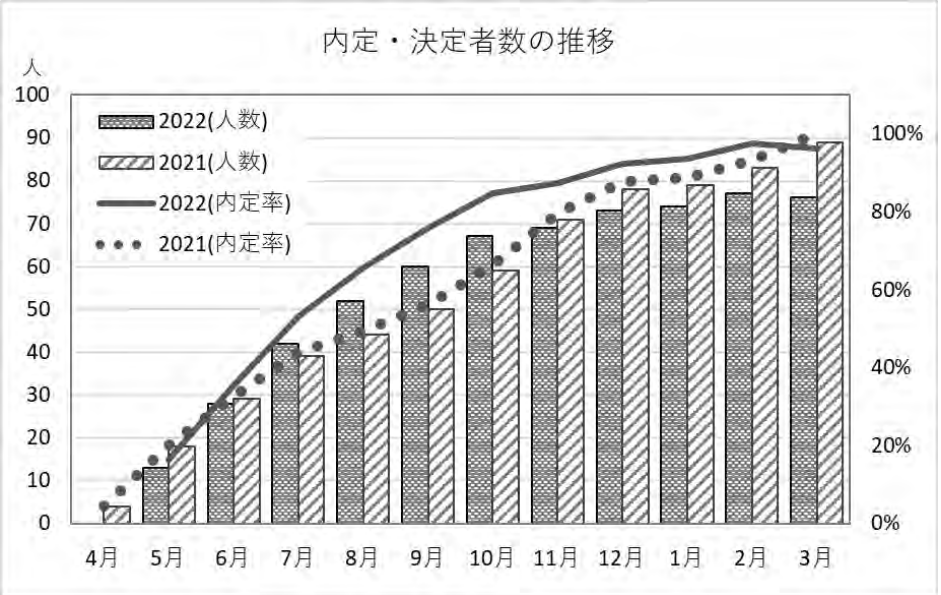


図４．就職内定（決定）者数の推移

※ ３月の値は、2022 年については４月４日現在の暫定値であり、2021 年については５月末日の最終確定値である。

(3) ライフデザイン学科における地域連携活動

① ライフデザイン実践演習について

ライフデザイン実践演習は、初年次教育科目に該当するライフデザイン・ゼミナールⅠに続くものとして新たに開講した授業科目である。就職活動に必要となる知識やスキルの修得を中心に学ぶライフデザイン・ゼミナールⅡと差別化し、複数フィールドにまたがる問題解決能力を養い、ジェネラリストとしての力を育むことを目的としている。ライフデザイン・ゼミナールⅡとは異なり選択科目であり、今年度は 11 名の学生が参加した。

令和４年度は、羽曳野市の児童養護施設高鷲学園の子供達に四天王寺大学で様々な体験をしてもらう取り組みを行った。今年度のテーマは「さつまいも」。いも掘りにはじまり、いも版で無地のサコッシュに模様をつけてマイバッグを作成したり、定番の料理教室「さつ

まいも入り蒸しパン」を一緒に調理した。事前にいも版や蒸しパンを試作し、子供達を指導できるように工夫を重ねた。作成した蒸しパンを持ち帰るためのラッピングを工夫するなど、フードとデザイン分野を横断して考える、ジェネラリストとしての力が育まれた。クリスマスシーズンにオーナメントを作成する企画もあったが、高鷲学園において新型コロナウイルス感染者数が増加したことによりキャンセルとなり、学生が作成したオーナメント（お菓子入り）をプレゼントする企画へと変更になった。さつまいもから抽出したでんぷん粉を糊として使い、和紙をその糊でつなぎ合わせて風船状のオーナメントを作成した。また、でんぷん粉を抽出した際に排出される繊維分を乾燥させて和紙状に固めてカードを作った。その上に「ゆめ」とメッセージを書いて合わせてプレゼントした。

最後に、10 月と 1 月の授業時に行った自己評価アンケートの結果を表４に示す。表の数値は各学生が５段階で評価した値の平均をとったものである。いずれの項目においても数値が上がっており、授業をとおして自己肯定感が高まったことがうかがえる。

表５．５段階評価による自己評価アンケート結果

項　目	10 月	1 月
親　和　力	2.7	3.5
協　働　力	2.7	3.2
統　率　力	2.7	3.3
感情制御力	2.8	3.4
自信創出力	2.8	3.3
行動持続力	2.5	3.2
課題発見力	2.2	3.0
計画立案力	2.1	3.0
実　践　力	2.3	3.2

② 「大阪生まれ」シリーズのネーミングとパッケージデザイン

昨年度の「大阪生まれのトレビスリゾット」に引き続き、JA 大阪市が進めるイタリア野菜のブランド化・普及に向けた取り組みへの協力として、大阪市内で生産されている野菜「フェンネル」と「ケール」を使った商品（スープ）のネーミングとパッケージデザインを行った。５月にＪＡ大阪市と商品加工を担当する幸南食糧株式会社の担当者からの説明を受け「フェンネル」「ケール」について学び、商品のネーミングやパッケージデザインについての議論を深めた。10 月７日にケーブルテレビＪ：ＣＯＭ（ジェイコム）の取材を受け、番組として YouTube（https://youtu.be/l4Et7SMtm_w）で公開中である。また 11 月 6 日にイオン藤井寺ショッピングセンターに於いて、11 月 20, 21 日あべのハルカス近鉄本店におけるイベントで対面販売を行い、３日間合計で 194 個を売り上げた。

③ 公民館子ども料理教室

8 月 10 日（水）に羽曳野市立陵南の森公民館「夏休み子ども企画・料理教室」を開催した。今年度も参加希望のキャンセル待ちが出るほどの人気教室だった。

本学科の学生は「小学生が作る夏のお菓子」をテーマにメニューを検討し、試作を通して子どもへの指導方法も考えながらレシピをまとめた。料理教室前日には材料の計量などの準備作業を行い、当日は学生１人が３人の小学生の指導を担当する形で運営した。ライフデザイン学科で学んだ製菓の知識や技術を活用するだけでなく、予算や作業時間、公民館調理実習室の使用可能な調理器具、コロナ感染予防のための種々の制限など、多くの条件をクリアする必要があり、学生にとってジェネリックスキルを身につける有意義な機会となった。

④ 地域の幼稚園児と取り組む衣服のアップサイクル活動

昨年度に引き続き、埴生南幼稚園に加え、羽曳が丘幼稚園へと活動の幅を広げ、衣服のアップサイクル活動を実施した。本活動は、園児から回収した古着をロゼットにアップサイクルすることによって、園児に対しては物を大切にする気持ちを育むこと目的とし、学生に対してはＳＤＧｓ目標 12「つくる責任つかう責任」を視野に環境配慮意識を高めることを目的としている。なお、本活動に参加した園児は、卒園式でロゼットを胸につけて卒園する予定である。

⑤ ９大学連携 繊維製品の廃材を活用したアップサイクル作品の百貨店販売

本活動は、国連のＳＤＧｓの実現に向けた取り組みをもとに、関西の９大学の学生と研究者らが、企業と協働しながら進めるものである。学生は、メーカーや繊維業者などから提供された繊維製品の廃材を活用し、アップサイクルしてアパレル小物やインテリア小物を制作した。この取り組みで制作した作品は、2022 年 9 月 2 日から 11 日になんばマルイで開催された「私たちのＳＤＧｓ～繊維製品の循環をめざして～」で販売された。なお本学科学生による売り上げは 11,450 円である（イベント全体での総売上は、258,150 円）。さらに会場のイベントスペースでは、「学校制服とＳＤＧｓ」と題した有限会社村田堂の長屋氏とのトークショーの司会・進行を学生が担い、会場を盛り上げた。なお、本イベントは、「京都新聞」「循環経済新聞」「繊維ニュース」などに広く掲載された。

⑥ 古墳時代の衣装製作・再現の試みと「古墳 ｄｅ ＩＢＵ」における衣装発表

世界遺産登録３周年を迎えた百舌鳥・古市古墳群の地域文化発信を目的とした、自治体・企業・大学連携イベント「古墳 ｄｅ ＩＢＵ」にて、ライフデザイン学科の学生製作による古墳時代の再現衣装を発表した。学生は約 20 時間をかけて、上下セット２パターン×３色展開の 12 アイテムの衣装と、廃材の木を活用したアクセサリーを製作した。これらの衣装は、教育学部の学生が作詞・作曲をした「古墳音頭」を地域のイベントや幼稚園などで披露する際に、着用されるとのことである。なお、本イベントは共同通信社を通じて、日刊スポーツ、中日新聞などに広く掲載された。

⑦ カラーユニバーサルデザインを活用した制作・作品展示

令和２年度より高齢者福祉施設「四天王寺きたやま苑」に於いて、授業で学んだ知識や技術を活かした、テーマに合う色や形を持つ作品を制作し、展示する活動を実施している。今年度も昨年に続き施設から依頼のあった入浴場暖簾制作を行った。入居者との遠隔交流を実施し、施設内の入浴場見学を行い、暖簾を使用する場所を実際に見ることでデザイ

ンを再検討し、必要な材料収集、計画を立てて暖簾を制作し、１月末に施設に届けた。

また、「敬老祝賀会」へのお祝いとしてコースターも作成した。ユニバーサルデザインの視点から、東京五輪（2021 年開催）で話題になったピクトグラム（絵文字）をもとにデザインした。高齢者特有のものの見え方を意識し、色使いに配慮してユニバーサルデザイン化した。学生は多様な人々に対する、よりわかり易い、安心な社会づくりに貢献するためのカラーデザイン力を養うことができた。

５．謝辞

ライフデザイン学科では、ゼミナール等の授業運営や資格取得にからみ、キャリアセンターや地域連携推進センター、入試・広報課など多くの職員の方々に支えられて学生指導を行うことができています。学科教員一同、これらスタッフの方々に日頃の支援に対し心より感謝します。

またライフデザイン実践演習では、人文社会学部人間福祉学科川下維信先生をはじめとする四天王寺大学ポタジエ・プロジェクトの学生の皆さんや、教育学部の吉田祐一郎先生より多大な協力をいただきました。ありがとうございました。

短期大学部 生活ナビゲーション学科 ライフケア専攻

１．はじめに

令和４年度から学生募集を停止している本専攻（社会福祉士及び介護福祉士法第 40 条第２項第１号に規定する介護福祉士養成校として指定）は、在学生全員が卒業する運びとなり令和５年３月 31 日をもって廃止となる。国家資格である介護福祉士とは、「専門的知識及び技術をもって、身体上又は精神上の障害があることにより日常生活を営むのに支障がある者につき心身の状況に応じた介護を行い、並びにその者及びその介護者に対して介護に関する指導を行う」と定義されており、本専攻のデイプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーに基づいている。

コロナ禍が続く本年度のＦＤ・ＳＤ活動は、「ライフケア演習Ⅲ」「ライフケア演習Ⅳ」、授業相互参観、そして学科独自の取り組みとして例年実施されてきたなかでは「介護福祉士国家試験受験対策」、また、新型コロナウイルスの流行のため中断していた「東北復興ボランティア」を３年ぶりに活動することができ、それらについて以下に報告する。

２．初年次教育等について

本専攻は、令和５年３月をもって廃止となるため、「ライフケア演習Ⅰ・Ⅱ」は、履修学生がなく実施していない。

(1) 「ライフケア演習Ⅲ」

本授業は、初年次教育の「ライフケア演習Ⅰ・Ⅱ」に引き続き、ライフケア専攻独自の演習科目として設定されており、介護福祉士資格を取得する学生の必修科目である。本年度は 12 名の履修であった。

【到達目標】

①介護職に求められる基本的態度、知識、技能を身につけることができる。

②人とかかわる介護福祉士等の自分の将来について考える契機とし社会人となるにあたり問題意識をもつことができる。

③介護の現状を把握し必要とされる介護実践力について理解することができる。

【授業計画】

目標を達成するために、以下の３点について取りくんだ。

① 「介護」の学習における総まとめとしての、介護実習報告会により情報共有し介護実践について考察する。

② 社会参加への第一歩として、就職活動への準備。

③ 介護福祉士国家試験合格のためのガイダンス及び模擬試験の実施。

４月 21 日レベルⅠ後半実習報告会の実施。5 月 3 回については、「介護」の変遷・介護活動の「場」及び対象の理解について復習。レベルⅡ実習終了後、6 月 23 日から

7 月 7 日の 3 回は、キャリアセンター職員と合同で就職ガイダンス、履歴書の書き方、面接試験の受け方を実施。7 月 14 日レベルⅡ実習報告会、最終回は、第一回介護福祉士国家試験の模擬試験を実施した。

(2) 「ライフケア演習Ⅳ」

【授業題目】　介護の知識を深める（専門職としての自覚・国試対策）

【履修者】在学生 14 名中 12 名が履修した（残り 2 名は介護福祉士受験資格を辞退したため履修していない）。

【概要】

短期大学での専門教育を集大成するため、介護福祉士資格を取得するための知識と技術を再確認することを目的とする。国家試験対策においては事前に作成した Youtube 動画やクイズアプリなどを活用し、時間外の学習もできるようにサポートする。

【到達目標】

介護・対人援助職に求められる知識・技術・態度を身につけることができる（具体例として、国家試験の合格を目指す）。

【テキスト】

中央法規出版の『国試ナビ』は、国家試験対策として出題必須項目をカラー、図式化しており、簡潔な説明で頭に入りやすい。過去の卒業生も、同書を中心に自宅学習し、合格に至る実績があった。このため同書をテキストとして採用、授業の説明時に同書をチェックさせ、そこに補足を書き込むなど活用した。

【授業進行】

受講生 12 名は全員、介護福祉士資格取得を希望しており、この授業の前後の３限・５限は「国家試験対策」として時間割を組んでいる（ただし、５限は教室を移動することになっている）。この４限の「ライフケア演習Ⅳ」も主に国家試験対策のための学習をサポートする授業として位置づけられた。基本的に自主学習が望ましいが、エンジンがかかるまではしっかりサポートをし、学習習慣を身につけることに力点を置いた。試験範囲も広いことから初回より３限から４限にかけて解説を行い、５限の自習に繋げるということを行った。

9 月 22 日　　第 1 回　中央法規模試（1 回目）の解説①（人間の尊厳と自立）

9 月 29 日　　第 2 回　中央法規模試（1 回目）の解説②（人間関係とコミュニケーション）

10 月 6 日　　第 3 回　中央法規模試（1 回目）の解説③（社会の理解 1）

10 月 13 日　　第 4 回　中央法規模試（1 回目）の解説④（社会の理解 2）

10 月 20 日　　第 5 回　介護福祉士全国統一模擬試験（過去）1 回目

この模擬試験結果を受けて、学生の理解度の低い「社会の理解」の教科をさらに細分し、介護福祉士に必要な基礎知識を身につけることを目指すことに変更した。

細分する内容については学生の意見から「介護保険制度を理解する」ことに決定し、第6回から順次取り組んだ。

10月27日　　第6回　介護保険の復習①（社会保険としての介護保険）
11月10日　　第7回　介護保険の復習②（被保険者、保険者、介護認定）
11月17日　　第8回　年金保険の整理（国民年金と厚生年金）
11月24日　　第9回　介護保険の復習③（介護給付）
12月1日　　第10回　介護保険の復習④（予防給付、地域密着サービス）
（授業参観対象授業）
12月8日　　第11回　2022年介護福祉士全国統一模擬試験（中央法規）2回目

介護保険についてはある程度の理解が深まってきていたので、次に学生の苦手分野でもある障害者福祉制度についても復習することにした。

12月15日　　第12回　障害者福祉制度の復習
12月22日　　第13回　障害者総合支援法の復習①（介護給付）
1月12日　　第14回　障害者総合支援法の復習②（訓練等給付）
1月19日　　第15回　障害児福祉サービスの復習

学生の苦手な分野に特化して授業で取り上げて詳説した。このため学生の「国家試験対策」として空き時間としていた３限や５限も活用して授業を行った。

しかし、当然ながら国家試験の出題範囲を網羅することはできなかった。授業で触れなかった教科については自宅学習に頼らなくてはならない。このため、自宅学習を促すため、「クイズレット」というアプリ（いわゆる電子単語帳）を紹介した。また、このアプリではグループで「対戦」するクイズ大会もできるので、第9回と第12回、第15回の授業時に復習チェックを兼ねて授業に取り入れた。何とか優位に立とうとグループで正解を考え、学習効果は高まったと思う。学生からも「楽しくて勉強になった」という声が多く聞かれた。グループの中で何度もキーワードとなる言葉が繰り返し出てくるので、耳からもそのキーワードに馴染むこととなり、国家試験問題を解くときにも有効だったと考える。

３．授業相互参観について

令和 4 年度冬学期のライフケア専攻の相互授業参観の公開授業一覧は以下のとおりで、武田教員は本専攻の担当科目がなく、人文社会学部人間福祉学科の科目を設定している。授業内容は、介護実習に関連している「事例研究」は、当日の参加者はなかったがオフィスアワーや他の時間に巡回指導教員が主となって学生の個別指導に当たり、専任教員間の情報共有も都度メールや専攻会議で実施してきた。介護福祉士国家試験の関連科目である「ライフケア演習Ⅳ」については、授業参観当日はライフケア専攻教員２名と教育学部教員１名の参加があった。授業後に合評会を実施し、授業の題材や進行などについての意見交換を行った。ただ、そのあとの参加教員からのコメントが実施した

教員には戻ってきていない。「ターミナルケア」は２名の教員の参加があった。学生の発表を基に、質疑応答、意見交換、まとめという授業進行だったこともあり、学生の発表態度等についてのコメントを頂いた。

	教員名	月日	曜日	時限	公開授業科目	教室
1	能田　茂代	12 月 7 日	水	2	ターミルケア	6-159
2	濵田　佐知子	12 月 6 日	火	3	事例研究	4B-154
3	大西　敏浩	12 月 1 日	木	4	ライフケア演習Ⅳ	6-159
4	武田　盛夫	12 月 7 日	水	3	介護演習	6-159.160

４.学科独自の取り組みについて

(1) 東北復興ボランティア 9/10～9/12

新型コロナウイルスの流行のため中断していた東北復興ボランティアを、３年ぶりに２泊３日の日程で実施した。事前に希望者を対象に震災の説明、原発事故の状況及び現状、放射線、ボランティアの心得等についてオリエンテーションを行い、保護者の同意のもと６名の学生が参加してくれた。現地では、震災遺構の見学、お世話になっている福島県南相馬市の「南相馬市ボランティア活動センター」にて被災者宅の草刈り、また、被災地支援のための観光地巡りをした。

今回の活動を通して、学生たちは地震や津波の恐ろしさ、また原発事故の影響の大きさを理解し、通常の備えの必要性や放射線に対する知識を得て、偏見を持たないことが大切であり、今後もさらなる支援が必要であると感じたようである。これまで引率は、東北に所縁のある武田盛夫専任教員の尽力により継続されてきた。本専攻は今年度をもって閉じるが、可能であれば大学として継続していただけることを希望している。

(2)「介護福祉士国家試験受験対策」

①対策方針

国家試験の合格点は、6 割の正答率を合格標準とするが、難易度によって変わる。問題数は 125 問であり、仮に 6 割であるなら 75 問の正答が求められる。難易度で合格点が上がることも考えると、80 点以上を目安として臨むことにした。

まずは、夏休み前に中央法規の全国統一模試を受けてもらうことにした（例年と同じ）。このことにより、自身の得意科目・不得意科目を把握することができる。また、学んでいない科目や勉強不足から得点は低いことが予測され、それが良い意味での危機感に繋がってくれることが願いであった。さらに、夏休み期間の学習の目安となることも期待としてあった。実際には 125 問に対する解答の「解説」を夏季休暇課題として、その説明を９月からの授業で行うこととした（これも例年と同じ）。

②取り組み

しかし、まだ夏休みの頃には「まだ時間がある」とばかりに学習習慣がない学生は相変わらずのんびりと取り組む様子が見られた。少しでも危機感をもってもらうため、カウントダウンカレンダーを学生自身が作成することを提案、日めくり式にすることで残り日数を意識させようと考えた。枚数を均等に配分し、役割分担して作成したが、それを忘れてしまう学生もおり、日めくりカレンダーとしては完成しなかった。

③模擬試験

実力チェックのため、「ライフケア演習Ⅳ」の授業や補講日の空き時間や学生の空き時間を活用し他教員の協力（試験監督その他）を得て、以下のように模擬試験を実施した。

１回目　8 月　2022 年介護福祉士全国統一模擬試験（中央法規）1 回目実施

２回目　10 月　介護福祉士全国統一模擬試験 1 回目（過去）

３回目　11 月　介護福祉士全国統一模擬試験 2 回目（過去）

４回目　12 月　介護福祉士全国統一模擬試験（中央法規）２回目実施

５回目　1 月　2023 年受験用問題集

５限まで授業がある火曜日を除いて、学生の希望に合わせて 6－159 の教室使用を教務課に依頼してきた。しかし、広い同教室より勉強しやすいとのことで７号館２階の自習スペースを用いて時間を決めてほぼ毎日グループで励まし合いながら自習に取り組む学生もいた。一方、自宅にてマイペースで学習する方が「感染対策にもなり、効率も良い」という学生もおり、その学習スタイルはさまざまで、その成果は上記のような模擬試験結果でしか見ることはできない。ただ、模擬試験となると目安としては 220 分必要となり、これは２コマ分を超えることになる。

したがって教員としては学習効果測定としてもっと頻回実施したいところであるが、学生の負担を考えの月１回の実施は適していたかと考える。

その結果は以下の通り

１回目　12 名受験、平均点（61.25、100 点換算 49.00）

２回目　12 名受験、平均点（56.58、100 点換算 45.27）

３回目　12 名受験、平均点（72.83、100 点換算 58.27）

４回目　11 名受験、平均点（75.73、100 点換算 60.58）

５回目　11 名受験、平均点（77.64、100 点換算 62.11）

３回目以降僅かずつではあるが、平均得点は上昇している。しかし、４回目・５回目は成績最下位の学生が体調不良等で不受験であり、それが平均点の上昇にも繋がっている)。

特に５回目においては、上位成績の者と下位成績の者との得点差が広がり、多くの不合格者を出してしまうのではないかという懸念が広がった。

１月に入ると、日常的に国家試験やその対策の話を授業内外で教員が意図的に話し、また学生も不安感も相まって口にするようになっていた。

④国家試験

第35回国家試験は、令和５年１月29日（日）に大阪府ではインテックス大阪にて筆記試験が行われた（学生たちは実技試験は免除される）。同日夜から翌日にかけていくつかのサイトで「解答速報」があり、それで自己採点をすることができる。その自己採点の得点結果を教員が集約した。

その結果、12名受験、平均点（97.50、100点換算78.0）という成績であった。100点以上の者が8名もおり、11名が合格水準を超える80点以上を獲得した。毎回最下位の学生は、勉強不足であったと本人が認めるとおり64点で合格水準に達していなかった。

第４章　本学における仏教教育について

Ⅰ　基礎教育科目「和の精神」について

１．カリキュラム上の位置づけとその課題

本学における「基礎教育科目」は、本学の建学の精神である聖徳太子の仏教精神を実践的に学ぶ「和の精神Ⅰ・Ⅱ」（１年次）、仏教的学識の基礎の修得と宗教的情操の体得をめざす「仏教概説」（１年次）を柱とし、これに人間存在のかけがえのなさを考える「現代社会と人権」を加えた、都合４科目６単位が必修科目となっている。なお、平成 30 年度の入学生以前の旧カリキュラムでは、基礎教育科目は「仏教Ⅰ（瞑想）・Ⅱ（写経）」「仏教概説」「現代社会と人権」の４科目６単位が必修であった。とりわけ「和の精神Ⅰ・Ⅱ」（計 2 単位）は、大学・短大の 1 年次の全学生 1,200 名以上が礼服（オフィシャルスーツ）を着用し、学長を始めとして全教員とともに大講堂に会し、読経・瞑想・聞法（講話）・写経（後期のみ）・聖歌斉唱といった実践的な授業を行っている。これは規模的にも内容的にも、本学における特色ある科目の一つである。各学科専攻で行う専門的な学修を果実とすれば、「和の精神Ⅰ・Ⅱ」のめざす人格の涵養はその根柢といえる。

平成 24 年度から仏教文化研究所が設立され、学長のもと、主任研究員を中心に、数名の研究員が本学の仏教教育の方針や内容を策定し、宗教委員会の議を経て、企画立案・実施・点検を行う体制が整い、令和 4 年度で 10 年目を迎えた。下記に示す「和の精神授業規律」「講話内容」「アンケート」等はすべてその体制のもとで整えられたものである。

もっとも、本科目は 1,200 名を超える超大人数授業であるため、実施する上での課題（資料の提示方法、音響、空調、出席・成績管理、個別指導のあり方など）も少なくない。そのため運営・管理には教育職員・事務職員の全学的な協力が必要であり、とりわけ授業実践の「道場」である大講堂内では各学科専攻の教育職員の積極的な取り組みが不可欠となっている。

２．大講堂内における指導体制

平成 25 年度の後期から、これまで明確とはいえなかった大講堂内における教員の指導の役割を検討し、下記のとおり明確化して、毎学期の宗教委員会・合同研修会などで周知徹底を図り、現在に至っている。

(1) 責任担当　学長

学長は、「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の教育内容・運営の全体の監督、教育内容・方法および運営の総責任者である。教育内容・方法および運営については、学長が仏教文化研究所に指導方針案の策定を指示し、宗教委員会の検討を経て決定するものとする。

(2) 全体担当　仏教文化研究所研究員

仏教文化研究所研究員は、「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の教育内容の進行・運営について、所定の指導方針に沿って主導的な立場で従事し、出席や授業態度にもとづいて最終的な成績評価を行う。

(3) 学科担当　(1)(2) 以外の全教員

「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の授業は、全教員の指導によって行うものである。各学科担当の教員は、学科専攻学生に身近な教員として、主に堂内における私語・中座など授業態度の改善や静謐な環境の保持の面において、所定の方針および学科の取り決めに従い、注意喚起や個別指導に当たる。

(4) 宗教委員

宗教委員は宗教委員会に学科専攻の状況を伝えるとともに、委員会での決定事項を学科専攻に伝え、学科長とともに学科専攻での指導の在り方を取り決める。

令和４年度の授業実施についてであるが、1,200 人を超える学生を大講堂に一堂に集めることにコロナ禍における感染症予防の観点から懸念があったため、履修者の１／３数に対して大講堂による対面授業を行い、残り２／３数はオンデマンド授業を交互に実施するハイブリッド授業を実施した。授業の実施に関して学生の多くが満足しており、学生の満足度も相応に高い状況を維持できている。客観的な数値による詳細は後述のアンケート結果を参照されたい。

３.「和の精神Ⅰ・Ⅱ」授業中における授業規律について

仏教文化研究所において 24 年度に「『仏教』の授業規律」を策定し(24 年度末・令和元年度末に一部改定)、25 年度からは、毎年『履修要覧』に掲載している（下記参照)。

以後、各学科専攻のオリエンテーションで学科ごとに指導の姿勢を示してもらうよう要請し、かつ学期初めに「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の授業の冒頭に改めて教務部副部長（礼拝担当）より「和の精神授業規律」を示し、学生に規律の自主的な遵守を求めてきた。

「和の精神Ⅰ・Ⅱ」は自他を尊重し、思慮深く、安定した人格を養うことが主眼であり、強制によって規律を守らせるのが本意ではなく、授業の主旨として、学生が主体的に自覚して上記の規律の遵守を心がけることの重要性を強調している。

「和の精神Ⅰ・Ⅱ」授業規律（2020．2．26 一部改訂実施）

礼儀を正して静穏な環境で自らを省み、自他を尊重し、思慮深い安定した人格を養うことが「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の授業の目的です。主旨を自覚し、下記の規律を遵守してください。

1. 単位の認定は、全授業回数のうち 3 分の 2 以上の出席を必要条件とする。
   写経の場合、写経用紙の提出も必要条件とする。なお、以下の 2・3・4 の項目に違反する場合は出席を認めない。
2. 出席時の服装は、指定された服装を端正に着用する。
   ・Ａタイプ・オフィシャル・スーツ（ジャケット・ジャケット用スカート)、白色ブラウス、黒色の革の短靴。
   ・Ｂタイプ・オフィシャル・スーツ（ジャケット・ジャケット用スラックス)、白色ブ

ラウス、黒色の革の短靴。

・Ｃタイプ・オフィシャル・スーツ（スーツ用ジャケット・スーツ用スラックス）、本学指定ネクタイ、白色カッターシャツ、黒色の革の短靴。

※Ａタイプ・Ｂタイプで夏服時に襟なしシャツ着用の場合、オフィシャル・スーツのジャケットを着用すること。

※黒色の革の短靴：くるぶしにかからないもの、スニーカー不可、就職活動やインターンシップで着用するようなカジュアルでないもの。

3. 入堂時には『聖典聖歌集』を所持していることを示す。

4. 授業は午前 10 時 55 分開始である。開始前には入堂し着座しておく。

・遅刻は駅で発行する電車の延着証明書があり、やむを得ない遅刻と判断される場合にのみ入堂を認める。

※原則として、電車以外の延着は認めていません。

・延着証明書は１人１枚を必要とする。複数人で１枚しかない場合は、入堂を認めない。

5. 授業中は姿勢を正し、静寂を守り、実践に集中する。

6. 授業中の私語・通信機器等の使用は禁止する。

・注意されたら、すぐに改める。

・再三の注意にかかわらず改めない者については、授業妨害と見なし、改善が認められない場合は、欠席扱いとし、保護者にも教務部より状況を伝える。

7. 授業中の中座は原則として禁止する。

・やむを得ず手洗い等を利用する者は、学生証を階段前の教員に提出する。

8. 心身の疾患など、やむを得ない中座の理由の有る者は、診断書などの証明書をもって学生支援センターに授業配慮申請を行うか、教務部教務課（礼拝担当）に申し出る。座席変更などの配慮を行う。

9. 私語・通信機器等の使用・中座等について、改善の意思がない場合は、「授業妨害」「建学の精神に反する行為」と見なし、その学期の「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の履修登録を抹消する。

４．和の精神Ⅰ・Ⅱにおける改善

平成 24 年度から、これまで２年間にわたって履修した「仏教Ⅰ～Ⅳ」が１年次の「仏教Ⅰ・Ⅱ」のみとなり、時間的には短縮化された。しかし、そのことによって教育内容が希薄とならないよう、これまでと同様に、その点に留意した授業計画を組んで「和の精神Ⅰ・Ⅱ」に継承している。「和の精神Ⅰ・Ⅱ」各科目の留意点、講話一覧は以下の通りである。

① 和の精神Ⅰ（夏学期）

和の精神Ⅰでは，基本的にはこれまでの通り、「礼拝（瞑想）・講話・仏教聖歌の斉唱」を基本として、授業を行っている。ただし、今年度はコロナ禍への対応として対面・遠隔のハイブリッドで授業を実施しており、対面授業の際には読経・聖歌斉唱に関して学生は心の中で唱える形で実施しており、聖歌の斉唱指導は行わなかった。

講話については、第２回目の授業での学長による「本学の建学の精神及び全体的な仏教精神に関する講話」を受けて、研究員による一貫性のある講話を基調に据えながら、将来のキャリアと和の精神とのつながりを解く内容など講話の充実を図っている。また、例年は初回の授業から、本山四天王寺において開催される「授戒会」のオリエンテーションも行い、参加に向けての心構え等も指導している。尚、今年度の授戒会は、学科ごとに割り当てられた大学内の各会場にて、大講堂で行われる様子をモニターで視聴しながら実施する遠隔分散実施となった。

そして、例年どおり、今年度も学外講師として、弁護士の成田由岐子先生を招聘し、今年度は「学生生活とリスク社会について～犯罪に巻き込まれない、起こさないために～」と題する講話を動画でしていただいた。身近な犯罪の防止等に関する内容などを盛り込み、隣り合わせにある犯罪の危険に学生も認識を新たにしたはずである。

さらに、和の精神の学修上の意義について学生への周知・理解をはかるために、杉中康平教授からの講話を行っていただいた。

和の精神Ｉで行われた講話は次の通りである。（敬称略。☆は仏教文化研究所構成メンバー）

＜夏学期実施　和の精神Ｉ＞

Ｎｏ	日程	担当者	講話／聖歌
1	4/14	藤谷厚生先生☆ 坂本光徳先生☆	「受講こころえ ――授業規律に関して/礼拝説明」 「授戒オリエンテーション」 聖歌『聖徳太子讃仰歌、四恩の歌、精進』
2	4/21	須原祥二学長☆ 藤谷厚生先生☆	「『建学の精神（聖徳太子と和の精神)』について」 「『ウパーヤ』について」 聖歌『聖徳太子讃仰歌』
3	4/28	坂本光徳先生☆ 伊達由実先生	「読経概論・瞑想 ――心を整える楽しみ――」 「大学生活の心得」 聖歌『精進』
4	5/12	杉中康平先生☆	「『和の精神』を学ぶ意義」 「学修ポートフォリオの目標設定について」 聖歌『父母の歌』
5	5/19	藤谷厚生先生☆	「四天王寺学園、建学の歴史」 聖歌『父母の歌』

6	5/26	成田由岐子先生	「学生生活とリスク社会について～犯罪に巻き込まれない、起こさないために～」 聖歌『常不軽菩薩』
7	6/2	中田貴眞先生☆	「学園訓 ――礼儀について――」 聖歌『常不軽菩薩』
8	6/9	奥羽充規先生☆	「学園訓 ――誠実について――」 聖歌『学園歌』
9	6/16	矢羽野隆男先生	「学園訓 ――和について――」 聖歌『みめぐみの』
10	6/23	仲谷和記先生	「コロナ禍　感染予防について」 聖歌『聖夜』
11	6/30	南谷美保先生☆	「仏像を知ろう」 聖歌『聖夜』
12	7/7	原祐子先生	「『聖歌』について」 聖歌『学園歌』
13	7/14	奥羽充規先生☆ 学生有志	「グローバル教育研修と和の精神」 聖歌『みめぐみの』
14	7/21	高橋麻起子課員	「薬物乱用と薬物依存を防ぐために」 聖歌『父母の歌』
15	7/28	杉中康平先生☆ 藤谷厚生先生☆	「学修ポートフォリオの記録について」 「夏学期を終えるに当たって」 聖歌『聖徳太子讃仰歌』

②和の精神Ⅱ（冬学期）

「和の精神Ⅱ」は「和の精神Ⅰ」の「礼拝（瞑想）・講話・仏教聖歌の斉唱」に写経を加え、より実践的に仏教について学べるようにしている。これは、24 年度から 2 年間の「仏教Ⅰ～Ⅳ」が 1 年間の「仏教Ⅰ・Ⅱ」に短縮されたのを受け、従来、「仏教Ⅲ・Ⅳ」ではもっぱら写経だけを行っていたものを、写経だけでなく、講話等も行うことにし、「和の精神Ⅱ」に継承されたものである。ただ講話の時間が写経の時間を圧迫しないように配慮する必要から、写経の時間を最低 20 分は確保すべく、講話は 10 分～15 分ほどに短縮することとしている。しかし、実際には、講師によっては講話に熱がこもり、やや延長する場合があり、その時には写経の時間の確保が難しい場合もあり、例年のアンケートで「写経の時間は必ず確保してほしい」といった不満の声が一部に出ているのも事実である。

和の精神Ⅱで行われた講話は次の通りである。（敬称略。☆は仏教文化研究所構成メンバー）

＜冬学期実施　和の精神Ⅱ＞

Ｎｏ	日程	担当者	講　　話／聖　歌
1	9/22	坂本光徳先生☆ 仲谷和記先生 藤谷厚生先生☆	「冬学期授業について」 「写経の効果」 「ウパーヤについて」 聖歌『聖徳太子讃仰歌』
2	9/29	福光由布先生	「写経の仕方・作法」 聖歌『聖徳太子讃仰歌』
3	10/6	坂本光徳先生☆	「写経について」 聖歌『父母の歌』
4	10/13	李美子先生☆・学生編集委員	「聖徳太子ゆかりの寺院」 聖歌『父母の歌』
5	10/20	南谷美保先生☆	「写経と『経供養』」 聖歌『四天王寺学園　学園歌』
6	10/27	奥羽充規先生☆	「『納経』の勧め ――巡礼の視点から――」 聖歌『四天王寺学園　学園歌』
7	11/10	藤谷厚生先生☆	「聖徳太子の教えと言葉」 聖歌『四天王寺大学学歌』
8	11/17	グローバル教育センター（学生・奥羽先生☆）	「異文化を通して学んだこと」 聖歌『四天王寺大学学歌』
9	11/24	上野舞斗先生☆	「『卒業生インタビュー』から考える『和の精神Ⅰ・Ⅱ』の意義」 聖歌『みめぐみの』
10	12/1	矢羽野隆男先生☆	学園訓「誠実」について 聖歌『みめぐみの』
11	12/8	千葉一夫先生	「人権とは何だろうか？ ――私たちにできることを考える――」 聖歌『聖夜』
12	12/15	上續宏道先生☆ 杉中康平先生☆	「聖徳太子と福祉の心」 「学園訓のエピソード入力について」 聖歌『聖夜』
13	12/22	能田茂代先生・現職の卒業生・２年生学生	「ライフケアの学びを永遠に」 聖歌『父母の歌』

14	1/12	中田貴眞先生☆ 展示内容企画・作成学生	「和の精神 ――花と暮らす――」 「『絵伝』から聖徳太子を知ろう」 聖歌『父母の歌』
15	1/19	須原祥二学長☆ 藤谷厚生先生☆	「終講にあたって」 「まとめ」 聖歌『聖徳太子讃仰歌』

５．アンケートの実施

①アンケート実施授業

令和４年度は「和の精神Ⅰ」のアンケートを１回、和の精神Ⅱのアンケートを１回実施した。令和４年度入学の学生と再履修生を対象とする。

また、令和 4 年度よりアンケート項目が変更されていることによりアンケート結果については比較ができない項目が多数ある（下表「－」の項目）ので、その項目については結果報告のみとする。

＜和の精神Ⅰ＞

設問	大学		短大	
	令和4年度	令和3年度	令和4年度	令和3年度
１．授業での先生の説明は、分かりやすかったですか。	4.24	－	4.07	－
２．授業の資料やスライドは分かりやすかったですか。	4.31	－	4.18	－
３．授業の学習効果を高めるためにパソコン、スマホやインターネット等の ICT が活用されていましたか。	3.97	－	4.21	－
４．先生は、授業中の問いかけや小テスト・課題などによって、学生の理解度を確かめながら授業を進めていましたか。	3.32	－	3.40	－
５．学生同士や教員との間で意見や考えを伝え合う機会があったと思いますか。	2.73	－	2.82	－
６．授業で扱った内容に深く興味・関心を持つようになりましたか。	3.86	－	3.63	－
７．授業で学んだ内容をもとに、自分で調べたり考えたりしましたか。	3.42	－	3.03	－
８．毎回の授業について、予習復習や課題作成にかけた時間をすべて合わせて、平均してどれくら	1.66	－	1.44	－

い学習しましたか。 ※5 択「4.5 時間より多い」「4.5 時間以内」「3 時間以内」「1.5 時間以内」「30 分以内」				
９．あなたは、履修要覧の授業科目編成表にあるディプロマ・ポリシーの「身につけるべき能力」をよく読んだ上で、この授業を受講しましたか。	3.56	－	3.38	－
１０．あなたは総合的に判断してこの授業を受講して良かったと思いますか。	4.02	4.19	3.93	4.08

＜和の精神Ⅱ＞

設問	大学		短大	
	令和4年度	令和3年度	令和4年度	令和3年度
１．授業での先生の説明は、分かりやすかったですか。	4.18	－	4.12	－
２．授業の資料やスライドは分かりやすかったですか。	4.17	－	4.09	－
３．授業の学習効果を高めるためにパソコン、スマホやインターネット等の ICT が活用されていましたか。	4.12	－	4.25	－
４．先生は、授業中の問いかけや小テスト・課題などによって、学生の理解度を確かめながら授業を進めていましたか。	3.57	－	3.51	－
５．学生同士や教員との間で意見や考えを伝え合う機会があったと思いますか。	3.08	－	3.08	－
６．授業で扱った内容に深く興味・関心を持つようになりましたか。	3.85	－	3.78	－
７．授業で学んだ内容をもとに、自分で調べたり考えたりしましたか。	3.54	－	3.43	－
８．この授業について、担当教員の指導に沿って意欲的に取り組みましたか。	4.19	－	4.25	－
９．毎回の授業について、予習復習や課題作成にかけた時間をすべて合わせて、平均してどれくらい学習しましたか。 ※5 択「4.5 時間より多い」「4.5 時間以内」「3 時間以内」「1.5 時間以内」「30 分以内」	2.08	－	1.81	－

１０．この授業を受けて、シラバスに示されている到達目標にどの程度到達できたと思いますか。	4.10	－	4.04	－
１１．あなたは総合的に判断してこの授業を受講して良かったと思いますか。	4.12	4.20	3.98	4.34

② アンケート結果の分析

アンケートの回答は、各質問項目について、５「そう思う」、４「少しそう思う」、３「どちらともいえない」、２「あまりそう思わない」、１「そう思わない」のうちから一つ選ぶ形で行った。数値はその平均値をとり、３が中間的な評価、５に近いほど高い評価を示すことになる。なお、和の精神Ⅰの設問８．と和の精神Ⅱの設問９．「毎回の授業について、予習復習や課題作成にかけた時間をすべて合わせて、平均してどれくらい学習しましたか。」の回答は、１「4.5 時間より多い」、２「4.5 時間以内」、３「3 時間以内」、４「1.5 時間以内」、５「30 分以内」とした。

「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の結果を主な項目について比較すると、次の通りであった。

大学・短大共に、「あなたは総合的に判断してこの授業を受講して良かったと思いますか。」の項目が、前年度に比べわずかに下降している。平均４点前後の数値で高いまま安定しているが、やはり全面的に対面ではないことを残念に思う学生の気持ちの表れであろう。授業内容や授業形態についても評価する学生が多く、教員・職員全体の取り組みが一定の成果を出したものと言える。

ただ、現状に満足は出来ないので、今後も更によい授業になるよう緊張感をもって運営を進めたい。

③ アンケート自由記述欄

アンケートの「自由記述欄」は、学生が自由に、授業環境や内容への感想を記すことができるものであり、ここには上記のマーク方式の回答からはわからない学生の考え感想をうかがうことができる。今年度もアンケートの自由記述欄から〈所属学科〉〈記述内容〉を仏教文化研究所で通覧したのち、宗教委員会で各学科専攻の宗教委員に伝えた。

今年度は、和の精神Ⅰ・Ⅱで以下のような感想が多くあった。

（1）〈内容〉に関するもの

- 和の精神は四天王寺大学に入ったからこそ受けられる講義だと思います。仏教の歴史や仏像などわかりやすく伝えて頂けるので理解が深まっています。
- 初めて仏教に触れたのが、この和の精神の授業だったので私自身の良い経験になったと感じています。また、堅苦しいものだと思っていましたが私たちに関係のある内容が多かったので自分に置き換えて考えることが出来ました。
- 中学・高校と宗教学校であったからか分かりませんが、献灯をする際に聖徳太子さんお顔を見れたことが凄く光栄に思えました。普段の授業では近寄ることができなかったので嬉しいかったです。さらに、般若心経を心の中ではありますが毎回読

経することが楽しかったです。

- いろいろな分野の話が専門の方から聞けたところがよかったです。
- 学校の歴史について学んだり、人として成長するためにはどうしたらよいか、日常生活に潜む危険、留学のお話など幅広いジャンルのトピックの講話だったのでとても勉強になりました。
- 実際に学生の方の講話を聞くことができたり，この学校で学ぶ上で仏教についてたくさん講和してくださったりしたことがすごく印象的で、他ではできない経験だったなと思います。
- 先輩方の講話の時は、生徒の立場での意見がわかるのですごくためになりました。
- 写経という今までした事のない経験ができました。自分の中で集中力が上がったような気がします。

（２）〈指導・管理〉に関するもの

- 時間や服装に厳しい部分もあるがきっちりした授業は必要だと思う。
- 抜き打ちテストみたいなのがなくてしっかり事前に説明して、課題やテストを出していた。
- 単位認定のために必要な条件がはっきりしていない。必須科目なのに、あの指示の出し方では、単位取得のための行動が取れない。

（３）〈実施形態〉に関するもの

- 先生の説明がわかりやすかったです。
- 話をするときにたとえ話や先生自身の体験をあげて話してくださったのでわかりやすく、つまらないと感じることが少なかったので良かったです。
- 数少ない、大学部の子たちとの対面なので、楽しみにしていました。
- 皆で聖典聖歌集を持って般若心経など読経する（コロナの影響で心の中でではあるが）点がよかったです。
- ICT を多量に使っていて理解しやすかった。
- 先生の話やスライドの進むスピードが少し早いと感じました。
- 対面・オンデマンド授業の両方で、マイクの不調なのかお話がとても聞き取りづらいことがありました。特に対面授業はオンデマンド授業のように巻き戻して聞き直すことができないため、改善できる部分であれば改善していただきたいです。
- 対面の時、講話のスピードが早いので、学生達のテンポに合わせて講話を行って欲しい。
- 対面授業のレポート作成時、発表者のタイトルと名前がわからないことが多かった。最初のスライドに記載して、すぐに進まないようにしてほしい。
- 講話の際のスライド、その時の人によっては遠くからは見えにくい文字の大きさだったことが多かったので遠くに座っていても見えるように作って欲しい。または別で資料を配布するなどして欲しかった。

（４）〈設備〉に関するもの

・ マイクが大きすぎて中で聴くと何を言っているかわかりません

・ 大講堂の中が夏は暑くて、冬は寒かった。

これらのうち、改善できるものは改善を図っている。

Ⅱ　共通教育科目「仏教実践演習」について

１.「仏教実践演習」の目的と授業展開

この科目は旧カリキュラムの基礎教育科目「仏教Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」（卒業必修科目）が、平成 24 年度からの新カリキュラムでは「仏教Ⅰ・Ⅱ」（同上）に圧縮されるのに伴い、旧Ⅲ・Ⅳで行っていた内容を行いたいという学生や、さらに深い学びを希望する学生のために、共通教育科目における選択科目（3 セメスター以上配当）として設けた科目である。仏教実践の背景にある仏教の思想についても考えながら、瞑想・写経の意義や実践の方法を説明し、Ⅰ・Ⅱで学んだ実践行をさらに深めてゆくものである。

例年は夏学期の水曜２限に１コマ、講堂において、聖徳太子像の掛け軸を掛け、読経・瞑想・講話・写経などを行い、聖歌斉唱を行わないほかは「和の精神Ⅰ・Ⅱ」と同様の形式で実践的な授業を展開しているが、今年度の授業も、遠隔実施という状況であったため、オンデマンドでの動画を作成し、各回の動画を期限内に視聴してレポートを作成し、学生のペースで写経を実施するように指示した。

２．授業内容

講話内容は、仏の智慧をめざす修養方法である六波羅蜜に関するものを中心に、日常生活での実践に有用と考えられる仏教の教えに関する講話を行っている。また、今年度も「お遍路さん」といった具体的な仏教実践行についての講話も行った。

以下のその詳細を掲げる。

講話一覧

回数	講話担当者	講話題目
1	奥羽　充規　先生 藤谷　厚生　先生	授業オリエンテーション 仏教実践とは
2	藤谷　厚生　先生	六波羅蜜について
3	西岡　秀爾　先生	布施波羅蜜 ――慈悲を施すこと――
4	藤谷　厚生　先生	持戒波羅蜜 ――戒律を守ること――
5	西岡　秀爾　先生	忍辱波羅蜜 ――苦難を忍ぶこと――
6	奥羽　充規　先生	私と仏教① ――聖地巡礼――

7	西岡　秀爾　先生	精進波羅蜜 ――努力を重ねること――
8	西岡　秀爾　先生	禅定波羅蜜 ――精神を調えること――
9	奥羽　充規　先生	私と仏教② ――巡礼と仏――
10	藤谷　厚生　先生	般若波羅蜜 ――仏教実践と智慧
11	奥羽　充規　先生	私と仏教③ ――巡礼実践――
12	西岡　秀爾　先生	聖徳太子の教え
13	西岡　秀爾　先生	般若心経の教え
14	藤谷　厚生　先生	菩薩と和の精神
15	藤谷　厚生　先生 奥羽　充規　先生	仏教実践演習（まとめ） 授業連絡

３．アンケートの実施

本年度も、本授業のアンケートを実施した。

質問項目	令和 4 年度	令和 3 年度
１．授業での先生の説明は、分かりやすかったですか。	4.35	―
２．授業の資料やスライドは分かりやすかったですか。	4.27	―
３．授業の学習効果を高めるためにパソコン、スマホやインターネット等の ICT が活用されていましたか。	4.17	―
４．先生は、授業中の問いかけや小テスト・課題などによって、学生の理解度を確かめながら授業を進めていましたか。	3.73	―
５．学生同士や教員との間で意見や考えを伝え合う機会があったと思いますか。	3.16	―
６．授業で扱った内容に深く興味・関心を持つようになりましたか。	4.00	―
７．授業で学んだ内容をもとに、自分で調べたり考えたりしましたか。	3.95	―
８．毎回の授業について、予習復習や課題作成にかけた時間をすべて合わせて、平均してどれくらい学習しましたか。	2.33	2.40
９．あなたは、履修要覧の授業科目編成表にあるディプロマ・ポリシーの「身につけるべき能力」をよく読んだ上で、この授業を受講しましたか。	4.21	4.11
１０．あなたは総合的に判断してこの授業を受講して良かったと思いますか。	4.19	4.20

アンケート結果の分析

今回も昨年同様オンライン授業であったが総じて良好に授業が進められた。

令和 4 年度よりアンケート項目が変更されていることによりアンケート結果については

比較ができない項目が多数ある（表中「－」の項目）ので、その項目については結果報告のみとする。

アンケートの回答は、各質問項目について、５「そう思う」、４「少しそう思う」、３「どちらともいえない」、２「あまりそう思わない」、１「そう思わない」のうちから一つ選ぶ形で行った。数値はその平均値をとり、３が中間的な評価、５に近いほど高い評価を示すことになる。なお、設問８.「毎回の授業について、予習復習や課題作成にかけた時間をすべて合わせて、平均してどれくらい学習しましたか。」の回答は、1「4.5 時間より多い」、2「4.5 時間以内」、３「3 時間以内」、４「1.5 時間以内」、５「30 分以内」とした。

ほとんどの項目において、評価の平均が４前後であった。高い評価ではあるが、設問５.「学生同士や教員との間で意見や考えを伝え合う機会があったと思いますか。」が 3.16 となっている。やはり実践行として対面授業を期待した学生が多かった為であろう。しかしながら、自由記述では下記の通り授業内容および授業形態に関しては総じて満足しているようであった。

来年度以降に向け、更によい授業になるよう一層の工夫をして努めたい。

＜自由記述欄＞

・ 他では中々教えてくれない仏教に関することを学習したことがよかった。
・ 仏教の教えだけではなく、巡礼のやり方や寺院にお参りする時の礼儀などを教わり、勉強になりました。
・ オンデマンドでしたが、動画がわかりやすくて、とても良かったです。
・ この授業では 3 人の先生によって授業は進められていましたが、どの先生も資料や写真などを使ったりしていました。重要な個所などは時間をかけ丁寧に説明などをしていたので分かりやすかったです。

Ⅲ　仏教教育に関するその他の取り組み

１．仏教文化研究所の活動

平成 24 年度から、当時の西岡研究所所長（学長）の下、主任研究員（矢羽野）および研究員（上續・兼子・藤谷・源・桃尾・南谷恵敬）が任命された。研究所内には仏教教育センターが設けられ、研究所の主任研究員・研究員がセンターの構成員を兼務し、本学における仏教教育の内容・方法を検討し実施してゆく体制が作られている。28 年度からは、学長の岩尾洋研究所長のもと、坂本光徳、杉中康平、奥羽充規の三氏が研究員に加わり、あらたな一歩となった。さらに 29 年度は、中田貴眞、南谷美保の２名が加わった。また、３０年度からは石田陽子、令和２年度には李美子、そして令和 3 年度には上野舞斗が加わり、現在は主任研究員（藤谷）の他９名の研究員（専任教員）により、さらなる研究の充実を目指し、積極的に活動している。

研究所の具体的な活動としては、「和の精神Ⅰ・Ⅱ」授業計画の策定、堂内の全体指導および指導体制の検討、提出された写経の点検評価、仏教教育広報誌「ウパーヤ」の編集発行等である。広報誌「ウパーヤ」は、本学の建学の精神や仏教の教学を身近に感じ、理解を深

めてもらうことを目的に年に二回発行し、大短在学生・学園教職員および保護者へ配布するもので、令和 4 年度には 21 号・22 号を発行することができた。1 年次の学生には入学直後のオリエンテーションで配布し、和の精神（仏教教育）の涵養に役立てている。また、令和 4 年(2022)は四天王寺学園創立 100 周年を迎える節目に当たり、建学の理念である「和の精神」や学園訓の理解と実践を薦めるため、なお一層の紙面の充実を目指して取り組んだ。

特に「ウパーヤ」のトピックである「聖徳太子のゆかりの地めぐり」のコーナーでは、26 年度から学生編員を募集して取材・執筆を依頼している。21 号・22 号でも引き続き学生編集員がウパーヤ誌上、研究所ＨＰに学生ならではの観点で記事を執筆してくれた。今後も仏教に対する学生の興味関心を深める活動として継続していきたい。

２．今後の取り組み

建学の精神を学部・学科・専攻の学修のなかに具体化し、理想とする学生を世に輩出していくことは、私学の最も重要な目的であり、また社会的な使命でもある。本学でも「アドミッション・ポリシー」「カリキュラム・ポリシー」「ディプロマ・ポリシー」の三つのポリシーにおいて、聖徳太子の仏教精神を各専門教育の根幹に据えた教育を展開していることを明記し内外に公表している。

これまでにも、各学期初めのオリエンテーションや大学１年次の「大学基礎演習」においては、建学の精神に関わる内容を組み込むことを各学科に要請してきた。今後も、和の精神を体現する様々な取り組みや活動を紹介し、大学全体での建学の精神の浸透に励みたいと考える。

令和元年度から、「学園訓」を体現し、実践できる人材を育成することを目指して、それまでの「仏教Ⅰ・Ⅱ」の授業科目名を「和の精神Ⅰ・Ⅱ」と改め、その内容の充実と建学の精神の涵養を図るよう引き続き取り組んでいる。

今後も「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の授業では、仏教文化研究所メンバーによる仏教関係の講話を主軸にし、その本質の部分を大切にしながら、聖徳太子が帰依された仏教に基づく「和の精神」を核として学べるよう、さらなる授業の充実と工夫に努めていきたい。

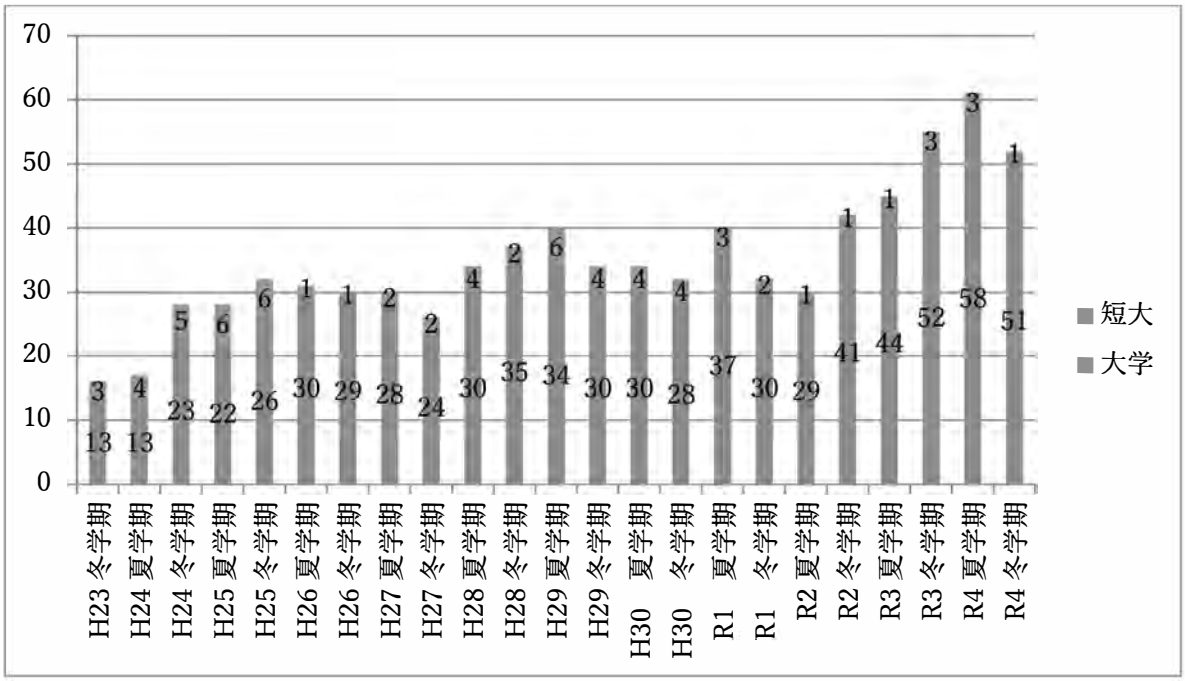
第５章　学生支援センターが取り組む学生支援について

1. 障害学生への「授業配慮申請システム」について

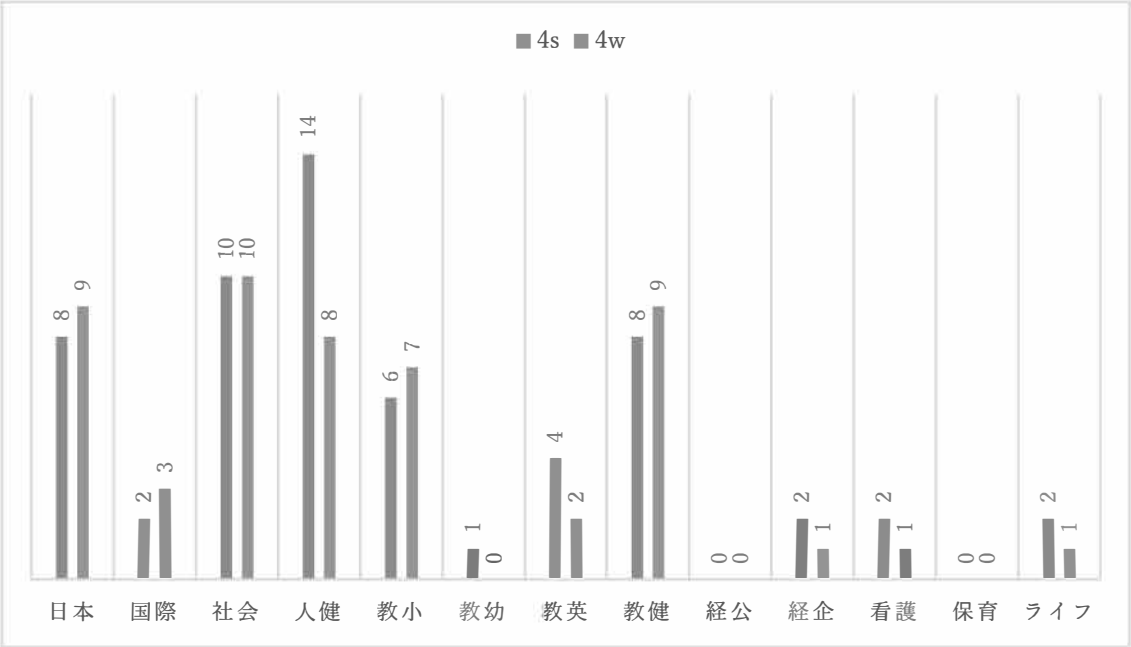
（１）本年度の概要

本年度の配慮者数、障がいの内容、配慮申請学科については以下の図の通りである。配慮申請する学生数は引き続き漸増傾向にあるとともに、精神疾患や不調による配慮申請の割合が増加しており、配慮内容も多様化する傾向がみられる。

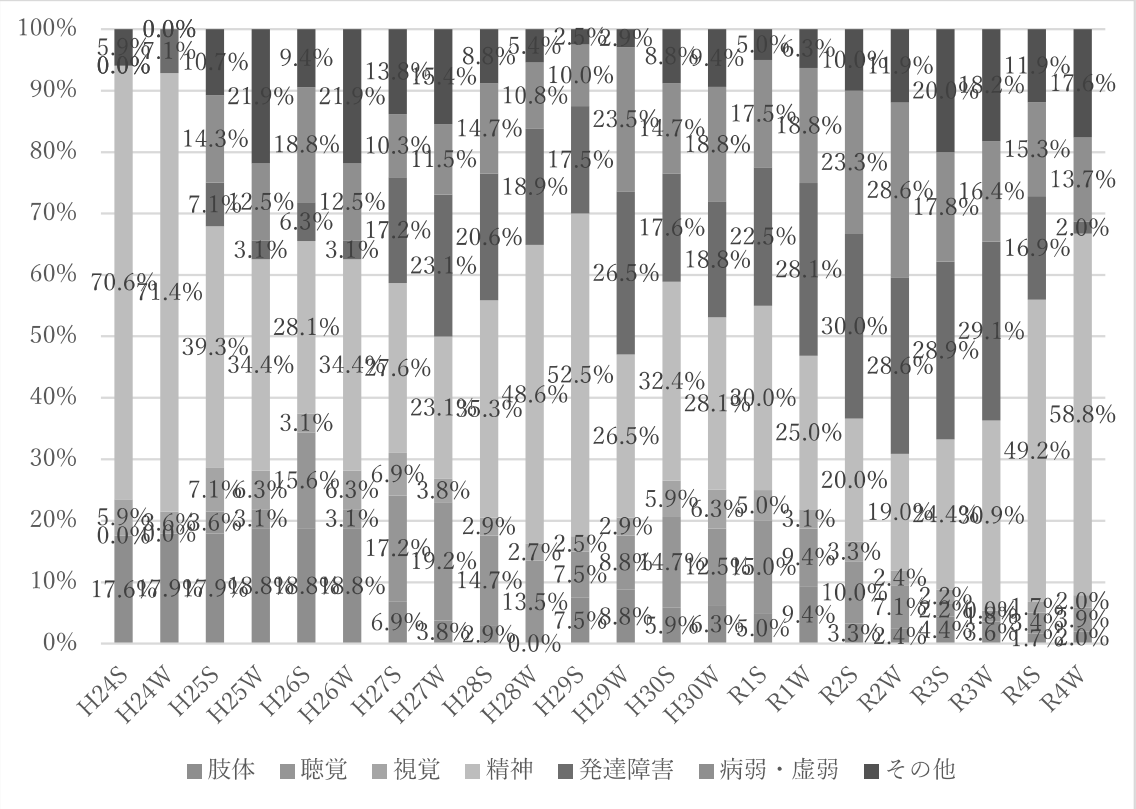
＜図-1 授業配慮申請システム申請者数経年変化＞



＜図２令和３年度配慮申請の学科別数＞



＜図３授業配慮申請システム障害種別割合の経年変化＞



（２）課題

令和 4 年度は新型コロナウイルス感染症の影響がようやく薄れる中で、対面授業の割合も増加し、それに伴って授業配慮についてもいくつかの課題が生じた。一つは、遠隔授業（オンライン、オンデマンド）という人間関係のわずらわしさの少ない授業形態から、対面に授業形態が変わったことで、人間関係に困難さを抱える学生が、精神不調等をきたして配慮を求めるケースが増加しつつある点である。もう一つはそこから派生して、引き続き遠隔授業を受けたいという希望にどこまで応えるべきなのか、という問題である。次年度は対面授業が基本となるであろうことから、授業配慮としての遠隔授業をどのように運営していくのか、教務課はもとより、教員とのすり合わせも必要になってくるものと考えている。

なお、本年度「学習に困難を抱えた学生」を対象として開始された「学習サポートデスク」スタッフ、教員の協力のもと継続的に運営が進んでいる。学生の居場所として、学修サポートデスクとそれを含むラーニングコモンズが適切に利用されるよう、様々な施策を展開していきたい。

２．ピアサポーター・リメディアル教員による学習・生活支援

本年度はコロナの影響が薄れたのであるが、ピアサポーターについては、十分に活動を展開できなかった。理由としては、コロナ禍の中で活動継続が困難であったため、活動の継承ができておらず、対面活動が復活してもすぐに再開できなかったことがあげられる。困難な中でサポーター募集に手を挙げて参加してくれた意欲のある学生たちであったが、何をす

べきなのかがはっきりしない中で、モチベーションを保つことが難しかったであろう。そんな中で、学年末の状況改善に伴って、久しぶりに「ハルカス出張相談会」が実施できたことは、次年度へ希望をつなぐ取り組みであった。以下、学内のラーニングコモンズでの取り組みと、出張相談会について利用状況などを示す。

（1）令和４年度ピアサポート・サポートデスク・リメディアル教員利用について

ピアサポーターはコロナ禍中ではあったが４月入学直後の新入生を対象に履修相談会を実施した。そのため、４月の利用者が最も多い結果となった。

学習サポートデスクは、夏学期に周知不足もあったのか、利用者が少なかった。また、学期終わりに駆け込み的に利用するものもおり、継続的に学習をすることができるようにサポートするという本来の目的からはずれた利用も見受けられた。そこで、冬学期始まるにあたって、学生支援委員の先生方を中心に、各学科にサポートデスクの存在を再度アピールしてもらうとともに担当職員からも個別にアプローチをするなどして、冬学期に関しては学期当初から多くの利用者を見るに至った。

協力教員への相談が 0 という数字になっているが、実際にはピアタサポーターの相談に乗るなど、適切に業務を行っていただいている。

＜令和４年度ピアサポート・サポートデスク・リメディアル教員利用者集計＞

	ピアサポーター	学習サポートデスク	リメディアル国語	リメディアル英語	協力教員事務員	計
4 月	85	2	24	3	0	114
5 月	34	0	69	5	0	108
6 月	45	6	33	10	0	94
7 月	32	11	34	13	0	90
8 月	閉室	0	閉室	閉室	0	0
夏学期計	196	19	160	31	0	406
9 月	14	26	3	3	0	46
10 月	28	35	26	8	0	97
11 月	9	16	18	4	0	47
12 月	18	22	30	5	0	75
1 月	32	9	33	8	0	82
2 月	閉室	閉室	閉室	閉室	0	0
3 月	閉室	閉室	閉室	閉室	0	0
冬学期計	101	108	110	28	0	347
年間計	297	127	270	59	0	753

（２）「あべのハルカス出張相談会」について

３年ぶりで実施することになったが、経験者がすべて卒業してしまっているため、教員主導で研修を行い実施にこぎつけた。全員が初めての参加であったが、多くの新入生の質問を受けて、やりがいのある活動となった。これをきっかけに、学内でのサポートにも積極的に参加してくれるのではと期待している。

①実施要項

実　施　日：令和５年２月 15 日（水）～21 日（火）６日間
　　３月３（土）、４日（日）、11 日（土）、12 日（日）４日間
　　（いずれも 10 時～16 時）

実 施 場 所：阿倍野近鉄百貨店制服売り場及び IBU あべのハルカスサテライトキャンパス

参 加 人 数：学生 29 名
　　教員４名

相談者人数：新入生 178 名
　　保護者 172 名

②相談内容と件数（相談総件数 357 件）

相談内容	件数	相談内容	件数
服装・持ち物	75	生活全般	13
部活・運営委員会	74	寮・一人暮らし	7
授業・履修・時間割	55	資格	5
バス・通学	29	留学	5
大学・学科の様子	19	勉強・テスト	4
バイト	16	ピアノ	4
入学式・オリテ	15	奨学金	2
教職・実習	14	サテライト見学	1
パソコン	13	その他	6

３）令和５年度ピアサポート活動に向けて

新規サポーター募集に応募した学生を対象にした研修会を３月 22 日に、既存のサポーターも参加して対面で実施し、新しい企画の相談なども積極的に行ってくれている。次年度は久々に制限のない中での活動となる。学生たちには、過去に行っていたことに加えて、自分たちの発想で新しい企画を進めるよう指導を行っている。「学生のための学生によるサポート」にふさわしい彼らなりのサポートを実施してくれることを期待したい。

第７章　ＳＤ活動の取り組みと今後の課題

1. ＦＤ・ＳＤ研修会の実施について

［趣　旨］

従来FD研修会・事務局全体研修会として別々に実施していたが、教育職員・事務職員が連携して今後取り組むべき課題を発見し、社会の変革に対応し、時代に則した教育を展開できる能力・資質を向上させるため、教育職員・事務職員を対象とした「FD・SD研修会」を開催した。

二部構成とし、第一部は積極的で適正な活用が望まれる「SNSの効果的な活用について」、第二部はメンタル疾患が増加していることから「メンタル疾患の概要について」を取り上げた。

［日　時］

令和5年2月21日（火）13：00～16：50

［場　所］

本学5号館5-303

［対　象］

教育職員及び事務職員

出席　207名（教育職員123名、事務職員84名）＊録画視聴を含む

［講師及びテーマ］

（第１部）

講師　道端　俊彦氏（㈱ミチバタ・ジャパン・リミテッド　代表取締役）

テーマ「SNSの効果的な活用について」

（第２部）

講師　渡辺　徹也氏先生（ゴゥクリニック　院長）

テーマ「メンタル疾患の概要について」

［内　容］（第１部）

テーマ「SNSの効果的な活用について」

・ＳＮＳとはなにか（なぜＳＮＳなのか）

・ＳＮＳの最近の動静（最新情報、現状のトレンド）

・ＳＮＳの種類、利用方法、特徴

・ＳＮＳを利用する際の課題（問題点）、リスクトラブル等

・ＳＮＳの活用方法（学生指導、授業改善、情報収集）

・ＳＮＳを使った情報発信（大学広報、情報発信）

（第２部）

テーマ「メンタル疾患の概要について」

・メンタル疾患の症状の例、代表的なメンタル疾患

・ＡＤＨＤ、ＡＳＤ、ＬＤについて

・神経内科とは、心療内科とは、心身症とは、精神神経科について

・統合失調症の症状、躁鬱病（気分感情障害）の症状
・メンタル疾患の主な原因、メンタル疾患の治療
・投薬治療について、カウンセリングと心理療法について
・メンタル疾患の特徴、問題について
・メンタル疾患の予防治療のヒント
等

［アンケート］

研修会終了後アンケートを実施､特に第二部では約 7 割の職員が有意義と感じ、約 6 割の職員がメンタル疾患の予防と改善に役立つと評価した。何れの項目も非好意的回答は、1 割程度に留まった。

［総　括］

従来 FD 研修会・事務局全体研修会として別々に実施していたが、SD 委員会と高等教育推進センターと連携し、教育職員・事務職員を対象とした「FD・SD 研修会」として開催した。今年度は既に企画していた SD 研修と FD 研修の合同開催というレベルに留まったが、多数の教育職員及び事務職員が参加した。今後は、さらに、教育職員・事務職員が連携して今後取り組むべき課題を発見し、社会の変革に対応し、時代に則した教育を展開できる能力・資質を向上させるため取り組みを行う。

以上

四天王寺大学・四天王寺大学大学院・四天王寺大学短期大学部
ファカルティ・ディベロップメント委員会規程

第１条　この規程は、四天王寺大学、四天王寺大学大学院および四天王寺大学短期大学部（以下「本学」という。）ファカルティ・ディベロップメントの企画立案事項の審議・推進を図ることを目的として、ファカルティ・ディベロップメント（以下「ＦＤ」という。）委員会（以下「委員会」という。）を設ける。

第２条　委員会は、第１条の目的を達成するために、次の事項について企画立案し、ＦＤ活動の推進にあたる。

（１）授業内容、方法および、評価に関する事項

（２）授業の改善に関する事項

（３）その他、ＦＤの目的達成のために必要な事項

第３条　委員会の委員長を高等教育推進センター長とし、他の委員を次のように構成する。

（１）高等教育推進センター副センター長（委員長を補佐し、委員長に事故ある場合は、その業務を代行する）

（２）学科長が学科・専攻所属の専任教職員就業規則に規定された教育職員、特別任用教員および有期・無期職員就業規則に規定された特別任用教員と協議の上、選任した委員

（３）高等教育推進課長

（４）その他必要に応じて委員長が任命する委員

第４条　委員は、学部学科等の代表として委員会に参画し、全学的見地ならびに学部学科等の特性に応じて、委員会で審議された結果を学部教授会で報告する。また、必要に応じて学部の意見を集約したものを委員会で報告・審議する。

第５条　委員の任期は１年とする。ただし再任を妨げない。

第６条　委員会は委員長がこれを招集して、その議長となる。

第７条　委員長が必要と認めた場合は、委員以外の本学教職員に委員会への出席を求め、その意見を聴くことができる。

第８条　この規程の事務は、高等教育推進センターが所管する。

附　則

１　「学生アンケート委員会規程」は平成１８年４月１日から施行する。

２　「学生アンケート委員会規程」は平成１９年３月３１日をもって廃止し、「ファカルティ・ディベロップメント委員会規程」を平成１９年４月１日より施行する。

３　この規程は、平成２０年４月１日から一部改正し施行する。

４　この規程は、平成２２年４月１日から一部改正し施行する。

５　この規程は、平成２５年４月１日から一部改正し施行する。

６　この規程は、平成２７年４月１日から一部改正し施行する。

７　この規程は、平成３０年４月１日から一部改正し施行する。

８　この規程は、平成３１年４月１日から一部改正し施行する。

９　この規程は、令和３年８月１日から一部改正し施行する。

スタッフ・ディベロップメント委員会規程

（目　的）
第１条　この規程は、四天王寺大学大学院、四天王寺大学および四天王寺大学短期大学部職員としての資質の向上を図り、もって大学経営および大学改革を推進することを目的として設置されるスタッフ・ディベロップメント（以下「ＳＤ」という。）委員会（以下「委員会」という。）の運営等に関し必要な事項を定めるものとする。
（組　織）
第２条　委員会は、次に掲げる者をもって組織する。
（１）事務局長
（２）総務課長
（３）人事課長
（４）教務課長
（５）就職課長
（６）学生支援課長
（７）その他事務局長が必要と認める者
２　副学長は、必要に応じてＳＤ委員会に出席する。
（委員の委嘱）
第３条　前条に定める委員は事務局長が任命する。
（委員長）
第４条　委員長は、事務局長がこれにあたる。
２　委員長は、委員会の会議を召集し、その議長となる。
３　委員長に事故あるときは、あらかじめ委員長が指名する委員がその職務を代理する。
（委員の任期）
第５条　委員の任期は１年とする。ただし、再任を妨げない。
（審議事項）
第６条　委員会は、次に掲げる事項について審議する。
（１）ＳＤの企画立案に関する事項
（２）ＳＤの推進計画に関すること
（３）ＳＤの実施に関すること
（４）その他ＳＤ推進に必要な事項
（委員以外の出席）
第７条　委員長が必要と認めた場合は、委員以外の者の委員会出席を求め、その意見を聞くことができる。
（所掌事務）
第８条　この規程に関する事務は、人事課が所管する。

附　則
この規程は、平成２７年４月１日から施行する。

令和４年度
四天王寺大学 四天王寺大学短期大学部
ＦＤ・ＳＤ報告書

編集・発行　四天王寺大学
ファカルティ・ディベロップメント(ＦＤ)委員会
スタッフ・ディベロップメント(ＳＤ)委員会
住　所　大阪府羽曳野市学園前３丁目２－１
ＴＥＬ　０７２－９５６－９９１０
ＦＡＸ　０７２－９５６－３８９１
E-mail　koto@shitennoji.ac.jp